
よだれがでるほどこのせかいをあいしてる。

明日から名字が封獣になるます

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

よだれがでるほどこのせかいをあいしてる。

【Nコード】

N1353U

【作者名】

明日から名字が封獣になります

【あらすじ】

現在の世界に意味を見出せず、140年間というバカみたいな時間を死後の世界のために費やした男がいた。

そしてその男はある日ついに死を迎えた。

そして、その男は神なる者と出会いを果たし、見事に転生の権利を得た。

チート能力も得て、ステータスもチート化されて、もう何も怖くない！

そう思い、男は転生先の世界へと向かった。

すると、なんとういうことだ、容姿は女体化しているじゃないか。しかもなんだ、この世界は。モンハンヨロシクなラギアクルスもどきな龍は平然と存在するわ、自分以外の知性ある生物は存在しねえわ、しかもヤケにどっかの時間を司る黒髪赤目のセーブ係にそっくりな神の使いは『そいつ等を食え』と言う！

全てが予定調和のようだったが、全てが最初から破綻していた。シリアスをコメディでぶち壊したい作品です。

ようやくプロローグが終了。チビチビと原作キャラと主人公の病気っぷりが現れはじめました。

散々書いてますが、中身はバカな駄文なんで死ねよゴラ。と思いつつごらん下さい。

恐らくきつとキャラ崩壊があります。ご注意ください。

そしてハーレム物のような何かです。俺の嫁はわたさねえッ！
！と言う人はバックトゥーザフューチャーするのをお勧めします。

前半は東方キャラが全く出ませんが、その内ちびちびと出てきます。

30000PV突破。ありがたや、ありがたや

30000ユニーク突破。やったねたえちゃん！

全部の始まり、あるいは原因。（前書き）

なんだよ、この作品。わけがわからないよ。

まあ、何となく笑っといってください。笑えもしなければ罵ってください。

白髪ロリは死滅する種族だったようです。よって主人公の容姿を変更しました。

警告をくれたタケブ様に多大なる感謝を。

オリキャラの過去なんざどうでもいい！さっさと東方キャラ出せクス！

という方は五話からどうぞ。大して凝った設定もないので飛ばしても大丈夫です。

そして、八話までは殆どテンプレ展開なんで、テンプレ（笑）見飽きた死ねよ粗製が！という方は八話までスキップ敬称です。

全部の始まり、あるいは原因。

「話をしよう……あれは今から36万……いや、何億年も前だったか……」

「私にとってはつい昨日の出来事だが、君たちにとっては多分」

「明日の出来事だ」

何を言っているんだろうか。
もう一度言おう。

何を言っているんだろうか。

この目の前のイケメンはいつたい何を朝っぱらから鏡の前で練習してるのだろうか。

いや、大体分かるが。

何を やっているんだ？

「……何しとる？」

「フフフ……最近外の世界じゃこのスタイルが流行っているようにね、真似してみたよ」

黒シャツに黒ジーンパンを着てそんな事をほざいているのは以外にも神の使いだ。

神の使いらしい。

神の使い……なんだろうか？

「流行……流行、乗ると回りと同じになるから目立たなくならんか？」

「ろつとお！ それは私も思っていたことだが それを言った
ら終わりだろう」

まあ、そうだが。

……しかしまあ、何で俺は神の使いと話しているか。
そもそも、神の使いを見て冷静な判断をしているか。
その理由を話すには……何処から話せばいいか。
とりあえず、時は今からけっこう昔に遡る 。

準備は完璧だ。

俺は完璧に準備を整えた。

「父さん……」

「お爺ちゃん……」

「ひいお爺ちゃん……」

俺の周りには七つの家族がいる。

全部、俺の子孫だ。

というか。

がんばった。

俺、がんばった。

「まさか……140まで生きるなんて……」

うん、なんか人間辞めた気分だわ。これ。

「正確には142よ……」

俺はこの百四十二年間、千七百四月間、五万五百五十二日間、百
二十一万三千二百四十八時間
ひたすらに準備をしてきた。
何のための準備かって？
そりゃ、死後の為の準備だ。
死んだら、どうなるか。
それを知る人間はこの世には存在しない。
なら、今のうちに準備するべきだ。
備えあれば憂いなし。

「あああ、ああ……」

「お爺ちゃん！？ 何か言いたいことがあるの！？」

家族の一人が俺へと話しかけてくる。

遺言、か……。格好いいことを言ってみたいものだ。

……そうだな、昔国語の教科書で読んだ遺言を残すか……。

「『困難は分割せよ』、わしのこの言葉を忘れるな……」
「……………ルロイ修道士？」

ヤベエ、知ってる奴がいた。
気まずい。

早く！ 早く来てくれ迎え！！

俺は格好いいお爺ちゃんのまま死にたいんだ！

ああ、暗くなってきた。

深く、優しい暗さだ。

吸い込まれるように、飲み込まれるように、深い深い眠りにつく
ように、ゆっくりと。ゆっくりと俺の脳は。。。

あれ？

おかしい。

死んだはずなんだが。

立っている？

俺が、立っている？

それに、ここは。

灰色のブロックが重力を無視して均等に並び、灰色と黒の二色に支配された世界。

空には多くの流星が輝き、月がなくとも十分な程異常な明るさを放つ星光に支配された世界。

アラキエルの墓標？

アラキエルの墓標だろ、絶対。

「Happy birthday to you……」

そんな感じに幻滅と混乱に襲われる俺を更に混乱させる自体が起きた。

「Happy birthday to you……」

一人の男がケーキを作りながらハッピーバースデーを口ずさんでいるんだ。

つつか。

鴻上会長じゃねえか！！

何！？ 何なの！？ 死後の世界ってこんなにカオスなの！？
シャダイと特撮まざっとるがな！！

「遅かったじゃないか……」

ジャック・O!?

マジでカオスじゃねえか!

何でゲイブン!?

「言葉は不要か……」

必要だよ! 何ジョシユア・オブライエンみたいな感じにまとめようとしてるのコイツ!?

俺は! いますぐ! この状況について! 詳しい説明を求むね!!

「冗談だよ、さて……それより、君は随分と欲深い人間だったようだ」

「いや、待ってくれんかの。それ以上にいろいろと突っ込みたいんじゃないが」

「何かね、その無理矢理な爺言葉は」

「いやあ、キャラ作りしようと思ったが、これしか思い浮かばなかった」

死後の世界では目立ちたかったんだ、俺。

「まさか、死後の世界の事を考えてキャラ作りまでするとは……死んでもなお、生き続けようとするその欲望……素晴らしいイツ!」

あ、マジモンの鴻上会長だ。

「ああ、そうそう。この世界や私の姿、それは君の心理状況の産物だ。よって……これから考えられる君の本質は欲望にただただ純粹で、それ以外には無機質……まさに欲の塊だ」

さすが神の世界。世界レベルで人間を表すとは……恐れ入る。

「立場上、君のような人間には罰を与えたいところだが……、その生きすぎた欲望、殺すのは非常に勿体無い」

神、それでいいのか。

神ってのは無慈悲で身勝手な存在だと思ってたんだが……つうか、わりと神話とかじゃそうだよな。

「というわけで……ご期待通り、転生させよう」

……………転生？

神は何を言っているんだ？

転生。

転生、転生、転生……。

転生っていうと、あの、死んだヤツがチート能力を授かって転生先の世界でハーレム作って『ゲヒヤヒヤヒヤ！ 笑いが止まんねーぜ！』とか言ったり『楽しすぎて狂っちまいそうだ！』とか言うあれか。

実に。

実に素晴らしいイツ！！

「フウウオオオオオオオオーンッ！！！」

俺は歓喜のあまりアルマロス並の雄叫びを上げた。

「ハハハ、この程度で喜んでいては身が持たないぞ？ 更に能力も授けよう」

「フウウオオオオオオオオーンッ！！！」

お決まりの展開と知っていても叫ぶしかない。

叫んで、叫んで、叫ぶ。

叫びとは人間の本质を表すもんだ。

「君の能力……まあ、追々教えよう。次に君の容姿だが……ルーレットで決める」

「フウウオオオオ……え？」

「さあ！ ルーレットスタートだ！ 己の運命を自分で決める！最低でゾンビ、最高で自由設定だ！」

最低酷過ぎるだろ！？ これはゾンビですか？ いいえ、動く死体です。

なんて事を考えていたら手元にダーツが現れる。

「「「パージェーロ！ パージェーロ！ パージェーロ！」」」

そして謎のコール。

投げろってか、投げろってのか！！

投げるよ！ 投げればいいんだろ！！

「ええいままよ！ あの子に届け、わしの邪心！！」

ひょうふつと音を立てて見事にダーツは直線を描き、ルーレットを貫通してそのまま遙か遠くへと飛んでいく。

……どういうことなの？

というより、ルーレット盤も一緒に吹き飛んだから容姿がどうなるのか確認できない。

怖っ。

「ふむ、後で確認しよう！ さて、君の転生先だが……」

いやまて、後でが多すぎる！ 怖いんだが！？

「その前に言っておこう、君には不老不死の特性を追加しておく、詳しく言えば細胞が再生する。超再生する。クレア・ベネットの五十倍ぐらいのスピードで」

なにその完全無敵、上下に割ったら二人に増える的な。

「ついでにその他諸々も結構なステータスに設定しておくが……まあ、後は自分で調整してくれ」

結構コイツ投げやりだぞ！？

本当に大丈夫なのか！？

「で、行き先だったな……そう、君の行き先は……お楽しみということだ」

適当つつつか、なんつつか！

段々怖くなってきたぞ！ 俺！！

「あ、一つだけ頼んでいいかの」

「何かね？」

「東方は全く知らないからやめてくれ、いや、フリとかそんなんじゃない」

「ああ、分かったよ……それじゃあ、新しい君の誕生だ、コレにあわせ、君に一つの言葉を送ろう……」

鴻上会長チックな神は大きく息を吸い込んで。

「ハッピーバースデーッ!!」

マジ鴻上会長。

眼を覚ます。

広がるのは無限の蒼。

その内苦しくなつて、胸の中の空気を全て吐き出す。

そして代わりに大量の水を飲み込む。

出落ち!?

そう思ったが、別段苦しさは感じない。

何やら水中でも呼吸ができるらしい。

便利なんだか、不便なんだか……。

さて、恐らく先ほど口にした時に分かったが、ここは海だ。

海か、海だよな。

そう思った、直後、恐ろしい殺気を感じ、急いで深く潜る。

直後俺の上を巨大な鮫……いや、巨大なメガロドンが通り過ぎた。

超スピードで。

いやいやいやいやいやいやいやいやいや!!

サ、サメ類つてのはね!?! 浮袋を持たないから普通巨大化すれ

ばするほど遅くなるはずなんだ!!

なんだ!?! あの速度は!!

卑怯すぎるでしょう!?!

俺は思わずその巨大なメガロドン、いや、超ド級の馬鹿げたデカさの肉食系水中生物の姿を追う。

すると、ソイツはギリリと無機質な瞳を此方へ向け、大口を開けて急速に迫ってくる!

俺は思わず上と上がり、水面から顔をだす……って何やってんだ

アアアアアアア！！！！

水面からじゃ下のあのバケモノの位置は特定できない！

このままじゃ、食われて死ぬ！？

ど、どうすりゃ、あばばばば……。

そんな風に混乱している間に足元から吐き気を覚える殺意を感じ、思わず上に跳び上がる。

。といつても、人間にそんな水中から飛び上がるなんて芸当は不可

……。あれ？　なんでいま、俺、宙を飛んでるの？

そして、何故目の前に地面が。

「ぐえっ」

可愛らしい少女の声と共に俺は地面に激突した。

……可愛らしい少女！？

すぐに海面へと近づき、自分の顔を見る。

髪はどす黒くて、眼は深い緑色、顔は整っていて、幼さを残しながらも凛々しさがある。

あ、アザゼル。アザゼル配色！？

そして、頭の上には巨大な歯が迫っており、今にも頭を噛み砕かれそ。

「うえあああっ！？」

思わず横に転がる、そして、数秒前まで俺がいたところを巨大な刃が削る。

思わず見て見ると。

モンスターハンターにいそうな海龍っぽい何かが此方をギラリと見た。

……な、なあにこれえ？

「……ッッ！！！！」

そして、青トカゲは俺を食う為に大口を開けて突進してくる。
よし、今だ、放て！ 怒りのマシンバイ……シャダイ砲！

「その醜い面を吹き飛ばしてやるZEEEEEEEEEE！！！」

勢いよくトリガーを引く。

直後、極太の青いレーザーが噴出した。否、波動砲だ、コレ。

そして、その波動砲は見事に青トカゲの顔を吹き飛ばし、そのまま虚空へと消えた。

……。

なんだこりゃ。

「初めてにしては上出来じゃないか」

いい感じに混乱していると、何処から現れたのか、焼け跡の上から黒シャツに黒ズボンのイケメンが歩いてきた。

「……」

「おっと、別段怪しい奴じゃないさ。言うならば、そう 神の
使い。かな」

ルシフェル。

ルシフェルがいるよお母さあああああん！！

俺はどれだけシャダイ脳なんだ……。

「さて、早速だが、お前の能力について説明させてもらっよ」

無残な姿になった青トカゲの上に腰掛ながらルシフェルチックな

神の使いはそう言い放ち、俺はその言葉を聞き、奴の言葉に集中する。

「お前の能力は『知恵を支配する程度の能力』だ……。悪いね、私も忙しくてな……。今日の所はここまでで勘弁願うよ」

「ちょ、待ッ！！」

俺が止める前にヤツはカァン！ と無駄にいい音の指パッチンをして消える。

……身勝手すぎるでしょう……。

しかしまあ、あれこれ言っても仕方が無い、なので。

能力考察コーナー！ いえー！ ドンドンパフパフ。

……さて、俺の能力の名前は『知恵を支配する程度の能力』。

うん、この名前からして嫌な予感しかない。

『程度の能力』っていう命名方法は、俺の知らない未知のカテゴリ……。

東方Projectのモノなんだ。

うん、ここ。

東方の世界か……。

やめてくれと言ったのに、畜生め。

まあいい、能力の考察に戻るか……。

俺は物凄いシャダイ脳だ。何故か。

よって、恐らく『知恵』ってのはシャダイ的な考えをしての知恵だ。

ようは、アーチとか、ベイルとか、そんなん。

つまり、知恵の名の下に様々なものが生成できる。

さっきみたいな砲台然り、ビニール傘しかり、時間を掛ければ巨大な口ボだつて作れるかもしれない。

簡単に言えばそれぞれの知恵にあった存在を作成できる。はず。近接格闘の知恵なら『剣』とか、自分を守る知恵なら『盾』とか、

場を一掃する知恵なら『シャダイ砲』とか。
そんな感じだと思う。思いたい。

「……チートか、チートか？ チートか……」

しかしまあ、とりあえず……腹が減った。

不老不死ってことは別に何も食べなくてもいいんだろうけど、気分的に何かを食べたい。

何を食おうか。

……。

そこらの草？ いやいや、毒があるかもしれない。

海の魚？ いやいや、もうメガロドン先生はいいです。

……じゃあなにか。

目の前の……青トカゲを食うしかない……。

ト、トカゲはっ、鶏肉っぽい味するって言うしっ、オイシソウダナー！

そ、そそそれにっ、これだけ大きくて強そうな生物ならっ、毒もないだろうしっ。

いっぱいあるしっ。

食うしかないっ！

……焼いて、だな。生？ ふざけんな、俺はまだ人間を捨てたわけじゃない！

「焼く知恵。焼く知恵……」

心の中で思いっきりヤクチエー！ と叫ぶ。叫ぶ前に既にそのモノを焼いて食うための知恵らしき結晶が出来上がったけど。

……説明書。

「理解するための知恵……」

そう願うと手元に一枚の紙切れが。
うわーお、便利。

「えーっと、なにになに……？」 『まず対象の肉を手ごろな大きさに切ります。そしてセツトに付属している棒に突き刺し、セツトの火をオンにします。そして、丁度いい感じに焼けたら ボタンを』 だからモンハンかつー！」

思わず手元の紙をクシャクシャに丸めて、海へと投げる。

すると、それを一匹の小魚（といっても、常識的に考えると人食いレベル）が食いかかる。そして、それを更に巨大な魚食いつき、さらにそこを先ほどのメガロドン先生が食いつき、最終的にそれを巨大なクジラと海蛇を足して二分の一を乗算して失敗したような生物が全て飲み込む。

「れ、レヴィアタン……？」

【レヴィアタン】 英語発音では『リヴァイアサン』と呼ばれる。神が天地創造の5日目に造り出した存在で、同じく神に作られたベヒモスと二頭一対（ジグも含めれば三頭一対）を成すとされている（レヴィアタンが海、ベヒモスが陸、ジズが空を意味する）。ベヒモスが最高の生物と記されるのに対し、レヴィアタンは最強の生物と記される。

本来はつがいで存在していたが、あまりにも危険なために繁殖しないよう、雄は殺されてしまい雌だけしかない。その代わり、残った雌は不死身にされている。また、ベヒモスを雄とし、対に当たるレヴィアタンを雄とする考えもある。

その姿は、伝統的には巨大な魚やワニなどの水陸両性の爬虫類で描かれるが、後世には海蛇やそれに近い形での龍などといった形で

も描かれている。

以上、無駄な知識披露コーナー。

もう二度と海には近づかまい。あんなのに目をつけられたらだう
ーって言うしかない。

……とりあえず、まあ。あんなのを見てないで、このトカゲを食
おう。

「……斬る道具が必要じゃな。切断する知恵……」

再び願うと手元にやはり黒いボディに青いラインの入った小刀が
現れる。

こんなんで切れるのかねえ、なんて思いつつ肉塊へと刃を向けた
瞬間。

ぶおん、という音と共に小刀の刃から2mmほどの青いレーザー
が放出される。

しかもそのレーザーはその場に固定され、淡い光を放ち続けてい
る。

……。

「これは『電気やレーザーとは違う、言わば、神のみが作りだせる
エネルギー体』……か。もう少し詳しく説明してくれんかの、ルシ
フェルさん……」

そう愚痴りつつも肉を適度な大きさへと切り、棒へと突き刺し、
セツトにセツトする。……あ、狙ったわけじゃないからな。

「よし、焼くぞー」

てんてれ てててんてててんてて とくるっとくるっとく
るっとくるったたたらたん

「今だアツ!!」

『上手に焼けましたー』

「だからモンハンかつ!!」

思わずゲシイ、とセットを蹴った、足がいたかった。なきそうになった。

もう少し変えろよ。最後をトゥットルー　にするとか。

まあ、いいや……食おう。

「うわ、うえ、何コレ、美味ツ!!　青トカゲうめえ!!　うわ、うわうわうわうわ、美味エ!!　ひゃあああらめえええ!!　お腹青トカゲの味覚えちゃ………死にたい」

普通に美味かった。俺はおかしかった。なきたくなった。つつか。

寒い。

いつまで俺は全裸待機してればいいんだ、とりあえず服だ服。どんなのがいいか……。

あ、もういいや。面倒くさい。

白キヤミに黒スパッツでいいか。

おーけーおーけー。どうせ俺に服のセンスなんざねえよ。

「よし、身を環境から保護するための知恵……」

そう強く願うと同時に白キヤミと黒スパッツを想像する。結構な変態だと思った。

すると、手元に想像どおりの二品が現れる。

どうやら見た目も想像すれば変更できるみたいだ。

さっそく着用。

凄く着心地がいい、そして、暑くも寒くもない快適な温度。

なるほど、これは環境に関わらず自身を最高の環境に置いてくれる素晴らしい服なのか。

やった、もうこれ以外の服いらね。

さて、さてさてさて……。

服も用意し終われば、後は名前だ。

ついでに職業と趣味も決めとかなきゃな。

名前、名前なあ。

中二っぽい名前が欲しい。

うーん。

鳳凰院凶真……食蜂操祈……ツギハギスタ・SS・ルビーサファ
イア5世。

だめだこりゃ。

……ううん、名前か……。

いいや、元素記号から適当に取って『P m・X e (P r o m e t
チウム^{チウム} X e n o n^{キセノン}』でいいか。

ちなみに意味はプロメチウムの方が神の『プロメテウス』の意味
(ちなみにプロメテウスは先見の明を持つ者という意味)。キセ
ンはみなれない、異邦人、とかそんな意味。

いい中二具合だ！ 気に入った！！

というわけで、これから俺の名前は『P m・X e』だ。うん、カ
ツケー。

……さて、職業だが、職業は異界ジェノサイダーでいいか、SD
Kと同じく。

次に趣味。趣味は天体観測。ハイ、プロフィール作成終了！ 疲
れたから寝る！

……。よくよく周りを見て見ると、地面にはハイエナっぽい
四速歩行のバケ モノが眼を幾つも光らせ待機し、海中からは何か
ワニっぽいバケ モノが眼を幾つも光らせ待機し、空にはワンダと
巨像ヨロシクな大鳥が飛び交っている。

寝るのこわっ！　このまま寝たら明日には骨すら残ってない。
家だ、家を用意しろ！

「む、無防備な自分を防衛するための知恵……」

そう強く願うと、目の前にそれなりの大きさの工場（やはり黒ボ
ディに青ライン）……？　のようなモノが出来上がる。

よし、ここに寝泊りだ……。うう、力を使いすぎた所為か眠くな
ってきた……。

とりあえず工場内に入り、嚴重に鍵を閉めると近くにあった簡易
ベットに倒れこむように横になる。

そして、数秒後、俺の意識は再び闇へと落ちた。

全部の始まり、あるいは原因。（後書き）

ちなみにしばらく東方のキャラが出ない恐れがあります。という
か出ません。

だけど、出るまでがんばる。少なくともぬえが出るまでがんばる。

ぬえに出すまでがんばる【／／／ この作者は正体不明になりました
／／／】

にして、前書きの続きですが、何やらにじファンの東方の二次創作
じゃ白髪ロリはやめるカスが言わせんな恥ずかしい。とのことだっ
たので、アザゼル配色にしました。

能力もアザゼルっぽいのでこっちのがなんかしっくりくる感じ。

改めて警告を下さったタケブ様に多大なる感謝！！

気付いたときにはTHE・人外（前書き）

電化製品に付属しているよくわからない説明書のような回

気付いたときにはTHE・人外

眼が覚める。

「知らない天井じゃ……」

いや、知ってるけども。

とりあえず体を起こして昨日は大して見なかったマイホーム内を確認する。

あるのは簡単な洗面台にバスルーム、簡素なキッチンにベット、そして八割を支配する作業場。

「……『作れ』ということかの……」

明らかに自分の能力を使って巨大な兵器を作れ。

そんな事を無言で告げる作業場。

いや、しかしまあ。

作りたい気持ちもあるけれども、それ以前にこの世界についていろいろ学ばなければ……。

だが、どうしたものか。

この世界について学ぶにしても方法がない。

人類が存在していればいいんだが、昨日みたかぎりじゃ存在しそうにもない。

なんせ空を蔽おほいつくすようなバカでかい鳥が飛び交っていて、海の中には神話の中に出て来そうなバケモノ。しかもレヴィアタンっぽいのだっている。

陸上の生物はまだ昨日のハイエナっぽいヤツしかみてないが、どうにもこの世界には常識ハズレな生物しか存在しないような気がする。

簡単に言っなら幻獣。

恐らくユニコーンやドラゴンですら簡単に存在するのだらう。

正直に言えばこんなクレイジーな世界に一人ぼっちとは、気が滅入る。

「やあ、昨日は悪かったね」

なんていい具合な感じに俺が打ちひしがれていると、ふと声が掛かった。

「神の使い……」

「覚えていたか。光栄だよ」

覚えるも何もお前以外覚えるような存在がないっての。

「さて、この世界について基礎的な事を説明しようか。そうだな……まずは『穢れ^{ケガレ}』についての説明だ」

穢れ？ あれか、攻撃してると段々と堪ってきて、最終的には違うか。

「穢れとは、己の生存を最善とすることで逆に強くなってしまふ死の匂い。物から永遠を奪い、生物には寿命を与える。……つまり、自然の流れだ」

「ほあ。で、それがどうかしたのかの？」

「別に、今の所は何もないさ。ただ、一ついうなら海の穢れ具合が酷いね、生存競争が起こった場所は決まって穢れが溜まる」

なるほど。

確かに海はバケモノがいるから近づきたくはないと思っていたが、

それ以外にも何か近寄りがたい雰囲気があると思ったんだが、それが原因か？

「しかしまあ、しばらくすると恐らく陸上も、空も、穢れが溜まるだろうから、そのときは神が洗浄を行うだろうね」

「洗浄？」

「ああ、光の洪水にて海、陸上、空、全ての穢れを洗い流すのさ」

「そんな事したら全ての生物も同時に洗い流されるのではないかな？」

「まあ、90%の生物は死滅するが……。残りの10%が生き残る。無駄で余分な種を切り落とすのさ」

なるほど……。90%が死滅……。元々の世界に当てはめるとP-T境界か？

「ああ、そうそう。外にいるバカでかい奇妙なヤツを見たか？」

奇妙も何も、全部奇妙な生物だろ。うん。

と、俺がそう内心頷いていると神の使いはそれを察したのか、小さく笑って付けたす。

「フッフ……。お前にとっては全部奇妙なヤツ……。か、なら、言い方を変えよう。ベヒモスにリヴィアタン、そしてジズを見たか？」

……。数秒間思考が止まった。

え？ マジで昨日の怪魚（最大級）はリヴィアタンだったの？

「ハッハッハッハ、驚いた顔だな？」

「いやいやいやいや、誰でも驚くわい、……。で、何を求めとる？」

いよいよ困った俺が尋ねてみると、神の使いは短く笑ってなんでもないように答える。

「いや、別に。ただ……神の傑作と呼ばれたベヒモス。最強の名を持つリヴィアタン。そしてジズ。この三匹は洗淨の際に消される予定だが……どうにも勿体無くてね、……というわけで、この三匹をお前に食って欲しい」

何ほざきやがるのですか、こいつは。

食う！？ あのサイズの魚（笑）と恐らく同サイズの獣と鳥を！

？ 食う！？

いやいやいや、食われる。食われるって。

俺がそんな意味不明な神の使いの発言に戸惑っていると、神の使いは何か思いだしたように言う。

「あ、そうそう。別段食ったからといって神は怒らないよ、むしろお前に食って欲しがっている」

「そういう問題じゃないわい！ く、食う！？ あんな特撮万歳なバケモノを！？ しかも三匹！？ 量的にも不可能だし、そして何より狩れんわ！」

むしろ狩られる。

俺の反論に対し、神の使いは何言ってたコイツ。といった感じの笑いを浮かべて一言。

「君ならアレぐらい食えるさ。……それに食うといっても、食物的な扱いの『食う』じゃない。ヤツ等の魂を取り込むんだ」

「魂……？」

「そう、魂さ。もっとはっきり言えばヤツ等の存在。お前にはそれが出来る」

よく分からん。カービイのコピーでいいのか？ あ、飲み込んで敵の特性得る奴。それとも偽王オーラントのソウルアブソープか？ あれ見てると、結構カービイって怖いよな……。

団子状のピンクがポテポテ歩いてきて、ブラックホールのように物を吸い込み、飲み込んでいく……。

怖すぎる。

「お前のステータスはそれなりだ。ヤツ等とも十分やりあえる……、が、お前の体はなにぶん『人間』臭いんだ」

体が……人間臭い？

水面から陸上まで跳ね上がった上に超巨大な砲台を軽々と振り回すのに？

「その人間臭さを落とさなければ後々に結構厄介なことになる。だから今のうちにヤツ等のような『幻獣』を取り込んで」

「……取り込むと何かいいことがあるのかの」

「神の傑作だ、魔力に妖力、あと霊力なんかも上がるかもな」

何かいきなりファンタジーチックな単語が出てきた。

俺はその手の話に弱い。

「待つとくれ、まず妖力やら魔力やら霊力やらがわからん」

「何？ それは昨日話しただろう……」

話されてねえよ！

「あ、すまない。君にとっては明日の出来事だったか。いや、もっと先だったかもな」

うぜえ。

単純にうざいよ。この神の使い。

笑い方が『トゥーエツヘツヘｗｗｗｗ』とかもうね。

「まあいい、よしわかった。説明しよう……」

アレから神の使いの講義を聞いて何となく理解したのでまとめてみる。

何やら霊力とやらは基本的に生物なら誰でも持つている力で、魂が自由に近い状態……、つまり肉体という枷かせを無くした状態に近ければ近いほど使いこなせるようになるとか。

ようは貞子とか伽椰子かやことかが持つてるT H E 呪いばわーだ。

そして、人間の『生命力』を操作する力……らしい。

回復は勿論、生命力の吸収とかができるとかなんとか。なら、T H E 呪いばわーは生命力の吸収のほうか。貞子はウィルスだったけど。

どうやら俺の『魂を食う』ってのも生命力の吸収を使うんだとかで、次に魔力。

意外や意外に魔力の根源は月。……といっても人間が見ている月は天蓋に映っている姿だとかで、本来の月は見えならしい……が、どうやら今の時期だとまだ見えるようなので、今夜辺り見てみようかと思う。

話がずれたが。魔力の根源は月。というのも月は禍々しい魔力と狂気の塊らしい。

だから狼男は満月の夜に狼になるのか。うん。

で、魔力はそのままの通り。何やら『魔法』の力の根源であると同時に『妖怪』の力の根源でもあるらしい。

『魔法』^{アルス・マギナ}というのは手から火が出るあれとか、錬金術とからしい。黄金練成か。

神の使いが言うにはこの世のルールに背いた力だとか。その都合上『神力』とは相性がわるいとか何とか。

次は妖力か。妖力もそのまま妖怪が行使する力で、神の使いが言うには『つかみどころのない力』らしい。

何やら力がそれほど大きくななくても相手の恐怖心に比例して効力が大きくなったりするんだとか。

ちなみに妖力は魔力が妖怪を通して変化したもので、妖怪のクラスが高ければ高いほど純度の高い妖力になるらしい。下のクラスの妖怪だと魔力と混じって妖力特有の相手の恐怖心に比例する効力が弱まるんだとか。

で、次が神力。簡単に言えば霊力の一段階上のエネルギーらしい。その能力は絶大で、天候を操ったり、地形を変化させたり、生物の進化を修正したりなど、規格外な力を持つ。

そして、力の性質は『この世のルールを作る力』らしい。だから『ルールに背く力』である魔力とは拒否反応を起こすとかどうとか。神職者と魔女は必ず仲が悪いのもコレに関係するのか？

ちなみに俺の『知恵を支配する程度の能力』もこの神力を使っているとかで、鍛えればもっといろいろできるとか。

ちなみに神の使いは時間を統べてるらしい。チート乙。そしてルシフェル乙。

それと追記ではこの力は信仰が無ければ回復しないらしいが、俺の場合知恵を求めるのを全ての生物が忘れるまでは無意識に信仰され続けるらしいから考えなくていいらしい。流石に生物が全滅したら回復しないらしいが……。まあ、そんなことは無いだろ。

まあ、こんなところか。

ちなみに俺のステータスを数値化すると『霊力20の魔力8の妖力0の神力50』ぐらいらしい。

霊力は一般人は15程度が相場なので、若干強い程度。魔力も一

一般人の相場は2から3が相場だから、若干強い程度。

そして妖力0ってのが、何やら俺が『人間臭い』原因らしい。もっと高めないと面倒だとか。

で、この神力だけ異常な数値なんだが。これは俺が神に近いかららしい。

なんでも転生の際に結構な干渉を受けたとか……でも、一般的な神の神力は五ヶタなのでゴミクスレベルらしい。

まあ、その分身体能力と自己再生能力が異常らしいけど。

とりあえず神の使いが言うには『沢山食え』とのこと、そこらの雑魚でもいいから魂を貪りつくせとのことだ。

それと『もつと穢れとけ』とも言っていた。レベルの高い妖力を使うには穢れまくるのが手っ取り早いらしい。

あと最後に、早いうちに神力と魔力のコントロールを覚えとけとのこと。

さっき書いたように神力と魔力は相性が悪い。

力が弱いうちにコントロールできるようにしないと、大きな力を持ったときに内部分裂するとか……怖っ。

「何やらとにかくやることが多いの……」

「まあ、それもそうだが……まずはこのクスみたいなステータスを少しあげないとコントロール以前の話だ。お前の力はどれも質がいいが、量が少なすぎる……というわけで、早速だがベヒモス、リヴィアタン、ジズ。そうだな、まずはジズあたりから行くか」

「ちよつと待たんかい！」

俺がとりあえず神の使いに静止の声を掛けると、神の使いは首を傾げて待機する。

可愛くねえよ。イケメンだけど。

クス扱いに少しムツとしたが、それは言葉の通りなのでしかたない。問題点はコイツの言っていることだ。

「いきなりその三体に挑むのはどうかと思うのじゃが……？」

「ハッハッハッハ。大丈夫さ、ジズは神の作った三体の中でも最も微妙な一匹だ。というより、失敗作だ……まあ、失敗作と言っても神の作品の一つだ、その力量は並大抵ではないが…… お前なら大丈夫さ」

その妙な自信は何処から来るんだ。いや、確信？

「まあ、ダメだったらどっちにしろ時間を撒き戻して修正するさ」

オイコラ。

「……しかし、時を司るとは……便利そうじゃな」

「フフフ……隣の家の芝生は青く見えるものさ。そこまで便利な能力じゃあない。この能力を得るということはそこにある時間から切り離されるという事……つまり、永遠の傍観者と化すのさ」

うーん、よくわからんが、たぶん。

役を演じる側から傍観する側になる……っていう解釈でいいんだろうか？

恐らく何やらあったらしい。というより、もはやコイツにとって命など無に等しいものなのだろう。何せ、命は時間に括り付けられていて、その括り付けている時間を操れるコイツにとっては命は手中にあるようなものなのだから。

まあ、だからどうした。といった感じだが。

「話を戻すが……。大丈夫さ、ジズの元に辿り着くまでにある程度の魂は食えるだろうし、今のステータスでも勝てるといえば勝てる」
「レベル1縛りの感覚か？ 絶対いやじゃ、それ」

「なら食え」

むう、食えば喰うほど強くなる……弱肉強食？

しかしまあ、そんな事を考えていても仕方が無いのでとりあえず俺は旅へと出ることにした。

ちなみに俺の為に神の使いは無期休暇を取ったとか、何でも俺がマトモに一人で生きられるまで、『正しい』人類種の誕生まではサポートするとか。

正しい人類種……。何でも神の使いが言うにはその『正しい人類種』が生まれる前に行き過ぎた人類種が生まれるらしい。

そいつ等には出来るだけ関わるなどのこと。何やら以前の時間で俺はいろいろと酷い目にあっただらしい。

……というより以前の時間で。

何回コイツは俺と時間を歩んでいるんだ？ しかも、その所為かどうかはしらんが、妙に馴れ馴れしい。別に嫌じゃないが。

というワケで旅に出て二日目。

マジでヤバイ物を見つけた。

「ろつとお、また奇妙なヤツが出てきたぞ」

「……これ、勝てるのかの？」

「フフフ……私の生きてきた時間は無限に等しく、そしてお前との付き合いも私は長く、とてもお前を信頼し、心配している。が、私はあまり時間に関わることはできない。だからそれについてはあまり詳しくは説明できないが　また、この怪物をお前が見たのは今日の出来事だが、私にとってはつい昨日の出来事で　言ってしまうそれは『神のみぞ知る』」

「知らないのかい！！　ならさっさとそう言わんか！」

ジズは雲を突き破るほど高い山に住みついているらしい。
そして、今はその山のふもと。
物凄い物を見た。

「 ツッ！！」

擬似的に人間の言葉に当てはめるとギョオオオーンッ！！（
決してンバーニンガガッ！！ や モエルーワ！！ ではない、バ
バリバリッシュ！！ でもない）と咆える二足歩行の龍。

背中に巨大な輪を背負っており、更に首にも鉄製の輪をつけてお
り、腕は胸の前で組んでいる。そして、その輪を避けるように背中
から生えている二つの大翼は一振りで大地を抉るだろう。

尻尾も尻尾で五、六個の鉄の輪を通しており、全体的に輪の多い
龍さんだ。

「これなんてバハムート？」

「いやはや、まさかこんな物があるとは……恐れ入ったよ」

ちなみにバハムートとは意外や意外。ベヒモスの名前の誤読によ
って生まれた生物だ。ジズもそれに近いのだが……気にしない、気
にしない。

だがしかし、これ。勝てるのだろうか？ なんか、前に見たリヴ
イアタンのような化け物じみたデカさは無い（といってもバカでか
い）けども、覇気というか、なんというか……生物として格が違う
ような気がする。

確かに俺もこの三日間様々なグロい生物から可愛い生物まで容赦
なく全部殺して喰ってきた。そのおかげで地味に強くなった。

でもこれは……まだ、ちょっとレベル上げたりないような……。

「しかしまあ、ジズよりも下だ。勝てるよ」

だからその自信は何処から来るんだ!?

……いや、待てよ? 自分を信頼してるんじゃないから自信じゃないのか? う? 分かん。

「
ツツツ!!!」

しかしまあ、そんな俺の事情など知ったこっちゃないとばかりに叫ぶ黒い龍。黒トビトカゲ、黒トカゲ。

何やらどうにもジズの巢食うこの山を守っているらしい。それに、どうやら俺は若干ビビりすぎなのかもしれない。もしかしたら俺、こいつぐらいなら簡単に。

とか、思った直後、俺の体は真横に吹き飛んだ。

それこそ電車にぶつかったぐらいの衝撃を受けて、壁へと激突する。

元よりのステータスからか、グシャグシャの肉の塊にはならなかったものの、想像を絶する痛み。そしてそんな痛みを受けても死なない自分への吐き気。

「ぐ……げほ、つつつあああああ!! ああ、あ。あああつ!!
ぐ、ぐ……」

痛いなんてもんじゃない。死んだ方がマシだ。

ゆっくりと立ち上がるうとするが、足は捻じ曲がった上に折れ曲がっている。なんだこれは。

顔も歪みまくっている。俺の体は粘土か。

だが、そんな事を思ってたのも数秒、二度と聞きたくないような音を立ててそれら全ては完全に治った。

「……はあ？ この、このレベルの損傷が一瞬？ は、はははは。どうなつとるんだ……、この体」

喜びなんて物はない。言うならば理解できない恐ろしさ。

俺のこの体はなんだ？ 何故こつ簡単にも歪んで、治る？

「だから言つただろう。勝てる、と」

神の使いの呆れたような声。

そうか、やっとわかった。

何故コイツは俺に勝てる勝てるというか。

それは何故か。

「お前なら絶対勝てるよ、なんせ」

俺の体はここまで壊されてもほぼ一瞬で再生終了する。痛みを残さず、完璧に。

つまり。

「絶対に敗北がないんだからね」

負けがない。

ルールの決まった戦いなら敗北もあるが、こついった殺し合いじゃ絶対に負けない。

なんせ、殺し合いにならない。

だって、俺は死なないんだから。

それに、いくら痛みによるショックがあつても、それに耐える。

といより、ショックでは意識が離れない。

そついう風に俺の体はできているらしい。

「は、ハハハ！　なんだよ、なんなんだよ！　簡単じゃないか、簡単だ！　勝てる。絶対に俺は死なない、……いや、絶対にわしは死なん……ハハッ、分かってしまえばもう怖くないの……」

若干口調が乱れたのを直しつつも神の使いを見る。と、神の使いはニイ、と笑う。

跳び箱が飛ぶまでは怖いように、ジェットコースターが乗るまでは怖いように。

俺も一度『死』を味わうまでは怖かった。
けど、もう一度味わえばなんでもない。タネがわかりやなんでもない。

だけど痛いからできればもうあんな傷は負いたくない……。

「　　ッッ！！」

俺が生きてることに気付いたらしい黒トカゲは音速に近いスピードで突っ込んでくる。

しかし、その動きは止まって見えた　　なんてこともなく、純粹にその突撃を俺は受けた。
避けれるわけがない。

だが、今度は先ほどのようにはいかない。

俺の胴体を龍の頭部に生えた巨大な角が貫通し、そのまま背後の壁へと突き刺さる。

「ぎっ……ぐあああああ！！　ああ、あっ……ふふ、あはは、もう、逃がさん……！！！」

二度目の痛みをかみ締めながら、俺は手元に『目の前の生物をその場に固定するための知恵』を手元へと呼び出す。

それは三又の巨大な槍で、俺は躊躇いなくその槍を黒トカゲへと

振り下ろし、その背中を貫通させ、地面に串刺しにする。

「ッッ ！！ ッ ！！」

黒トカゲが絶叫する。その轟音に鼓膜が破られるが、ご自慢の再生能力で回復。

腹にコイツの角を刺したまま、俺は次に『切断するための知恵』を呼び出した。

それは俺の身の丈の三倍もある剣。約四百二十cmの剣。

「残念だが、ここでゲームオーバーだ！」

その剣を必死にもがいている哀れな黒トカゲの首へと振り下ろす。ズシャ、と軽く地面に刺さった手応え。

何やらどうにも黒トカゲの首を切り落とす感触が無いほどに切れ味が素晴らしいらしい。

そして、少し遅れて噴水のようにどす黒さを持った赤い水が飛び散る。

巨体なだけあって、その血の量は物凄いもので、俺も真っ赤になる。

自分の血か黒トカゲの血かわかんけど。

それにしてもなんだ 何処か、穢れっていうのを分かってきた気がする。

今までは見つけるたびにビビりまくって即シャダイ砲でオーバーキルしてたし、攻撃も一度も受けなかったから分からなかったけど。こうして暴力を受け、暴力で返し、血を浴びて気付いた。

『穢れ』の存在に。

何か、こう。今まで自分の体にあった堅苦しさが全部抜け落ちて、心が自由になった気分だ。

開放感があると言ってもいい。

「ふむ、上出来じゃないか」

神の使いがそんな事を言っただけで近づいてくる。

俺は自分の体を通して壁に突き刺さったダーツ状態の黒トカゲの顔を突き飛ばして、そのまま地面にグチャリ、と落ちる。

「何だかの、物凄く気分が晴れるわい……」

「そりゃ、初めて穢れを背負ったからな。今までの『純白』の堅苦しさが抜けたんだろう」

そうか、今までは純白というマニキュアを全身に塗っていた状態だったが、この『穢れ』というシンナーを使ってソイツを落としたから息苦しく無くなったのか。

ちなみにシンナーという解釈はあながち間違いでもない。この開放感。

クセになりそうだ。

「おっと、絶対にその感触にはまるなよ？ その感触に飲まれればお前には破滅しか待ってないからな」

「わかつとるわい。職業通りの存在になる気はないからの」

ジェノサイダーなんてゴメンだ。

……さて、こうして俺は吹っ切れた。

次は未だになれないあの作業が待っている。

「それじゃ、いつも通り。喰え」

「それも、わかつとる」

右手に『喰らうための知恵』を呼び出す。

それは黒いボディに青いラインのいつも通りなカラーリングのガントレット。

俺はそれを黒トカゲの残骸に押し付ける。

すると、けたたましい轟音と共にガントレットの指の部分から針が突き出し、黒トカゲの死体へと深く突き刺さる。

そして、次にはその黒トカゲ内に存在した様々な力……それが内部へとひしひしと伝わってくる。

と、同時に得体の知れない吐き気を覚えた。

「ぐ、っ……うつ、ご、お、お……、げほ、けほ」

「大丈夫か？ ……どうやらソイツ。結構な魔力を蓄えていたみたいだな」

前にも言ったが、魔力は神力と相性が悪い。

今だ力が少なすぎてコントロールの練習以前の問題な俺は神力は勿論、妖力や魔力、霊力すら操れない。

操れば今頃血を吐いたりしてない。

だけど、こうして幾つものバケモノから魂を吸い続け、それぞれのステータスは三ケタへと突入し始めている。

大体『霊力130の魔力387（現在上昇中）の妖力92の神力58』だ、神力の伸び低ッ！

しかしまあ、霊力は獣にも宿ってるため、こうして喰うたびに伸びまくる。

そして、魔力はこの黒トカゲが異常に溜め込んでいたらしく、今でも上昇中だ。

以前までは神力以下だったから別段何もなかったが、今回の食事で跳ね上がったために肉体が悲鳴を上げている。

ぐぐぐ、そろそろコントロールできるようにならないとな……。

とか考えている間に食事終了。だがしかし、未だに気だるさは抜

けない。

「ぐえ、だる……」

「……ふむ、そろそろ魔力のコントロールを覚えた方がいいな……。この山に登るのはそれから後でも十分だろう。時間ならいくらでもあるしね。」

神の使いが何処か嬉しそうにそんな事を言う。

俺の成長が嬉しいのだろうか？ ううん、娘か妹的な見方で成長を喜んでくれているのならしいが……。

俺の体は確かに少女だ、だがしかし。俺は普通に女性が好きだ。

うん、男を愛せとか。元男な俺には無理なわけで。

……まあ、そんなわけで俺と神の使いはジズの住みつく『天を貫く山』を上る前に魔力を物にする事を決め、訓練を開始した。

気付いたときにはTHE・人外（後書き）

原作キャラ登場までの道のりはまだ遠い！ でも、見捨てないで下さい……。

ああ、イチヤつきたいよ、東方キャラと。ああ、東方キャラを無理矢理にめでたいよ、あああああああ（ry

空と陸を征して（前書き）

若干かけ足な回。もしかしたら後で色々付け足すかも。

空と陸を征して

夜。

空には美しい月が輝いている。

美しい、狂ってしまいそうなほど美しい。

笑いたくなる。この月を見ていると無性に笑いたくなる。

「眼を離せ、月に魅入られると破滅するぞ」

だけど、神の使いのその言葉で自我を取り戻し、ようやく月から目を離す。

「……慣れんのお、あの月」

「まあ、慣れなくても何れ見えなくなるさ……さて、それより練習だ」

神の使いの言う練習。勿論魔力の制御のことだ。

黒トカゲを喰ってから小一週間経つが、未だ完璧には扱えていない。

というのも何やら魔法とは科学と同じで、実験を何度も繰り返して、成功して初めて扱えるんだとか。

一応自分の魔力のタイプもわかったし、扱い方も地味に出来てきたが、神の使いが言うには実験の準備が整った状態にやっとこさなつたぐらいらしい。

くそう、まだまだだなあ……。

ちなみに夜に練習するのは単純に魔力が強まるからだ、強まった方が力がはつきりして扱いやすい。

「さて、魔力を上手く使うにはまず、常識を捨てることだ。お前の

頭の中に魔法が存在するルールを新しく作れ」

「そうは言ってものお……、何せ、いまいちわからのじゃよ、これ」

ちなみに俺の魔力のタイプは光と加速系だ。

……光と加速系。光はそのまんま、加速系ってヤツは俗に言うクロックアップだとか、アクセルフォームだとか、トライアルだとか、そんな感じらしい。用は自分の速度が強化される。

頭の奥の奥の更に奥。

そこに眠る微かな東方の知識から何やら極太ビームを撃ってるキヤラがいたなあ、なんて事を思いだす。

……マスパ？ マスタースパーク、だったか？

わからん、あんな感じでいいのだろうか。

「……ううん、光、光、AMSから光が逆流？ ……ううむ……」

とりあえず手から魔力を放出する。といっても本当に垂れ流しにしているだけで、これを操れるようにならないとダメなんだが……。

光、光か……。

俺は何となくそう思い、手元で光が凝縮されるイメージをする。するとどうだ、手元に紫色の光が集まるじゃないか。

「おお？」

「お、案外時間がかかったな……上出来だよ」

神の使いがまたもや嬉しそうにそう言う。

なんだかこつちも嬉しくなってきた。努力が実るとここまで嬉しいものか。

「……！！」

と、そのときだ。

真後ろから初日に見たハイエナっぽいヤツが飛び出してきたのは。

「うわっ！」

無論咄嗟に振り向いて、そのまま手元に凝縮されていた光を放つ。
その紫色の光は極太レーザーへと変化してハイエナを焼きつくす。

……。

うん。

「ハハハッ。凄い火力だな」

「……もう少し練習しないとの……」

ただ単にぶっ放すとこのザマである。

質が良くても扱いきれなきゃ何にもなら無いという事を俺はこの
日改めて実感した。

時に思う。

いくらP-T境界の前の世界だからといって、あんな神話じみた
生物が存在するはずが無い。

……しかしまあ、よくよく考えてみりゃ、恐らくきつとここは『
東方Project』の世界。何でもアリっちゃアリなんだろう。
いや、何で急に？　と思うだろうが、いや……。

「どうした？　さっきまではアレほど意気込んでいたのに」
「……」

現実逃避だ。

俺は今、実にマッハで現実から逃避している。

や、だって。

だってさあ？

「ッッ 、 ッ」

今まで聞いてきたそこらの獣の鳴き声とは違った、神々しさすら覚える鳴き声。

その声は天高くまで響き渡り、雲を割る。

そんな声の持ち主は、天に届く頭に空を蔽い尽くさんとする大翼を持った化物 ジズだ。

その姿は鮮麗されていて、今までのバケモノのような穢れなんかは感じられない。

あるのはただ単に純白で純粋な馬鹿げた力、俺の軽く五十倍程度はあるんじゃないかという神力。

そんなジズは頭部に付けられた六個の線に近い瞳で此方を軽く見てきた。

どうにも所々メカメカしい、背中には巨大な砲台なんか背負っちゃってる。

ファンタジーなんだか、サイエンスなんだか。

「……あれ、勝てんの？」

「だから勝てる」

いやまあ、負けないんだが……。

しかも問題はアイツがデカイという事だけじゃない。

アイツはあの巨体でなんと、無茶苦茶なスピードで飛行するのだ。先ほどまで飛んでいる姿を見ててわかったが、この世界では色々な高名な科学者さんの残した定義は全部捨てた方がいいっぽい。

「　　ッ！！！！」

とか言ってる間にもジズは此方を威嚇する。

その声は俺の皮膚を引き裂き、内蔵すらも潰さんとするが、そこはご自慢の再生力で耐え切る。

「……やるしか道はない、と……」

しかし俺も覚悟は既に決めてある。いつまでもグジグジしている場合じゃあない。

「撃ち落すための知恵！」

そう叫べば、右手に巨大な砲身の兵器が現れる。

「　　ッッ！！！」

ジズもジズで天高く飛びあがり、旋回しながら背中中の巨砲で俺を狙ってくる。

「っ！　　こんなっ！　　あたったらっ！　　流石に死ぬんじゃないっ！？」

「ハッハハハハ、安心しろ、死にはしないさ」

必死に避ける俺に神の使いが笑いながらそんな事を言う。他人事だからって好き勝手言いやがって……。

あと、最近分かったことだけど、神の使いは俺意外には見えてないらしい……。というか、神、または神に近い存在じゃないと認識できないとかどうか。マジルシフェル乙。

そう思いつつも、俺は巨砲の砲撃を避けつつも右手の知恵でジズ

を狙い撃つ。

カシュッ、という軽い音と共に放たれるのはなんと、アンカー。

……や、まて!?

アンカー!?

「 ッ!」

直撃したらしいジズがけたたましい声を上げる。

そして、俺の中に嫌な予感がする。

恐らくはこのアンカーで捕まえた後は地面に叩きつけるとの事だ
と思うんだが……。

何せ、あの巨体である。地面に叩きつけるどころか 。

「うえああああッ!! やっぱいいいい!!」

凄い勢いでヤツの体に引き寄せられていく。

幸い刺さったのは背中のようなので、ワンダのような超腕力を使
わなくても済みそうだ。

なんてこと考えてる内にジズの背中の上。 空気薄い。

「随分と大胆な方法に出たものだ、んじゃ、弱点を探してそこから
喰え!」

故意にやったわけじゃないが、結果オーライのようだ。

結局デカイヤツはワンダみたいな倒し方が一番手っ取り早いって
ワケよ。

俺は即座に弱点を探し出す知恵を呼び出し、頭部に装着する。

ちなみにこの知恵、暗視ゴーグルみたいで格好いいから地味に気
に入ってる。

そして、この知恵を通して見たかぎり、どうやら弱点はうなじの

ようだ。

……うん、『弱点がうなじ』何処かエロい響きがあるね。
とか言ってる場合ではない、これは殺し合いなのだから。
いや、俺死なないけど。

右手に持っていた知恵を捨て、とりあえず物凄い風圧に抗いながら前へと進む。

ちなみに巨砲はしゃがむと空気と化した。こういうデカイ兵器って近づくとき空気化するんだよな、格好いいけど。

「ぐぐぐ……っ、残念だがッ！　ここでゲームオーバーだ！」

地味にこの台詞が気に入った自分がいる。

厨二病？　なんとでも言え。そうだから！

なんてことも思いつつ、右手にいつものガントレットを呼び出し、弱点へと押し当てる。

するといつも通りのけたたましい轟音と共に針が飛び出し、弱点へと深く突き刺さる。

「　　ッッ……！」

するとかなり痛かったのか、ジズは俺を振り落とすべく、空中で何回転もする。

吐く！　吐く……！

振り落とされこそしないものの、酔う。

「うつ……こういうの苦手なんじゃよ……」

ちなみに生前からジェットコースター系は無理。吐く。

そんな事を思いつつも、ジズの全てを吸収する。

踊り食いなので、霊力、魔力、妖力、神力、どれも新鮮だ。

何やら生きたまま喰う方が得られる力が大きいらしい。覚えとこ
う。

「ぐう、おおおおつ」

物凄い力の量、思わず眼が回る。

そこで、あることに気付いた。

ジズが段々と失速している。というより肉体が消滅している！

何やらどうにもジズは神に作られた存在であるからかどうかは知らないが、神力で体の大半を形成しており、それを奪った今では存在が維持できず、ボロボロと崩れはじめている。……恐らくはベヒモスとリヴィアタンもそうなのだろう。

どうやら巨体にあわないその速度や、初めて見たときの感覚はそれが原因らしい。

……などと解析している場合じゃあない。

落ちているのである。落ちているのだ。

このままではジズと共に海へと落ち、喰われる未来が待っている！
どうすれば……ッ！？

「飛べ！ キセノン！」

「飛ぶ！？ どおやって！」

「いいから飛べ！」

そんな無茶苦茶な！

どうすればいい！？ あわわわわ。

「イメージしろ！ ジズの大翼を！」

「何で！？」

「お前は今、ジズの存在を喰ったんだ！ その象徴である大翼も使える！」

「あ、なるほど」

そうと分かれば話は単純。先ほど嫌と言うほど見た大翼をイメージする。

さすれば背中から黒いボディに青いラインのメカメカしい翼が二つ生える。

……翼というより、大翼型ブースターユニット？

まあ、大翼と言ってもジズほど大きくはなく、邪魔にならなそうで邪魔になるぐらいの大きさだ。

「おお、飛べた」

「……ふう、冷や冷やさせられたよ。……じゃあ、次はリヴィアタとベヒモス。どちらがいい？ お前が決める」

正直に言えばどっちも勘弁だが……。

どちらか片方絶対に選ばなくてはならないなら……ベヒモスだな。それは何故か、ベヒモスは草食獣で、とても温厚な性格の持ち主だと言う。

FFとかにいるあの凶暴なヤツとか、死ぬときにメテオ撃つてくるヤツとかは色々違う。

というわけで、ベヒモス。

「ベヒモスじゃな」

「ふむ、わかった。ここからだ少し遠いが……飛んでいけばそれほどでもないか」

そっぴや。空はあんまりバケモノがない。いいね、空最高！

……。

空は最高と言ったな、あれは嘘だ。

「だあかあらあ！ 離せと言っとるんじゃない！」

「フフフ……それは無理な相談だね」

神の使いは空が飛べないらしい。

だから俺に掴まる。

そこまではよかった
が。

「やつ！ だか、胸触るんじゃないっ！」

「トウーエツヘツヘツヘツへ。君と私の仲だろう？」

神の使いは変態さんだったッ！

先ほどから露骨に胸を触ってくるわ、嫌な手つきで体を撫で回すわ、気色悪いったらありやしない。

しかも、本当に笑い方が『トウーエツヘツヘツヘツwww』とかもうね。

「ちよっ！？ や。服の中に手を入れるな！ 変態！」

「そんな事を言っても体の方は正直だな、こんなにビンビンにしてトウーエツヘツヘツへ」

「びっ……！？ ば、死ね！ 死ね！」

本来俺が女なら、多少は嬉しかったかもしれない。言っと俺も変態だし。

だが、しかし……俺は元男。しかも同性愛とか無理な種族だ。確かに体は感じてはいるが、気持ち悪い。

あれだ、男同士で悪ふざけでイチャつくだろ？ あんな感じ。

「どうした、ずぶ濡れじゃないか（笑）」

「なあっ！？ 何処触っ、ひうつ」

「何処つて、ここだが」

「や、やめ。お、落ちる。落ちるからあっ！」

信じられないと思うが、この神の使い。

指入れてきやがった。いや、別に何処にとは言わんが。

「いつその事落ちてそのまま本番へ行こうか」

「ぐ、絶対落ちんっ……ひいあっ！？」

「ハハハ、落ちろ落ちろ」

誰かコイツを止める。

「ほら、もうこんなにグチヨグチヨに」

「うえあっ！？ そんな物見せるでない！ やめ、マジで落ちるか
ら！」

「トウーヘッヘッへ、なら落ちないように集中することだ」
「んう！？」

誰かマジでコイツを止める！ 次は口に指突っ込んできやがった！
気持ち悪すぎる！ いや、気持ち良いが。気持ち悪すぎる！！

「ら、らんへ、こんらことをっ」

「大事な傍観者達に見捨てられないためさ」

言ってる意味がわからん！

「それに私はロリコンでね」

告白しやがった!?

なんて事を思っている間にも神の使いは絶妙な指使いで俺を弄び、俺は俺でフラつきながらも飛ぶ。

畜生。これ……神の使いが女だったら最高級に嬉しいシチュなんだが。

というより、飛べてる俺すげえ。

後で人類とか出てきたら飛べないヤツを捕まえて上空で好き勝手やるか。

おお、堪らん。

「おつとお、そろそろ目的地が見えてきたぞ。悪ふざけもここまでだな」

「ふえ、ふう……後で覚えとれよ」

「ハッハハハハ。怖いな」

マジでムカつく。

しかしまあ、何と言うか神の使いはテキニシャオだったよ。うん、テクニシャン。

何度も言うが……神の使いが女だったらよかったのに……。うう。

次に目の前に広がるのは巨大な森林。

今までの場所とは違い、小鳥のさえずりが響き、とても穏やかな様子だ。

「……綺麗じゃな」

「まあ、ここはベヒモスが凶暴な種族を追っ払っているからね」

顔に大きなアザを作った神の使いがそう言う。あのアザは俺が付けた。

つつかアザで済んだだけありがたく思いやがれ。

「さて……入る前に妖力を物にしたほうがよさそうだな、ベヒモスはこの森林を侵す者には容赦ない……。だが、言ってしまえば頭はあまり良くない。よって惑わしの多い妖術が有効……というわけだ」
「なるほどのお。……しかし妖術。全くイメージできんのじゃが」

ちなみにジズを喰った所為か、結構ステータスがカオスになってきた。

最近じゃ、そこらの雑魚なら怯えて出てこなくなった。

とりあえずはこの駄々漏れな力を抑えることと、『つかみ所のない妖力』のコントロールを覚えなければベヒモスを倒すのは難しいとか。

今度はどれだけ時間がかかるのか……。

「ふむ……神力の使い方と霊力の使い方を覚えるまでの時間とリヴィアタンを倒すまでの時間を考えると……、それほどここに時間は掛けられないな。出来るだけ急いでくれ」

「そうは言ってものお。わし、結構飛ぶので疲れてるし、何せ妖力は『つかみ所のない力』なのじゃろ？ 時間が掛かっても仕方が」

「よし、三日以内に終わらなかつたらお前を犯す」

「全力でやらせて頂きます」

この神の使いならやりかねん。

「ああ、そうそう。一度だけなんだが
たことがあるよ」

私はお前を肉奴隷にし

「なに言っちゃてるの！？ この人！！」

ヤバイ、本格的に神の使いが恐ろしくなってきた。
これは三日以内に終わらせるしかないッ……！！

「ふむ、惜しかったな……」

「何が惜しかったじゃ。この変態めが」

何とか神の使いの魔手に掛かる数時間前で妖力のコントロールと力の隠蔽を物にした俺である。

まあ、襲われそうになったら殺そうと思っていたが……殺せるかどうかは別として。

「ま、なんにせよよかったよ。んじゃ、時間がない。急いでくれ」

どうやら洗淨計画までそれほど時間はないらしく、急げとのことだった。

むう、俺的には別に喰わなくてもいいんだけどな……。

「んじゃ、さっそくやってみるかの……」

といっても森林だ。探すのは骨が折れる……。

ということ、俺はベヒモスの習性を逆手に取った方法に出ることにした。

此方から探すのが難しいなら、あちらから探して貰えばいい。

ようは、今から霊力、妖力、魔力、神力を全開にしてベヒモスを呼び出す。

そして、あちらが此方の存在を感知したら、一気に力を押し込めて、妖術で身を隠し、ベヒモスが警戒状態を解き、帰ろうとしたそ

の時にそのから空きの背中をジズの大足を使って掴み、あとは空高くまで持っていく、地面に一気に突き落として気を失わせる。で、あとは喰うだけ。

実に簡単な仕事だ。

ちなみにジズを吸収したおかげで、どうにもジズの大翼。ジズの大足。ジズの巨砲。この三つが使えるようになった。

他にもジズの眼とかあるが、普段から使っていると何もかもが遅くなりすぎて死にそうになるから普段は使っていない。

そして、そのジズの眼と最近覚えた加速系魔法を使うと『ふん、動きが止まって見えるぞ？ 貴様』が出来る。使う機会があるかどうかわからないけど。

「……っ、来い！」

力を垂れ流し。そして直後。

木々を薙ぎ倒して迫ってくる音が。

俺は早速力を抑え、妖術で身を隠し、上空で待機する。

「
ツツ……！！」

物凄い勢いで先ほど俺が居た場所へと突っ込んできたバケモノは、四本の足に鈍重そうな体。頭に付けられた角はメカメカしい。しかも角の先端に丸ノコがついてる。しかし、その体は巨体と言っても、ジズのような意味不明のデカさじゃない。

それと、ジズの巨砲を見たときも思ったが、何やらジズやらベヒモスやら、他にも黒トカゲとか、高位の生物になればなるほど体に一部にメカメカしい部分があるな。

ちなみに今の所一番苦労したのは黒トカゲ。あの痛みは一生忘れられない。

「ッ」

俺がいない事に数秒間不審感を抱いたベヒモスのようであったが、数秒後には忘れて来た道を戻ろうとしている。

マジで頭悪いのな……。

これが神の傑作か、などと思いつつも俺はジズの大足を使ってベヒモスの背中を掴み、そのまま遙か上空へと向かう。

「上へ参りまあああああすッッ!!」

「ッ!!」

ベヒモスは物凄く暴れているが、ジズの大足は俺から独立した存在なのでいくら暴れても離さない。

……あれ？　もしかするとベヒモスよりジズのが強いんじゃない？　そんな事を思いつつも、俺は雲の上へと到達した。

「下へ参りまあああああすッッ!!」

若干ふざけつつも、そのままベヒモスを下にして自由落下する。

そして、そのまま徐々に加速していき、最終的には物凄い速度で地面へと激突する。

その衝撃で木々はなぎ倒れ、地面にはクレーターが出来る。

……ベヒモスはどれだけ重かったんだ。

そして、あの高さから落ちて、傷一つないコイツの体。どれだけ硬いんだ。

しかしまあ、見事に気を失っている。作戦通りだ。

「ふむ、割と楽に終わったね」

「ううん、なんか達成感があまりないのお……」

そんな事を思いつつも俺は右手にいつものガントレットを呼び出し、ベヒモスへと突き刺す。

けたたましい轟音と共に針はベヒモスへと突き刺さり、直後に食事を始める。

「お、おおっ、これは中々……ジズよりも強い力……」

「まあ、一応にはジズよりも強いからね、相性の問題でジズより弱い」

何だそりゃ。

どうやらこの世界ではチョコキのがグーより強いらしい。

そうこう言っている間にもベヒモスを食し終わる。

「ふう、ごちそうさま」

「お粗末様だったね」

いや、お前が作ったんじゃないだろ。

とか思いつつ、少し食後の休憩。

「ベヒモスの特徴といえば、やはり山ですら切り倒すそのノコギリだろう。強力な武器になると思うぞ。……ああ、あと背中の中殻は何よりも硬い盾になるな」

神の使いの言葉、俺はその言葉を聞いて何となくベヒモスの角と背甲を思い浮かばせる。

すると、右手にはお決まりのカラーリングの巨大な丸ノコ。左手にはこれまたお決まりのカラーリングの大盾。

「おお、お？ 重ッ！ー」

「ハッハッハッハ、まあ、ベヒモスの一部だしね。そりゃ重い

さ。君でも両手で扱うのがやつとじゃないかな」

ぐ、確かに……コレを片手で扱うのは無理だな……。

「……さて、いよいよ最後の幻獣だな」

「リヴィアタン……」

伝記に『最強の生物』と記される正真正銘のバケモノ。しかも、問題はそこだけじゃない。

今までの戦闘は、俺は不死身で相手は不死身じゃない。という此方が圧倒的に有利な戦いだっただが……。

今度は相手も不死身なのだ。

つまり同じ土俵での勝負となる。

「まあ、お前なら勝てるよ」

神の使いのそんな言葉。……コイツは。

コイツは俺よりも俺をよく知っている。

「……神力と霊力の使い方覚えれば、の話だが」

「……物にしてやるわい。今までと全然変わらないように」

軽口を叩いたが、俺は恐怖していた。

『最強』の称号を持つ生物に。

空と陸を征して（後書き）

次回、太古の話最終回！

次回予告

謎の襲撃者『アリヤーマン』によって大ダメージを負う企業戦士ア
クアビットマン！ アリヤーマンの使うマープW鳥による大ダメー
ジはアクアビットマンに確実に追い詰められていた。だが！そこに
未知なる救世主が現れる！！

企業戦士アクアビットマン 次回 第一章完！！

『コジマの救世主アルギロス！お前の血はコジマー色か！？』

次回も絶対見てくれよな！コオオオジマアアアシュウウトオオ
オオオ！！

もちろん本作品には関係ありません

変わり目（前書き）

不思議の国のアリスをエキサイト先生で翻訳したようなわけの分らない回。

変わり目

なんて事があったのが二週間ほど前の話だ。

「へえ、結構早かったじゃないか」

「まあ、の」

俺は無事神力と霊力の扱いを大体覚えた。

と、言っても大した物ではなくて、霊力は簡単な生命力の操作だけだし、神力は複数の知恵を同時に呼び出すことが出来るようになった程度。

後は自分で覚えるとのこと。

……待てよ？

「のお、これ。リヴィアタン戦で役に立つのかの」

「いや、全然まったく」

おおーい！

「軽い冗談だよ。神力の方は役に立たないが、霊力の方は役に立つんじゃないかな。……というよりも、まず『ジズ』『ベヒモス』『リヴィアタン』の三体には霊力、魔力、妖力、神力、どれも効果が薄いんだよ。なにせ、神の作品達だしね……。ところで力の関係は覚えているか？」

「ううん、確か。霊力は妖力を封じ込め、妖力は魔力を吸収し、魔力は神力のルールを壊し、神力は霊力を凌ぐ……。だったかの」
「惜しい、少し違う」

神の使いの訂正を聞くかぎり、霊力は妖力に強くて、妖力は魔力

に強い、そして魔力は霊力に強い。この三すくみが基本で、神力は、霊力、妖力に強く、魔力に弱いとか何とか。

でもまあ、何でも神の作品達は全部均等だから、全部均等に効き難いとかで、結局は生命力を奪うのが手っ取り早いそうぞ。

「さて、見えてきたぞ」

神の使いのそんな言葉。そして、それと同時に海面から馬鹿でかいバケモノが姿を現す。

初日にはビビッてあまり見なかったから気付かなかったが、体の至る所に砲門はあるわ、顔の横からはレーザーブレードのようなものが突き出してるわ、ファンネルは飛びまくってるわ。

……うん、何だこの戦艦。

「いよいよ最後の幻獣の登場だ。気を抜くなよ」

それだけ言い残して神の使いは霧のように消える。

……あれ？　もしかしてアイツ、逃げた！？

「　　ッッッ！！！」

直後の海すらを割る鳴き声。

どうにも最強の生物の称号は伊達や飾りではないらしく、その叫びと共に放たれた無限の光線は一瞬で海、陸、空の生物を焼き尽くす。

……コイツが清浄する役なんじゃね？

そう重いつつも、俺は右手に呼び出したベヒモスの背甲を使ってその攻撃を受け止める。

そして、光の波が止んだと同時に背甲を捨て、ジズの大翼を使って飛び上がった。

リヴィアタンはそれにあわせて実に精巧な射撃。そしてファンネルによる絡み手。さらには自身の巨体を十二分に生かした突撃までもを行ってきた。

どうにもこうにも規格外すぎる！

今までのジズやベヒモスが文字通り『可愛く』見える強さだ。

それにコイツの一番厄介なところは、地道に魂を喰うことでしかダメージが通らないとこだ。

俺は即座に弱点を探し出す知恵と、神力のコントロールが多少は可能になったことで使えるようになった、『撃ち落す知恵+喰らうための知恵』を右手に呼び出す。

そして、それを弱点へと打ち込み、存在を喰う。

「ッ！！」

「ぐ、アッ、が……！！」

だが、そう簡単には行かず、打ち込んでしばらくするとリヴィアタンによる反撃を喰らい、食事は中止された。

何と言う破壊力、一撃で右足と右肩が吹き飛んだ。

しかし、数秒で俺の傷は完治し、再び突撃してくるリヴィアタンを避けると、再度ガントレットを打ち込み、食事を再開する。

今度は逃がさない。俺は更に左手にベヒモスの角を呼び出し、即座にリヴィアタンの頭部へと振り下ろす。

「ッ！！」

絶叫。

鼓膜を軽く破る程の轟音だが、俺は負けじとベヒモスの角でリヴィアタンの脳を抉る。

リヴィアタンは不死。よっていくら切っても死なない。だが。

いくら再生すると言っても脳をリアルタイムに削られながら動けるわけがない。

そして、俺の読みは当たっていたらしく、リヴィアタンは崩れ落ちるように海へと落ちて行く。

「苦しい戦いだっただ……」

「ハッハッハッハ、やるじゃないか。上出来だよ」

逃げた神の使いが戻ってくる。このヘタレが。

「……なんか呆気ないの」

「それもそうさ、なんせ、生物の強さを決めるのは単純なステータスの高さじゃあない、そいつの『知恵』だ。……実を言うと、お前のステータスはジズ意外には劣ってる」

……。

とてつもなく嫌な言葉を聞いた気がする。

……ええ？

じゃあ、俺は初めっから正面衝突じゃ土台勝てない相手と戦わされていたのか？

………小心者で助かった。

そして、この神の使い。後で覚えてやがれよ。

「ふむ、さて……行こうか、そろそろ。洗淨の時間だ」

「行く？ どこに」

「ラブホテル」

「いや、真面目に」

「……洗淨が終わるまで一時的にこの世界から離れるのさ。巻き添えはゴメンだからね」

うん、なるほど。

しかし、だんだんコイツ壊れてきたなあ……。

久しぶりだな、とこの空間を見て思う。

以前来た時から、大体一ヶ月振りぐらいなのだが、とてもとても昔のここのように感じられる。

まあ、色々ありすぎたから仕方がないか。

ちなみに俺が今いる場所は灰色のブロックが重力を無視して均等に並び、灰色と黒の二色に支配された世界。空には多くの流星が輝き、月がなくとも十分な程異常な明るさを放つ星光に支配された世界。……まあ、なんていうか、鴻上会長（神）のキッチンだ。

「Happy birthday to you……」

そして鴻上会長チックな神は相変わらずケーキを作っている。バースデーを歌いながら。

ううん、いつ見ても奇妙だ。

「久しぶりだねえ、……といっても、此方とそちらの時間の流れは違うから。私にとってはそれほど久しぶりでもないが」

「はあ……そういうものかの」

「そういうものだよ。……さて、コレでも食べたまえ。キセノン君」

そう言つて神はケーキを差し出してくる。

ケーキの上には『Promethium Xenon』の文字と共に、数枚の白い紙。

「……なんじゃ、これ」

「見事に三体の幻獣を食した君への選別だよ。私が与えたステータスじゃ飽きたらず、私の作品までも貪るその貪欲さッ！！　素晴らしいイツー！」

「はぁ、どうも……」

まあ、神の使いが『喰わないと私がお前を食うぞ（性的な意味Yes！！　Yes！！）』とか言ってくる予感がしたから最後まで文句言わずに喰っただけだ。

……てのはどうでもよくて。

俺が知りたいのはこの紙切れの正体だ。

「それは『スペルカード』と、後の時代に呼ばれるものだよ」

スペルカード？　聞いたことがあるようなないような。やっぱねえ。

「ちなみに後の時代ってどれくらいじゃ？」
「後数億年後だ」

いらね。

これいらね。

「……まあ、いらないなどと思わず受け取ってくれ。そして作りたまえ。スペルカードを」

「や、だから。スペルカードがどういうものか分からんし、そんな数億年後のこと今からやってもお……」

「そうか……なら、説明しよう！　恐らく説明を聞けば君は気に入るだろう……」

俺はとっても後悔している。

神はマジでネ申だった。

後の世に伝わるこのスペルカードを使用した遊び、『弹幕ごっこ』

それは一言で表せば花火を相手の顔面へと打ち込むドンパチ遊びらしい。

まず、弹幕ごっこでは弹幕を張る側と弹幕を避ける側に分かれるにして、弹幕を張る側は先ほど神から俺が貰った紙切れ……つまりところスペルカードにいくつかの技を記録しておき、それを使う事を宣言し、弹幕を張る。

弹幕を避ける側はそれを回避する。

弹幕を張る側は相手の気力をゼロにすれば勝ち。避ける側は相手の弹幕を全て攻略するか、相手の気力をゼロにすれば勝ち。

実に単純明快かつ聞くだけでも楽しそうな遊びじゃねえですかい。

「まあ、それが使われるのは数億年後だがね」

鴻上会長チックな神に忘れていた現実を思い出さされた。

……そうなのだ。これ、すっごく楽しそうだが、コレが使われはじめるのはかなり後とか。

死ねってか、俺に。

生殺しッ！！

「なんで、コレをわしに見せたんじゃ……これじゃあ、生殺しじゃ……」

「いや、君が途中の時代で自暴自棄にでもなったら困るからね、保険だよ」

なんたる策士。孔明の罠かッ！！

しかしまあ、これはコレでスペルカードルールが広まるまでに色々と作れるのだからありがたいと言えはありがたい。

目指せスペカマスター。

「さて、そろそろ時間だ。行きたまえ」

なんて感じに俺が色々と燃えていると、神はそんな事を言った。

「ああ、そうそう。またこの間のようなことになったら困るから、大分時間は飛ばしておいたよ、とりあえずオーバードテクノロジーの時代を過ぎるぐらいには」

「……そういえば、神の使いも関わるなとかなんとか言ってたのお。わしはいつたい何をされたんじゃ？」

「死なないことをいいことにモルモットにされたのだよ」

聞かなきゃ良かった。

しかし、そんな物騒な時代なら飛ばしてくれて結構。コケコッコ。アメリカではクツクドウドウルドゥー。

「さて、再び旅の始まりだ。来るであろう弾幕ごっこを生きる希望にがんばりたまえ！ グッドラックオッ！――」

相変わらずネタっぽい神だなあ。

で、冒頭に戻る。

「お前も嬉しいだろう？ ……いや、この角度じゃないな……」

うん、この神の使いは何をやっているんだ。朝っぱらから
いやんなっちゃうね。

「それにしても……お前も大分姿が変わったな、綺麗だよ」

褒められた。だが嬉しくない。元同姓に綺麗だよ（キリッ）とか
言われても気色悪いだけで。

そうそう、俺の容姿だが。

どす黒い髪に痛々しい化学合成物のような緑色の眼、そして白い
肌。

ここまでは『光の洗淨』があるまでと同じだ。

変わったのは身長、胸。顔つき。

身長は大分伸びた。150後半ぐらいだと思う。

胸も大分成長した。正直自分の体に欲情しそうで怖い。

そして何より顔つきが結構変わった。

無茶苦茶キリッ、とした顔なんだ。

超凜ッ！！とした顔なんだ。

性格と真逆な顔なんだ。

でも美人なんだ。

自分に惚れそうで怖い。

「……のお、神の使い」

「爺言葉も直した方がいいな」

「俺も思った、それ」

ロリ体のときならまだ、ロリババアということでは何とかやってら
れたが。

この顔とこの体つき、そしてこの顔で爺言葉はない。

クールババアとか聞いたことないよ。

特に顔に似合わないんだ。

顔が妖艶さを持ってりやそりゃ、似合ったかもしれない。でも、この顔はどっちかっていうとアレだ。無茶苦茶仕事熱心で真面目な人。

綺麗だけど女っぽさが無い。そんな感じだ。それに爺言葉は似合わない。

「じゃあ、これから俺っ娘で行くか……」

「いや、それも微妙だ」

「だよー」

困ったことに俺っ娘も似合わない。

どうしろと。

まさか死後の世界の為に作ったキャラは役立たず、そして普段の喋り方も似合わないときた。どうしろと。

「……口悪敬語とかいいんじゃないかな」

「あなたの趣味に合わせる気はないんですよ、ゴミが。……こんな感じかね」

「……まあ、いいんじゃないかな」

神の使いがニヤけてる。気持ち悪い。

Mか、神の使いはMなのか？

「しかしまあ、そんな事言いましてもね、俺としちゃ敬語はキツイわけよ」

「俺言っのやめろ」

何故か全力で否定された。

……先ほど敬語はキツイと言ったが、こう見えても生前は立派な営業マンだったんだ、敬語とか普通に使える。

「なら、コレでいいのでしょうか？」
「いいんじゃないかなあ」

またニヤけてるよ。神の使い。

……ということで俺のキャラは一応には敬語キャラが定着した。

「次は服装か。 そんな服装で大丈夫か？」
「大丈夫じゃない、問題だ」

この身長にこの顔、そしてこの胸なのに白キャミソールと黒スパッツはねえわ。
いくらセンスゼロな俺でも引くぐらいねえわ。

「服、か。どうしたもののかね……。メイド服とかどうだい？」
「ダメだ。メイドは後々に出てくる」

後々で。

あ、わかった。あの……。なんだ……。忠誠心は鼻から出る。とかや
つてた変態メイドか。ダイヤモンドザンに名前似てた。
ナイフ投げてくるDIOっぽい能力持つてる奴だろ、知ってる。
知らんけど。

「うーん、俺。服センスゼロだからわからんよ……」
「……できればいいが 私の前でも敬語で喋ってくれ」
「ヤダ、ニヤけるから」
「トウエツヘツヘツへ、あまりにも美しくてね」

寒気がする。今すぐコイツとオサラバしてえ。
しかし服装か、服装。服装ねえ。

普通すぎるのは嫌だしなあ。

「これなんかどうだ？」

そう言つて神の使いが取り出すのは俺の頭がすっぽり全部入るフードがついた黒いコート。

……なんたる?? 機関。

「まあ、一応着てみつか。……着替え中にこつち向いたら殺すかな」

「トウーエツヘツヘツへ、安心しろお。私はそんな事絶対しない」

……どうだか……。

そう思つてとりあえず今身につけているキャミソールを脱ぐ。

と言うより、今気付いたが。

キャミソールの下、何も着てなかった。

いや、以前の体のままなら別段いいだろうが……、これだけ成長したのに下着を装備しないのはないわな……。

ううん、ブラジャーとかわからん。ええい、神の知恵に任せてしまえ。

そう思つた俺は手元に『身を隠すための知恵』を呼び出す。

黒ボディに青いラインの下着二種が呼び出された。

ブラ&ぱんてゐだ。

おう、黒下着とは大胆な……。

なんてアホな事思いつつ、どうせぱんてゐも出たのだから履くか、
と思い、とりあえず全裸になる。

元々からそういう性格なので脱ぐのには全く抵抗がない。生前は
自宅じゃ殆ど下着姿だったし。

そして、脱いで見て圧巻。

わお、脱がなくても凄いのに、脱いでも凄いとはコレいかに……

！！

ウエヘヘ、この体はたまんねえ。
なんつつうふうに変態的思考を働かしていたら。

「つなぎめのない美しいフォームだ……」

後ろの変態が実力行使に出た。なんてこつたい。

一瞬で後ろに肉薄し、俺の胸を後ろから鷲掴みにしてくる。
よし、殺すか。死ぬかどうかかわらんけど。

「オラア、死ねッ！！」

「ぐふうっ……」

後ろに全体重を載せ、思いっきり地面に神の使いを叩きつける。
神の使いと言えど、流石にダメージがあつたようで、地面でもが
き苦しんでいる。

よし、今のうちに服をさっさと来よう。次はあっちも全裸になっ
てくるやもしれぬ。

なんてアホな事もやりつつ、無事着用完了。

結論から言おう。絶対的に似合ってる。

「……全身黒コートに、どす黒い髪。更には化学合成物のような緑
色の眼……そして凜とした顔。豊満な胸、引き締まった全身……、
何たる完璧美人」

ちなみに自画自賛だ。

「まったくだ。襲いたくなるね」

既に襲った後だろ、神の使い……。
ていうか、ロリコンじゃなかったのか？

「後は……髪型だね。ツインテールで」

何かリクエストを受けた。

ちなみに今の髪型は腰までのロング。実に伸ばしっぱなしである。

「まあ、別に構わんが……」

そう思っ手っ取り早く髪をツインテールにまとめる。

ここらへんの技術は生前に覚えといた。まさか自分に使うことになるとは思わなかったが……。

「さて、どうよ」

「……トウエツヘツヘツへ」

怖いよ。あの人笑ってるよ。怖いよ。……ああ、人じゃないか。
しかしまあ、アイツの笑い声が示すとおり、なんとも似合っている。

しかもフードを被れば何と不思議！ 一見するとただのショートカットに大变身！

おぉー（自画自賛）。

「ああ、そうそう。その黒フード。君の力をほぼ完璧に隠蔽する効力がある。上手く使いこなせよ……。つとお、さて、そろそろ時間だな……」

神の使いは何処から取り出した携帯の時計を見てそんな事を呟く。

……うん？ 時間？

「……悪いね、そろそろお別れの時間だよ。君は無事に独り立ちできそうだからね……私もお役御免といったわけさ」

……なるほど。

それはそれで……寂しいものが……。
全くない。

むしろ嬉しい。

「……別れの言葉を言ってもいいんだぞ？」

「バイバイ」

「いや、もう少しあるだろう」

「寝てる間に口の中にマイサムぶち込むような変態に残す言葉はねえですう」

「……あ。気付いていたのか。驚いたよ」

「そりゃあ、あんだだけ高速で動かしてりや気付くわ。しかも堂々と口んなかにぶつ放しやがって、次の日一日中口が不味かったんですけどー」

「まあ、あれは私たちにとっては愛情表現の一環に過ぎな」

「そんな変態種族があつてたまるかッ！！ さつさと消えろ！ 変態がッ！！」

「やれやれ、冷たいな。じゃ、また暇があれば来るよ」

出来れば二度と顔を会わせたくねえ。

……といった感じに俺は無事神の使いという名の変態を撃退し、コレから始まるであろう旅に心を若干躍らせるのであった。

と、意気込んだのはいいものの……。

何処に行こうか。

実を言えば俺は歴史オンチで、過去のことなど全然知らん。というより、昔のこと学ぶのって何が楽しいの？　どんな利益があるの？　って思考の人間だったからな……。

少しだけ後悔だ。

まあ、話を戻せば俺は歴史オンチでどの時代に何が、以前に今が何時代かすらわからない。

なので、何処かの某融様のように全国の奇怪な出来事見て回るとかできないわけで。

……某融様？　なんだったか……思い出せない。

更に言ってしまう俺は超現実主義者だったのでオカルト分野にも疎い。

だから、何処にどの妖怪が　　なんてのもわからない。

用はどうしようもないのだ。

マジでどうしようもない！

……さて、どうしたものか……。

「上手くいきませんねえ……」

誰にでもなく呟きながら道端の木の株に座りこむ。

マジで途方に暮れちまうよ。ママン。

「おや、嬢ちゃん。どうしたい？　道にでも迷ったかい？」

なんて感じの俺に救いの女神。いや、救いのオジジ様が舞い降りた。

「道に迷ったといいますが、まずその迷う道すらないというか……」
「んん？ ははん、さては一人旅を始めたはいいが、行く先がねえつてえ、クチだな？」

「おお、その通りです。まさにその通り……。ところでお爺さんはこれから何処に行きなさるのです？」

「お諏訪様の社さ、……といつても、最近じゃあ、八坂とかいう神が乗っ取ちまつたがね……ああ、今にもミジャグジ様の祟りが降り注ぐぞ、おおこわ、おおこわ……」

……待て。

最近神社が他の神に乗っ取られた……？

それはつまり、神が物理的に存在するとも言つのか！？

……てか、既に鴻上会長チックな神とか、変態の使い……じゃなくて神の使いとか居るんだから居てもおかしくないか。

で、話を戻すか……。

つまり、このお爺様が言うには……。

お諏訪様という神が元々はこの地の社には存在して、その神はミジャグジ様とやらをナニカシテイタヨウダ、で、恐らくはミジャグジ様は祟り神かなんかのだろう。それで、八坂という神がお諏訪様とやらの神社を乗っ取り、その結果こうしてお爺様はミジャグジ様の祟りを恐れていると……。

……つまり、お諏訪様 救出対象。八坂 ダースベーター。この解釈で大丈夫だろう。

ということは、八坂なる神を倒せば俺は英雄か。

……でも神だろ？ 勝てるのか？ いや無理だ。

いやいや、神の傑作と呼ばれたバケモノ達を三匹も食った俺だ。それに年だつて俺のが上。

勝ったつておかしくないだろうに。

「……よし、お爺様。よろしければその社まで私を連れていってく

れませんかね？」

「別に構わんよ、その代わりと言っちゃなんだが、着くまで話し相手になつてくれんかね」

「構いませんよ。大して面白い話もできませんが……」

といった感じに俺は歩みはじめた。

物理的に存在する神への期待に若干心躍らせながら。

変わり目（後書き）

変わり目ということでロリババアといアドバンテージに別れを告げた主人公！

はたして、世界は見た目は敬語で完璧美人で明らかに人格者！中身は変態！な彼女を受け入れてくれるのか！？

次回『孤島のジャック・ザ・リッパー』

真実はいつも一つ！

オリキャラ紹介

>i26322—2413<

プロメチウム
Promethium・Xenon キセノン

本作品主人公。

変態かつ厨二病で気狂い。

『少女絶対優先』『少女絶対溺愛』の二つの信念を持つ。
能力は『知恵を支配する程度の能力』

全体像 <http://2413.mitemin.net/i26323/>

一晩。それだけで十分だ（前書き）

実は私ロリコンじゃないんです。

あと、今回からカオスになるかもしれません。自暴自棄とも言つ。

一晚。それだけで十分だ

ただ今、オジジ様と楽しく散歩中である。

というより……俺のこの姿を見て不気味がないとは……中々やりおる。

まあ、フード被ってなかったからだろうけど。

俺の服装を細かく表記すれば、全身をすっぽりと包むコート。そんな言葉が相応しい。細かくねえ。

激しい動きをすると生足がチラチラ見えるところがキュンキュンポイントだ！

ちなみに一応下着の上にスパッツを履いているから下着は見えないぞ

「で、お嬢ちゃん。見ない顔だがあ、どっから来たんだい？」

いきなりオジジ様が何か答え辛い質問をしてきた。

……眼の色からして日本人じゃあねえしなあ……。

かと言って未来人ですうとか言えんし……。

とりあえず適当にウソ吐いとくか。

「私はですね、ここから海を渡った先に広がる大陸にある『Eve^{えヴ}
r Ruki^{あーるあき}』という国から来たのです」

「悪い、わかんねえや」

「でしょうね、何たって、田舎ですから」

「そうなんかい、……じゃあ、お嬢ちゃん。名前は？」

「『Promethium Xenon』と言います。キセ嬢とでも呼び下さい」

「ぶ、プロ……？ どういう字い書くんだい」

む、漢字を当てはめる……か……。
プロメチウムは無理だから……キセノン……帰瀬乃とでもしとくか。

俺は即座に手元に『理解させるための知恵』を呼び出し、オジジ様へと渡す。

「ああ、キセノっていうんかい」

「キセ嬢とお呼び下さい」

「わかったよ。で、キセ嬢……名前を知って早々悪いんだが、もう着いちゃった」

オジジ様が若干バツが悪そうに言うと、俺の目の前には圧倒的広さを持つ湖が眼に入る。

……あ、わかった。

お諏訪様って……。諏訪湖の神か。

なんで気付かねえんだよ、俺はバカか、バカだよ。バカでした！！
諏訪湖、諏訪湖……。お諏訪様の名前『諏訪子』だったりしてな。
そしたら笑うしかないな。アッハッハ！

さてさて、オジジ様は礼拝してるし。俺は自己探索と行きますか……。

ダースベーターヤサカの首を討ち取るのじゃ。

しかししかし、駄菓子菓子。

見つかる気配なし。それ以前にここ等結構広い……。

しかもダースベーターさがしてる間にオジジ様帰ってしまったし。

仕方ない、礼拝するか……。

そう思った俺は手元に『生き延びるための知恵』……つまり金を呼び出す。わーお、我ながら汚い手だ……。

参拝は確か……二礼二拍手一礼だったっけかな。さっぱどわがね。生きてる間にまともに参拝したことないし。

とりあえずまあ、金の単位が分からないので適当に寶銭箱にシュ

ウウウーッ！！　して、二礼二拍手一礼して。願い事。

「神の使いが減びますように、さつさとスペルカードルールが使われますように、可愛い少女捕まえられますように、ハーレム作れますように。笑いが止まらねえげヒヤヒヤヒヤヒヤ！！　という台詞が言えますように……」

欲張りすぎだろうか。まあ、別に構わんだろう。

「さて帰ろう。何処に帰ろう。帰る場所がないよ。マイママン」

夕日を見つつホロリと涙を流した俺は帰路に着こうとする。
いや、帰路無いんだけど。

ちなみにあの倉庫は中々にオーバードテクノロジーが使われていたので旅に出た際に廃棄した。よって俺は今ホームレスなのです。

「そのあんた、ちよいと待ちな」

直後、背後から声。

お、このシチュエーションは……っ。

「　　立つな」

「ん？　なんか言ったかい？」

「俺の後ろに立つなッ！！」

直後ジャキリ、と予め召喚していた『遠くの物を狙い打つための知恵』を声の主へと向ける。

ちなみに、その声の主。

両端に目玉が着いた奇妙な帽子を被った金髪の少女だった。

……うん？

「……ベラ？」
「……は？」

珍妙な生物を見るような顔で見られた。泣きたい。

「……あんた、何モンだ？」
「いや、しがない参拝客ですよ」
「ウソつけ」
「ッ！？ どちら辺がですか！？」
「その服装」

……あ。

言われてみればマトモじゃねえ。

さっきのオジ様が特別なだけで、普通の人からしたらおかしいか、この服装……。いや、目の前の幼女普通じゃないけど。

「ばれてしまっちゃア仕方ねエなア……。俺の名前は『アクセラレータ一方通行』
つつうんだ。ヨロシク」

「……アク？ 変わった名前だねえ……。だけど、私が聞きたいことはそんなじゃないんだよ、あんたが何者かって聞いてんだ」

「だからア、しがねエ参拝客だつつつてンだろうがよオ。この怪人チビ帽子……いつまでエサ待ってるヒナ鳥みたいにピーピーないてンですかア？」
「……」

調子に乗って一方通行さん口調で話していると段々目の前の少女の表情が恐ろしいものになってきてしまった。

マズイ。
だが。

だが俺は引き下がらない。ついでに謝りもしない。

「つうかよオ。普通人の名前聞くときは自分から、って幼稚園で習わなかったンですかア？ あア、悪イ。それとも野生児だったンですかア？」

「……はん、私の名前は洩矢諏訪子^{もりや すわこ}。この神社の神やってたりする」

へー神やってんのかー。

……。

舐めとんのか。

こんな幼女が神なワケあるかッ！！　そしてもしも本当だったらその名前は安直すぎんだろッ！！

「へー、そうなんですかア。ヤクはやめといたほオがいいぜエ？」

「……絶対。絶対お前は私をバカにしてるよね？」

「そりゃア、『私は神様ですウ』なんざぼく幼女が居たら誰でもバカにするつつウの」

「……これでもかい？」

直後。

まるで水風船が破裂したように目の前の幼女から物凄い力が発せられる。

この力は　。

神力！？　真面目にこんな幼女が神だとしても言うのか？！　この世の中おかしいぞ！！　そして真面目に諏訪湖に住んでる神様の名前が諏訪子だったッ！！　アッハッハー！

「おおおおッ！？」

身構えもしてなかった俺の体は簡単に吹き飛ばされ、地面をのた

打ち回った。

あ。これ知ってる。あれだわ。竜のデモンズソウル使って覚えられるヤツ。『神の怒り』だわ。

ウウウウンバアサ……。

「はん、やつぱりこの程度かい。下級妖怪」

なんたることだ。

実は神だった幼女に下級妖怪呼ばわりされてしまった。

つか、俺多分妖怪じゃねえし……。

まあ、多分、眼の色とか、服装とかで判断されたんだろうな……。

この黒コートの隠蔽効果で俺の力は隠されてるし。

……よっしゃ、決めた。

この神を今からちよこーっとだけ苛めてみる。

戦闘には慣れとかないとな。

「舐めてンじゃねエぞ、幼女がアアアアアア！！！」

確実に自業自得なので、別段そこまで激しい怒りは覚えていないが、黒コートの隠蔽効果を消し去り。ある程度の力をちらつかせる。ちなみに、このチラリズムには二つの意味がある。

一つは全力を出すと、恐らく居るらしいもう一人の神。ダースベーダーヤサカが姿を現すかもしれないから、その危険性を防ぐため。もう一つはコレを全力だと思わせることで相手を油断させるため。ううん、我ながら汚い。けど言っちゃまえば勝っちゃまえばそんなのは超どうでもいいわけですし。

「今のうちに精々咆えるんだね、下級妖怪！！」

そう金髪幼女神SUWAKOは鉄の輪を放り投げってくる。何その

武器カコイイ。

それに対し俺は、加速魔法を使って諏訪子嬢の後ろへと回りこんだ。

ここからどうするか？ 首を切り落とす？ 背中を一突き？ N

O! No!!

いくら怒っていて、尚且つ神とはいえ、幼女を傷つけるのは人間としておかしい。

よって。

「ひゃんっ!？」

強制的に愛でます。

過剰に愛でます。

神の使いにやられたように、私はコイツにやります。

堪った欲望をロリ神にぶちまけます。ヒヤッハー!

「ぎやはははははは!! ンだよ、なんだよ。なんですかア!？」

このザマはア!？ おら、可愛く鳴いてねエで抵抗の一つでもしてみろっつウの!!」

「んやっ!？ ちょ、何してッ、や。こ、クロス、殺してやるッ!」

そんな事を言う諏訪子嬢の言葉には耳を傾けず、裾から侵入させた我が苦手と毒手で諏訪子嬢のチェリー（上下）をコロコロと弄ぶ。ヒイ、こりや神の使いの気分もわかるわ。嫌がる幼女を好き勝手に……。

トゥーエッヘッヘッヘッヘッヘッヘッ

「ああ？ 無理矢理やられてンのに、こんなにぐちよぐちにしゃがんで、誘ってンのかア？」

「ばっ、違ッ……!! ひいっ!？ な、何して……ッ!」

もう我慢できないZOU って事で、俺は毒手の御指様で諏訪子嬢の未開拓トンネルの開拓を始めた……んだが。

「ひう、くつ、……！ や、やだ。無理矢理やられてるのに、そんな、やんつ、ウソ、そんなっ……」

「おいおい。こいつア……いったいどオいうことですかア？」

……諏訪子嬢のトンネルはすでに開拓済みだった。

馬鹿な、この時代に既にロリコンがいたのか。

俺は絶望と驚愕の凶弾に心臓を撃ちぬかれ、思わず先ほどまで抱きかかえていた諏訪子嬢から手を離す。

「あだっ！？ 急になにすんだい！ ……というか、殺す……前に、なんで、止めたんだい……？」

若干気恥ずかしそうに聞いてくる諏訪子嬢。無理矢理やられてもこの反応。確実に。

「はン、俺はなア、中古品サレビなンかには興味ねエンだわ」

「やっぱり殺す。理由次第じゃ許そうとも思ったが 殺す！！」

ぐっ、この金髪幼女ビッチ神SUWAKOは本気だ！ どうする！？

たたかう

まほう

ようじゅつ

アイテム

ニアおどす

にげる

キセノンの おどす ！

「悪いが！ こっから先は一方通行だア！ 立ち入り禁止領域つてなアー！！ つうわけで、尻尾巻きつらえて無様に元の場所に戻りやがれエー！！」

キセノンは 全力を開放した！
これであつちが引かなかつたら土下座する。

「 ツー？ 馬鹿な、ただの変態の下級妖怪かと思っていたのに ！！ これは、いや、こんな強力な力 ツー！！」

諏訪子嬢は一瞬で顔を青くし、その場で膝を着く。
どうやら俺の力は結構なものだったらしい。
よかった、本当によかった。

あれで『……で？』とか言われたら死ぬしかなかった。

「 いったい、あんたは……」

そして、諏訪子嬢は苦に顔を歪めながら俺の正体を探ろうとする。
だから、俺は。

「ふっ……通りすがりの変態フードさ」

あながち間違っていない答えを返すことにした。

「
……」

「……」
「……」

しばらくの沈黙。ミスったか？

「……はあ、もういいや。……で、何しにきたんだい？ 変態さん」
「その台詞を待ってたんだわア……頼むからもう少し気イ効かせろよ？」

「……で、用事は？」

「あア、ここに来る途中でなア。お諏訪様……まア。お前なンだろうが、お前がヤサカとかいう神に乗っ取られてわんわん泣いてうるせエって聞いたからよオ……そのヤサカってヤツを倒しにきたンだわ」

「あー。大分前に来てくれりゃよかったのに」

ん？ どういうことぞ？

今じゃもう遅いのか？

ああ、諏訪子嬢はダースベーダーヤサカのオナペットと化したと。
OK、OK。

「悪いけど、今、神奈子^{かなこ}を退治されると私も困るんだよね……」
「あア？ いったいそいつア、どオいうことですかア？」

うん？ 神奈子？
なるほど。わかった。
百合展開かッ！

「……ま、とにかくついて来な。立ち話もなんだ、お茶くらいは出すよ」

おお、意外にも親切。さすが幼女。

他人の神社を乗っ取るような神『ダースベーターヤサカ』。

俺は完璧に無茶苦茶怖い神だと思ってた。

それか他人をモスク風呂に付けたりするか、極度のメモリ中毒者だと思っていた。……そりゃヤサカか。
ところがどうだ。

「くかー……」

ちなみに俺の目の前には威厳たっぷりな赤い服の女性がむっちゃ無防備な姿で寝てる。

先ほどの金髪幼女神 SUWAKO が言うにはコレがダースベーターヤサカの正体らしい。

「さて、こんなヤツなんだけど。まだ倒したいかい？」

「神とはなんだったのか」

俺の見た神をご紹介しよう。

ひたすらにケーキ作ってる神。幼女、コレ。

あのさあ……。

こう、もつと神らしい神いねえの？

コレだったらまだ夜神月のが神に見えなくもない。

「……まあいい、とりあえず襲うか。性的な意味で」

「あんた、ホント意味が分からないね」

諏訪子嬢が軽蔑するような視線を送りながらそんな事を言ってきた

た。知ったものか。

俺は綺麗な人見つけたらとりあえず全員に手え出すってきめてんの！！

「はん、はん、はん……諏訪子嬢とはまた違った魅力があるな……」

とりあえず舐めまわすようにアンノウンヤサカの体を見る。

見れば見るほど。

魅力的だと言いたいが。

いや、魅力的だが。

「……コイツ、賞味期限切れ」

俺が諏訪子嬢に向かって言おうとした瞬間、アンノウンヤサカが起き上がり。

物凄い勢いで吹き飛ばされた。

黒トカゲの突進と同レベル。

すっげえ、景色が無茶苦茶変わってるや。

「ギヤアアアアッ！！」

行き先は湖だった。

俺は水切りの要領で何度も水面を跳ねて、見事湖の中心で沈んだ。十五段いつてるぞ！

なんて馬鹿なこと言っても仕方ないのでとりあえず湖の縁まで泳いでいく。

なんで俺は吹き飛ばされたんだろう。

「おい、生きてるかーい？」

「THE・無傷」

「げえ、生きてた」

げえ。て。

生きてたんだから喜んでくれよ。

なんて事を言いつつとりあえず水切りの女王ことヤサカの元へと戻る。

「……………まだ生きてたのかい」

「殺す気だったんですか」

とりあえず敬語で接する。いや、本来俺。敬語キヤラだし。

諏訪子嬢では思いつきりミスったけど。

「……………まあいいか。私の名前は八坂神奈子^{やさか かなこ}。この神社の表向きな神をやつてる。……………アンタは？」

「橘咲也と申します」

「嘘言え」

「マクシミリアン・テルミドールだ」

「嘘言え」

「私には74通りの名前があるからな……………何と呼べばいいか……………、確か、一番最初に会った時は、そう、イーノツ」

「……………早くしてくれないかい？」

「Promethium Xenon^{プロメチウム キセノン}と申します。職業は異界ジェノサイダーで趣味は天体観測です」

「プロメチウム、キセノン……………。向こう側のヤツか」

恐らく向こう側とは眠れる獅子とか、世界一カオスな国のことなんだろ。……………この時代にアメリカはまだないか。

や、あったか……………？ わかんね。

「……で、その向こう側の神がここに何の用だい？ 奪いに来たか？」

「……え？ 俺って神なの？」

「どうやら俺は神らしい。」

「神だったのか！。」

「というか……、何の用とか言われてもねえ。」

「……実はですね。私はこの地にてある目的を果たしたいのです」
「目的？」

「絶世の美少女を奴隷にしたい」

「なんでアンタは生きてるんだい」

「そりゃあ、絶世の美少女を奴隷にするためでしょう」
「もつと直線的に言ってやろう。死ね」

「神に死ねと言われた。」

「……酷いな、この扱い。」

「……というわけで、絶世の美少女何処に居るか知りませんか？」
「知らないよ……」

「……あのですね。物凄く。物凄く、大事な話をするんですけど、いいですかね」

「……良くない」

「黙れ。……よろしければですけど、しばらくここに泊めてくれな
いでしょうか？ なにぶん、家も何もないものでして」
「嫌だね」

「即答された。」

「まあ、当然か。なにやら神奈子嬢は俺のこと怪しんでるし。
ならば諏訪子嬢に。」

「泊」

「嫌だ」

即答ってレベルじゃねえぞ。

「何故そこまで私を拒否るし……」

「少しだけ泊めておくつもりだったのが、いつの間にか住み着いて、そのまま乗っ取られたりしたら嫌だからね」

「そんなバカバカしい事を私がやると思ったのか！？ 神社！？

信仰！？ そんな物はくだらねえ！ 俺が欲しいのはイキのいい美少女のあられもない姿といやらしい肉体だけだ！！」

「……、あんた本当に神かい？」

「幼女には言われたかあないね。聞いて驚けよ？ 一応コレでも知恵を司つてたりするんだぜ？ あんた等が服着てるのも、家に住めてるのも、全部俺のおかげってワケだ」

「へー」

コイツ信じてねえ。

ちなみに俺がその気になれば超ハイテクノロジーの世界を作れたりもします。ハイ。

まあ、俺が干渉しなくても頭のいい人がいたりすると勝手に技術は進歩してくんだけど。

……ううん。

「……期限をつければ泊めてくれるんですね？」

「まあ、そうだね、はっきりとした期限があるならば」

じゃあ、あれだ。

移動手段を完成させるまで泊めて貰うか……。

まあ、一晚あれば完成するだろ。

「なら、今晚だけでいいので、泊めていただけないでしょうか？」

「……まあ、それなら、別に。諏訪子はどうかい」

「私も構いはしないよ、私には興味ないそうだし」

ああ、そうそう。先ほどビッチに興味は無いと言ったな。あれは嘘だ。

今夜辺りにでも早速……。

なんて事もあり、深夜。

というか、俺は深夜までずっと神社の外で作っていた。

何をといえば、バイクを。

そう、バイクだ。

移動手段はバイク。

神だしバイクぐらい乗ったって別にいいだろう。

「しかし……ううん、中々どうして出来ないものだなあ」

一応には作れたが、まだ何かが足りない。

防音は付けたし、俺の神力を燃料にするようにもしたし。

あ、瞬間加速のバーニアが足りないのか。おーけーおーけー。

俺は手元に『瞬間的に加速する知恵』を呼び出し、バイクにつける。あ、もうこれバイクじゃねえ。

まあいいか、とりあえず今夜は諏訪子嬢を俺は食うのだ。性的に。というわけで、早速バイクに乗り込んで神社へと帰ろうとするが。

「ちいっと。お嬢ちゃん……待ちな」
「げげっ、盗賊!？」

夜中に盗賊。これ常識。

そしてコレに捕まると俺は死ぬまでレイプされる。
いやいや、女にはまだしも、男には嫌だわー。
なので、待たないことにした。

「へっへっへ……」

「Telluriumが発進いたします。前方の方はご注意ください
い……」

「あ？」

直後、俺専用バイク。Tellurium。

最高速度は計り知れない。というより計ってない。

まあ、とりあえずTelluriumのライトをつける。

俺の神力をエネルギーにしている体質上、ライトの色は紫だ。

「な、なんだあっ!？」

そして、この時代にライトなんてものは無い。多分無かった……
ような。

ということ、こんな真夜中に紫色の光を放つなんてのは異常な
事態なワケで。

「私は知恵を支配する神だ。それを知ってもなお……、止めるので
すか？」

「に、逃げるぞおめえら!」

見事に平和的な解決を手にした!

さっすが元現代人の俺！ 平和的解決ならお手の物

俺の言葉を聞いて逃げるのか、紫に光ってるのがおぞましくて逃げるのかは知らないが、とりあえず盗賊達は足早に去っていく。

「よし、……待ってるよ、諏訪子嬢。今から行くからな……ウエヒヒ」

即座にバイクのエンジン（無音）を入れ走り出す。

中々のスピード。

というより、ぶっちゃけよう。

俺は事故が怖くてバイク乗ったことがない。

なので結構適当な作りだ。

スピードは俺の意思だけで操作できるし、ボタン一つでベヒモスの角をバイク前頭部に呼び出せる。

他にもリヴィアタンの牙……まあ、ファンネルなんだが……。とりあえずリヴィアタンの牙を横腹に装備してあったり、いろいろと完全武装なのだ。このバイク。

いや、バイクじゃねえや、もうこれ。

後ろに大型スラスタつけてるし。

あ、ちなみにこのマシン。俺以外には動かせない。

つつか俺以外に乗せる気ねえし！

これは俺のものだ……俺だけのものだ……！

なんて感じな事を考えながら無事神社に到着。

俺は手に『収納するための知恵』を呼び出してTelluriumをしまう。

ちなみにこの収納するための知恵。物凄く便利。

何と物体を数字データ化して保存できるんだ。いったいどんな技術が使われればこんなことができるんだ？

……神の力か。

まあ、何はともあれ帰宅完了。

.....。

さて。

諏訪子嬢の部屋は何処だったかなあ.....？

気持ちのいい朝だ。

俺は隣で顔を赤くして埋まっている諏訪子嬢の肩を抱き寄せながらそんな事を思う。

確かに最初俺たちは険悪な雰囲気だった。

だが、夜の厳しい戦いを乗り越えた先には絆が芽生えたのさ.....。うん、（布団の上の）激戦のあとには絆が芽生える.....。いい言葉だ。

「.....また、来てくれるかい？」

「ううん、時々顔は見せに来ると思いますよ」

「.....少し、寂しいねえ」

いやはや。昨晩は物凄いものだった。

何って色々。

脳内保管で頼む。

俺はこの素晴らしい思い出を汚したくないんだ。

「さて、そろそろ行かないと.....一晩だけの約束でしたからね」

「悪いねえ、大したもてなしも出来ずに.....」

「いいんですよ、何より.....。いい思い出ができた、コレで三日は自家発電ができる」

「.....なんで見た目は完全無欠な美人なのに、中身はこうなんだろうなあ.....」

「言っなよ」

ギャップ萌えという言葉があるが。恐らく俺はギャップ引きだろ
う。

見た目は超真面目っぽい完全無欠な超美人なんだが。
中身がコレだからな。フヒヒwwwサーセンwww。

「……次は何処へ行くんだい？」

「何処にだって行くさ。………そこに少女との卑猥な展開があれ
ばッ!」

「もういい、喋るな。自分が惨めになってくる」

そう呆れ顔で告げる諏訪子嬢。

むむ、このままじゃあ、せつかく芽生えた絆が刈り取られそうな
ので、おとなしく服を着て再び旅に出る準備をする。

……まあ、何も持つてく物ないけど。

なんだかなあ。

とか思いつつ、早速服を着終わった諏訪子嬢と共に玄関へと向か
う。

「ッ!？ 何故あんたがその部屋から出てくるんだい!？」

「へー、神奈子嬢。早速ですが私はもう旅立とうと思います」

「いや、待て。あんた……諏訪子に何を……」

「べつつにー。ねー？」

「ね、ねー？」

もはや目と目で分かりあえる仲となったのだ、俺と諏訪子嬢は。
そんな俺たちの様子を見て神奈子嬢は驚愕と絶望の凶弾を心臓に
打ち込まれて大ダメージを受けている。

そこまでショックを受けずともいいじゃないか。
とか思いつつ、お別れの時間が迫ってきました。

短く太い付き合いだった……。こう、なんというか感傷深いものがあるな……。

「……………別れの言葉とか言ってもいいんですよ？」

「サヨウナラ（棒）」

「いや、もう少し………こう何かないんですか？ 神奈子嬢はまだしも、諏訪子嬢何か言ってくださいよ」

「……まあ、うん。次に来た時はお茶ぐらい出すよ」

そついや結局お茶貰ってないな。

いや。諏訪子嬢のお茶はいただいたけど。

まあ、どんなにただき方をしたかは脳内保管で頼む。
さもないと管理者の意思にて消される。

こんな感じに俺は奇妙な口リ神と成熟した神、つま

り諏訪子嬢と神奈子嬢に出会った。

ちなみに後で俺はこの二人に役三千六万回土下座することになるのだが、それはまた別の話……。

一晚。それだけで十分だ（後書き）

ちなみに今の予定だと。

古代編（終了） 昔編^{いまここ} この後（未定）の順でどんどんキチガイ文

章になってきます。

もうどうにでもなれと。そんな感じの作品

オレっ娘はリアルでは気色悪いのに、二次元ではなんでこんなにも可愛いんだろ

タイトルの症候、群に掛かった、気がする

かゆい

うま

オレっ娘はリアルでは気色悪いのに、二次元ではなんでこんなにも可愛いんだろ

今更ながら思った。

俺の存在。

時代背景ぶち壊しだわ。マジでアザゼル。

……。

その結果がコレだ。

俺に群がる男、そして女、そして子供、そして老人ッ！

いや、別に俺が村人全員相手にしているとかそういう無茶苦茶なシチュじゃない。

そして訂正すれば俺に群がっているのではなく……。

俺が先ほど乗っていた物。Teeriumだ。

迂闊に村を通過しようとしたらこれだよ！

「あのー、すみませーん。もうそろそろいいでしょうかー？ 日も暮れてきましたし……」

「こりゃあ、いったいどうやって動いてるんだい？」

俺のことなぞ関係なし。初老の男が俺に聞いてきた。

こっちの話を聞く気が無いのか。こいつ等は。

しかし、どうしたものか。

……仕方が無い。奥の手だ。

「それは人間には動かせませんよ」

「なっ……じゃあ、まさか。あんたっ……」

「おっと、私は妖怪ではありません。一応には神です」

「……は？」

お前は何を言っているんだ？ といった表情を露骨に表す初老の

男性。

畜生。なんで諏訪子嬢みたいな少女ですら神と認められるのに俺はダメなんだッ！

……証拠か！？ 証拠を見せりやいいのか！？

「どうやら信じておられないようですね……。いいでしょう。私が神たる証拠をお見せしましょう！」

俺は即座に懷から携帯（自家製）を取り出し、特定のコードを打ち込む。

直後。俺の右後ろに俺の背の丈の2.5倍ほどあるパワードスーツが呼び出される。

コレは洗浄後、旅に出るまで暇だったので作ってみたモノで……。

……これが証拠になるのか？ なるだろ。シャダイだってラピュタ出して神の力……！ とか言ってたし。

ちなみに火力は物凄い。右腕にはジズの巨砲。左腕にはリヴィータンの尾という名のエネルギーライフルを装着してる。

しかも両肩にはリヴィータンの頬角という名のエネルギーブレイドを装着している。

神は本当にエネルギー兵器がお好きなようで。

「な、なんじゃこりゃあ……」

「私の試作品一号である、Titaniumです……。私は知恵を支配する神。よってこのような物を作り上げることが可能なのです。他の神々よりも物質的で信じやすいでしょう」

む、信仰を集めるといふのはこういう事か……。

人を騙し。貶める！ それが神の仕事か！

興味ないね。

興味ないね（キリッ）。

「さて、私の正体も理解していただけたところで……。そろそろ Terminal を返していただけませんかね？」

「ああ、すまないな。止めてしまつて……。それよりあんたさんは、どっかに神社を構えたりしないのかな？」

初老の男が心底不思議そうに聞いてくる。

……。あ。

そついやそつだな……。

普通神つて神社構えるよな……。

……。でもなあ。

一ヶ所に留まるの嫌だし、留まらなくても信仰集まるし……。そつだ、それを理由にしよう。

「私は知恵を支配する神。よつて、私はあなたが日々、知恵を振り絞つて生活しようとするだけで信仰されるのですよ。なので、神社を構える必要はありません」

「じゃ、じゃあ。あんたさまは俺たちにソコにあるやつみたいなのを恵んでくれるのかい！？」

「いいえ、それはできません……。葛藤のない進化は破滅しか生みません……。ただ、時間と共にゆつくりと。ゆつくりと、あなた達は知恵を身につけるでしょう。明日を生きる渴望を忘れなければ……」

「なら、せめてこれを受け取つてくれ。少ないとは思つが……」

初老の男はそう言いながら袋を差し出してくる。恐らくは金だろ
う。

受け取れねえ……。結局無駄遣いをしそつだから受け取れねえ！

「う、受け取れません！ 受け取れるわけないじゃないですか！」

「どうか！ そこを一つ！」

何故俺は金を受け取ってくれるように頼まれているのだろうか。
しかしまあ。断りきれないだろうし……貰うか……。
バカみたいな使い方しないように違う袋に入れとこう……。

「う……。ありがとうございます」

あれ。おかしいぞ。

昨日まで軽いと思っていたお金が無茶苦茶重いや。

……。

さて、行くか。

「ということで、Teeriumを返していただけないでしょうか？」

「お、おお……悪いな、おい。お前等そろそろ」

やっと進め。

「そ、村長！ 村長！ 村長！ 西の方から妖怪の大群があ！」

なさそうだ……。

「な、何だと！ くそ、いったいどうしたら……」

そして何と目の前の初老の男は村長だったらしい。
驚愕の真実ッ！

……というほどでも無いけどな。

しかし、妖怪か……。一目見て見たいし、流石にこの村の人達を
見て見ぬフリはできないし……。やるか。

「私にお任せください！ 人間の持つ無限の可能性、知恵の力。それを支配する私の力をお見せしましょう！」

「「「お、おおおおおおお！」「」「」

一気に盛り上がる村民一同。

まあ、妖怪程度……、このTitaniumで焼き払ってくれるわ！！

そう決心した俺は早速Titaniumに乗り込み、起動させる。

「「「おおおおおおお！」「」「」

起動したTitaniumに更に盛り上がる一同。

地味に俺も興奮を覚えた。

まさかりアルにパワードスーツを動かせる日が来るなんて！
ちなみにこつちも神力を燃料にして動いている。そして、脳で考えるだけで操作が可能。

素晴らしい……。

「こ、こつちです！」

若い村人に指示されるがままに村の西の門へと向かう。

そして、西門へと向かう俺に対し、村人の大きな歓声が発せられる。

なんだ、この英雄的な扱いは。

まだ英雄にはなっていないぞ。

「進め進め進め！ 今夜は宴だ！ 好きなだけ喰いやがれ野郎ども

「!!」

見事な意気込みと共に突っ込んでくる妖怪たち。

……。

えーっと。

俺は妖怪とかそういうオカルト分野は全くダメなんだが。あ、怖いとかじゃなくて。知らないって意味な。

妖怪つてのは、あの。一本足と目がある傘とか、デモンズ・ウォール動く壁とか……だよな？

それに対し、今目の前にいる妖怪は。

見事な美少女の集団だ。

「行け！ 行け！ 行け!!」

何やらセーラー服調の衣服を身にとって突っ込んでくる少女集団。

……あれ？

妖怪つて、こんなんだっけ。

……どうせならジズやらベヒモスやらリヴィアタンやらも少女にしてほしかった……。

いや、そしたら倒せないか。

「アレが妖怪……だと……!!?」

「そうです！ ひいおっかねえ!!」

何か、バカにされてる気分だ。
全然怖くない。むしろ可愛い。

「は、はやく退治してくださいえ!!」

隣の村人が急かして来る。

いや、確かにあつちが此方を探知する前に一斉掃射を行って消し炭にすることもできる……が。

なんだろう。

攻撃できない。

「で、出来ない……」

「んなあつ!？」

「お、俺に少女を撃つ事はできねえええええ!!」

思わず右手のジズの巨砲を投げ捨てる。

「撃てないんだよ! 撃てねえよ!! 撃てるかアツ!! あんなにもツ! あんなにも生きる事を望んだ、生きる事を渴望している少女達を撃てるかアアアツ!!!!」

「た、たしかにやあ、見た目はあんなんですが、中身は人間の肉を食い千切り、腸を貪り、血をすするバケモノですぜ!？」

「アンタ等はロマンを分かっているじゃない!! あんなにも可愛い子達にグチャグチャに掻き回されて喰われて死ぬなら本望じゃないかあああッッ!!」

「アンタは現実を分かっているじゃない! じゃあ、別に退治しなくてもいいから、この村への進行を防いでくださいえ!!」

「よし、それならオーケーだ。はあはあ、可愛いよ妖怪……!!」

「アンタ本当に神か!？」

「神だよ! 俺は神だ! いや、むしろ私だけが神だ!!」

口調を若干直しつつも、目の前の少女集団をどうするかを考える。まあ、とりあえず威嚇射撃で動きを止めるか。

そう決めた俺は空へとリヴィアタンの尾を放つ。

そうして放たれた光線は遙か上空の人工衛星を破壊した……。な

なんていうことも別になく。

「ひいつ！？ な、何だあれは……？」

「大変申し訳ないがア！ こっから先は立ち入り禁止領域なんだわア！」

リヴィアタンの尾を次は少女集団へと向けると、少女集団はようやく俺に気付いたようで、険しい視線を此方へと向けてくる。

ああ、ゴメンよゴメンよ。本当は俺だってこんなことはしたくないんだ！

「何だお前はア！」

村を襲おうとする美少女集団のリーダーらしき少女が、一歩前にでながらそんな事を言う。

誰だと聞かれてもなア！。

神か？ 俺は……神でいいのか？

いや、何かイメージ違うな……。

「通りすがりの変態フードだ！」

礼によつて礼の如くの礼の挨拶。

もうこれで通そうかな。

「……」

「……」

「……」

「……テヘッ」

空気が凍り付いたので、とりあえず拳を握って頭に軽く当て、下

をペロツと出してみる。

いわゆるテヘペロ。

「……………なんなんだ、コイツは……………」

まるで葬式場にアロハシャツで出てきた変態を見るかのような目で此方を見てくるリーダー格の少女。

だから変態フードだって。

……………うんまあ、怪しく思うには俺に問題があるからだ。

問題点は二つ。まず一つは俺がTitaniumに乗り込んでいること。二つ目は俺の外見が美しすぎるのに対し、俺の中身は吐き気を催す邪悪に染まっていることだ。

「もう私についてはどうでもいいから取り合えず今夜この村を襲うのはナシですナシ。もしも襲いでもしたら私があなた達を襲います。性的に」

「いや、本当に何だお前」

「だから、私についてはいいですから……………さつさとこの村から手を引いてください。お互い痛いのは嫌でしょう?」

「ハん、ここは格好のエサ場なんだよ。詳しい理由もナシに引けるかッ!」

リーダー格の少女は何処からか巨大な断ち切りバサミを取り出して、戦闘態勢を取る。

げえ、シザーマン。いや、シザーウーマン。

それに先ほどから発せられてる妖気はそこ等のザコ妖怪とはKA KUが違う。

「しかし、妙なカラクリを作ったもんだな、河童共の入れ知恵か?」

うん？ 河童？

いくら妖怪オンチな俺でも河童ぐらいは知っている。

背中に六の翼を持ち、全身には岩より硬い鱗を持ち、四本もある腕はどれも強靱で、鉄の塊を握りつぶすと言われている……。

って、幼馴染が言ってた。

そんな河童がハイテク妖怪だったとは。驚いた。

「ツタクよ、何が盟友だ。あの人気取り共め……、人間なんざ結局はただのエサだつつうのに」

なんか愚痴りはじめてしまった。

……うん。どうやら日本の妖怪社会はこの時代からストレス社会だったようだ。

「ああ、思い出したらまたハラが立ってきた！ それとついでに腹が減ってきた！ ガア！ もう喰わせろ！」

口でも言ってる通りにがあー！ と頭をクシャクシャにかき回すリーダー格の妖怪少女。略して妖女。……幼女じゃあない。

可愛いなコイツ。

「……いやあ、性的に食うってなら別に構わないんですけどねえ」
「だからハラが減ってんだつつうの！！ 男には困ってねえ！」

ワオ、大胆発言。

コレで初心な処女だったりすると萌えるな。肉食系のDS少女でも萌えるが。

「つーわけで、さっさと黙ってソコを退け！ オレたち空腹の限

界なんだよ!」

そんなイキのいい威勢と共に巨大な断ち切りバサミの先端を此方へと向けてくる。

そして、その動きに合わせる様にリーダー格の少女の背後に続く数多の少女達も断ち切りバサミを取り出して、天へと突き刺す。

……。

この人数を全員同時に相手するのは難しいな……。

相手を殺すなりなんなりできるならまだいいが、今回の相手は殴ることはおろか、転ばせることすらできない。

あの美しい肌でも付いたら俺は一生罪悪感に悩まされてしまう。しかたない。全力を尽くして全力で奴等全員の士気を無くしてやる。

そう俺は心に決め、Titaniumから降りる。

「……あ? そのミョーな力ラクリは使わねーのかよ?」

「……私ならば、あなた達など生身で十二分! ハンデをあげたいくらいですよ」

「ハあ? ただのバカか、キチガイか……。人間たかが一人で何が出来るってんだ? なあ! お前等!」

リーダー格の少女は後ろを振り向いてそんな事を言うが、誰一人として返事はしない。

……どうやら、リーダー格の少女以外は無口な種族のようだ。

というか。本当に同じ種族なんだろうか。

リーダー格の少女は深海のような深い青色をした長い髪。それに対しそれ以外の少女は、多少は違うといえど赤茶色の短めの髪型で統一されている。

手に持ったバサミの形状も若干違って、リーダー格の少女の持つ断ち切りバサミは刃が長く、先が尖っており、他の少女の持つ断ち

切りバサミは刃が短く、先が丸まっている。

……リーダー格だから違うのか。それとも違うからリーダー格なのか。はたまた似ているだけで別の種族なのだろうか……。

個人的な意見を言わせて貰えばリーダー格の少女は外来種のロブスター。他の少女は二ホンザリガニと言ったところか。

ちなみに青いから生まれる確立は五百万分の一だな。

「……ホント、お前等喋らねえな」

「あなたが嫌われてるのでは？」

「がぁ、うつせえ！」

またもや口で言っている通りにがぁー！ と断ち切りバサミを此方へと向けてくるリーダー格の少女。

可愛いなぁ、コイツ。何とかして旅の道連れにしたいZE……。

「兎にも角にも、まずはオマエから食う！ 決定事項だ！」

そう言い放ったかと思うと、その体の何処にそんな力があるのか、物凄い跳躍力で肉薄してきた。

なるほど。俺を食うか。それもいいだろう、だがしかし。

訂正点が一つだけある……。

それは。

「ふん、止まって見えるぞ、貴様？」

事前から備えていた俺は振り下ろされる断ち切りバサミを左に回避し、そのままリーダー格の少女の背後へと周り、思いっきり抱き寄せる。

先ほど言った訂正点、それは。

食うのは俺だってことさ！

「なあっ！？ コイツっ…………」

「もう離さんぞ。くへっ」

「…………ッ…………、殺すのか？ ならさっさと殺せ、この体勢は地味に嫌だ」

ちなみに『この体勢』というのを詳しく説明すると。

俺が左腕で少女の適度に大きい胸を下から押し上げ、右腕は腰に回して互いの腰を密着させてる形だ。

…………この少女、勘違いしている。この体勢でどうやって殺すというのか…………。

「殺す…………？ No…………俺は絶対にお前みたいな可愛い少女に手は出さない」

「か、かわっ！？」

どうやら初心な処女っばいぞ！ やったねたえちゃん！ おいやめろばか。

というか、関係ないのだが。やったねたえちゃん！ のパロディでやったねマミちゃん！ というのを見たが。

アレでは人形が干切られてるのに対し、やったねマミちゃん！ では自身の首がもげたな。

…………ところで、目の前で心のより所であつた人形を否定された拳句に干切られて、そのあと叔父の肉奴隷となつたたえちゃん。

人々はこの叔父を激しく嫌悪し、嫌うかもしれない。だが、俺は好きだ。憧れる。

最低と言われるかもしれないが、俺だつたら叔父と同じ行動をするだろう。

…………といっても、自分の目の前に現れたら逃げるが…………。

まあ、結局何が言いたかったかといえますとね。

「な、んだよつ、殺さねえなら離せ！」

「I Y A D A！ さつき言つたように俺はお前を傷つけられん。だが、この村人からこの村を守ってくれと言われている。だが、お前は会話による平和的解決手段を拒んだ。なので」

「ま、まさかお前……！」

「性的暴力で退治したいと思います」

「ちよつ！？ おま、やめろバカ！ 離せ！ 今すぐ離せえ！」

「暴れんじゃねえ！ いいか！？ 俺はな、こうやってる間も心が痛んで痛んで仕方が無いんだ！ 本当はお前と仲良くイチャつきたいさ！ だけどな！？ お前がそれを拒否するってんなら無理矢理に愛でるしかねええだろおおおがよおおお……！」

「く、狂つてる！」

「なんとでも言う方がいいさ！ クズと言われようが最低と言われようが……！ 俺はッ！ 絶対にッ！ 信念をッ！ 曲げないッ……！」

「いいでしょうかア！？ 村人の皆様ア！ 妖怪とはこうやって渡りあうことで仲良く接することが出来ます！ 是非覚えといてください！ 妖怪は愛でればいいのです！ 愛でるものです！ いいや、妖怪だけじゃない！ 少女は全て愛でるものです！ 例え相手が嫌がるうと愛でるのです！ そして、自分以外の愛でる人間を見つけたらその愛でる人間を排除してでも愛でるのです！ 過剰に！ 行き過ぎるほどに！ 心さえ壊すほど愛でるんだアアアアア……！」

「それは愛でるって呼ばねえっ、つつの……！」

思わず演説するように身振りをしてしまった俺の腕からリーダー格の少女は抜け出し、即座に俺の腹部へと断ち切りバサミの先端を突き刺してきた。

「……な、んじゃこりゃアアアアッ……」

不死の身とはいえ、痛覚は正常に稼働している。

よって、言いようのない痛みに襲われて思わずその場に倒れこむ。

「ハん、最初は生真面目な奴かと思ったが、まさか、外見にここまでする性格の持ち主だとは思わなかったぜ……。……と、さて、邪魔も消えたことだし、ようやく夕食の時間だ……。！」

リーダー格の少女が俺から目を離し、村人へと向き直る　　今だッ！

俺は即座にリーダー格の少女の両足を掴み、自分の方へ引き寄せ
る。

「まあ、女子供は殺さないで　　うあッ!？」

当然俺なんぞ死んだものだと思ってた少女は反応などできるはず
もなく、その場にべたっ、と倒れる。

「なあっ、お前……生きて……。!!」

「たかが腹を刺されたぐらいで俺の少女を愛でる気持ちは殺せん！
！……ああ、それともう一つ。いただきまアす！」

直後、俺は身を更に取り出して貪り付く。何処にとは言わんが。

「ひいあッ!？　や、めろっ！　もうしません！　村を襲いません
から、本当にいつ！」

「今だから言えるが、本来だったらなあ！　妖怪なぞ焼き殺してや
るわクエヒヒヒヒとか思ってたのに予想外にもお前等がとてつも
なく可愛いからこうなってるんだよ!!」

「オ、レは、悪くねえっ！」

オレっ娘！？

実在したのか！

っていうか。こいつ等力オスだなあ……。

オレっ娘をリーダーにした無口少女集団。

どうやって連携とってるんすか。

というより、このオレっ娘。普通に可愛い。

威勢を張りつつも涙目になって謝る顔とか、もうね。

あああああ あ あ あ あ 堪んねえよおおおおお
！！

もう、もうねエ！

諏訪子嬢の反応も良かった！ 確かに良かったよ！ 慣れつつも
恥ずかしがる姿とか！ その見た目に反したビッチぶりのギャッ
プとか凄よかったよ！！

でもな！ 俺はこういう反応が見たかったんだ！！

こういう背徳感を掻き立てられる犯罪染みた反応が！！

もう、俺は止まらない。

そう決心した俺は無我夢中で貪り付く。や、何処にとは言わんが！

「……ッ！ いい加減に死ねっ！」

「海老反り！？」

グザリ、と背中中に刺さる断ち切りバサミ。

なんとも体の柔らかいことで、リーダー格の少女は見事な海老反
りで俺へと反撃してきた。

背中を刺される痛み。背骨を断ち切られる痛み。

まさか体験することができるとは。

「……………俺、は。いや、私は不死身です。何度刺されても…………っ」

「はあっ、はあ、はあ。は……頼むから、もう……村襲わないから、やめてくれ……」

「ぐっ……、そう本当に思っているのなら私を今日、あなたの住みかに泊めなさい……、背骨を斬られちゃ、そう早くは蘇生しないのです……」

「……分かった。ただし、寝てるときに本当に襲うなよ？ 絶対に襲うなよ……！」

「オソイマセンオソイマセン」

「本当か？」

「神、ウソツカナイ。コレホント」

「怪しいな……、まあいい、そんなときはそんときで上半身と下半身を真っ二つにしてやる……」

フレノンダされるのか。俺は。

なんて事を思ったこの日。

これが、後々長い付き合いとなる少女との出会いだったという設定だったらいいのに。

オレっ娘はリアルでは気色悪いのに、二次元ではなんでこんなにも可愛いんだろ
まーた原作キャラがでてきねえよ、死ねよ私。マジで死ねばいいの
に。
だが、次の話からはほぼ毎話原作キャラが出るようになるよ！
やったねたえちゃん！

次回予告！

『今年のバレンタインは中止する！』
そんな言葉を発したのは超極悪犯罪者集団『アルカイダ』のリーダ
ーだった！
日本中のリア充はその言葉に嘆き、悲しみ。ボツチ共は狂乱の歓声
を上げた！
狂っていく日本！^{ひもと}しかし、そんなアルカイダを止める為に闘^{とつきょうだい}狂大学の
のエリート生が立ち上がった！

次回、

『ビキニは目線が上下に分かれますけどワンピースは身体のライン
が出ますから細い方しか似合わないんですよ』

マグロ、撮影開始！ ご期待ください！

次回とは関係ないと思うかもしれないけどやっぱり関係ないかと
言えば関係あるかもしれないし。全体的に言っと零を乗算する感じ
でせう。

気付かなかった(前書き)

やっとこさ、原作キャラを出しはじめることが出来た……。

気付かなかった

はてさて、コレは楽園か？

楽園だろう。

楽園だアツツ！！

「う、ウオオオオオ！！」

目の前に広がる光景！

それはツ！！

数多の美少女がその美しい肉体を隠すことなく晒し、日光浴している光景っ。

どの少女も何かレイプ目というか、ぼーっとしてるといっか。心ここにあらず見たいな目で空中を見ている。

……彼女等は生きてるのか？ そもそも妖怪とは生きてるとか表現していいものなのか……？

「……マジで一晩で再生しやがった。恐ろしい奴だな、オマエは」

背後から聞こえる声。

それは昨日野外で俺が貪り尽くした少女『あみぎのめきい網霧玲』の声だ。

彼女は深海のように青い長髪に、勝気な彼女の性格を現すようなツリ目。そして、低めの身長には不釣り合いな豊かな胸。

完璧なるロリ巨乳である。

ああ、やべえ。濡れてきた。何処がと言わんが。

勃つよりは分かりにくいからいいね！

……で、昨晚はこの少女と会話しまくったのだが、その時の一部始終をお聞かせしよう……。

……。おや、ノーブラ＆ノーパンとは。この変態め』

『しかた、ないだろお……。ないんだからあ……』

『いやいや、ノーパンスカートとは……。中々に恐れ入りましたよ……。んじゃ、次はコチラの方を……。あむ』

『あううつ！？ や、やめ……。こんなの、知らなっ……。！』

『（いいねエ。俺が望んでたのはこういう反応さ……。ッ！ 堪らん！ くら！）』

『ひ、や。そんつな、吸っちゃ……。！！ うあっ！ だ、や、やめ。ろ、うつつ、くあうつ！ や、めろ……。んいつ！！』

『（やめろやめろと言いつつも息を荒げ、可愛い声を出す玲嬢可愛いなあ。それに、段々体もビクビクさせてきて……。しかしまあ、やめろというならやめてやるか）』

『くんやつ！！ あ、うあ、あ、あう。あ、……。ふあ、や。ん……。だ、っ！ それ以上、だめ、っ！ んんんうつ！！』

『分かりましたよ。襲わないという約束でしたしね。ここでやめときましょう』

『ふえっ……。？ ……あ、……。えと……』

『さーで、寝るかなー。玲嬢のバストサイズ大体わかったし』

『あ、あの……。その……』

『ああ、玲嬢。すみませんね、好き勝手やってしまつて。まあ、明日の朝にはお別れですし、もう二度と会うこともないでしょう』

『……………て』

『ん？』

『……。あの、その。っ、づき……。して……。？』

『え？ いいんですか？ （計画通り……。！！ 見たか！？ 見たかしー！！ 僕の勝ちだー！！）』

『お、ねがい……。しま、す……。』

『仕方ないですねえ、んじゃ。今度はこっち試してみましようか……。』

『や、そこ……。そんなに見ちゃ……。』

『あーあー、こんなにもビショビショにして……。では、いただきます』

つとお、この先は製品版でどうぞ。あるいは脳内保管で。

……まあ、ヒントを一つやろう。

神力とは便利な物で、男ロンギヌスの槍ですら作れるとは……。
楽しませてもらったよ。

「……くへへ」

「なに笑ってんだよ、気味悪い」

「いやいや、玲嬢可愛いなあ、と思ひまして。まさか、最後は自分から……」

「ツツツツッ！！こ、殺すからな！それ以上言いやがったら！

」

「はいはい」

「……本当にわかってんのか？」

「まあ、分かっても分かってなくても、今日でお別れですからね」

「……………」

「一晩だけでしたけど。楽しかったですよデユフフフ」

「ふ、ふんっ。こちらオマエの顔見ないで済むと思うと清々するねっ！」

涙目になりつつもそんな事を言う玲嬢。

くへへ、強がりやがって……。

ちなみにこの玲嬢や、その他全裸日光浴している種族……。アミキリという妖怪らしい。

なかでも、玲嬢は強い力を持っている他、他の奴にはないはつきりとした意思を持っているだとか。

なんでもアミキリは本来あまり自我のない種族で、水中をゆらゆらと泳いでは偶然見つけた船の上の漁師を食ったり、そこ等の魚く

ったり、縄張りに入り込んだ人間を食ったりしているらしい。

が、玲嬢は見ての通り自我があるので、昨日のように村を襲ったりなどアミキリの中じゃ随分アグレッシブルな行動をしている。

……で、昨日の熱い語りで発見したことなのだが、どうにも玲嬢はあまりこの場に留まっていたくないらしい。

理由としては一つ目に自分以外がアレなこと。そして二つ目は自分は強力な力を持つてる分、エサも多く必要なようで、アグレッシブルに人間を襲わなくては生きていけない……。よって、仲間を危険に晒すことが多い……ということ。

ちなみに昨日引き連れていた奴等は一人で村を襲おうと思ってたら付いて来ただとか。ピクミンか。

……さて、ところで。

確実に今、玲嬢は強がっている。

実は俺に付いて来たくて付いて来たくて仕方がない。

ちなみにこれは自惚れとかじゃなく、昨日の夜に自分から言ってきたことだ。思わず胸がキュンキュンした。

だが、やはり強がっているらしく。どうにも俺とは来たくないようだ……。

俺としては無理矢理にでも連れて行きたいのだがね……。

……ということ、秘策を使う。

「……ところで玲嬢 スリーサイズの意味は？」

「ああ、確か……バスト、ウェスト、ヒップの三つのサイズ……って何言わせんだ！ 殺すぞー！」

「……ふうむ。おかしいなあ、いや。私の勘違いなら構わないのですがね。……玲嬢、この時代によくそんな言葉の意味知ってますね？」

「ッ！？ な、に、言っただ……？」

「他にもノーブラ＆ノーパンの意味知ってましたし、随分と外の言葉に詳しいようですが、アメリカにでも住んでたんですか？」

「ま、まあ、そんなところだ」

「残念。この時代にはアメリカは存在しません」

「ツツツ……！」

「……さて、自分と同じ境遇の人間がいらないとは思ってませんでしたが……。まさか、こんなに早く出会えるとは」

「……え？」

「まあ、この続きが聞きたいなら後ろにどうぞ」

そう言つて私は Teellrium の後部座席をポンポンと叩く。
それを見て、玲嬢は戸惑つたような顔をする。

「さて。あなたの前には今、二つの選択があります。一つは過去を忘れ、一生この地で暮らすか。一つは同じ境遇を持つ私と共にこの世界を楽しむ旅を始めるか……。どちらかを選べます」

「……っ！ さっさと連れてけ！」

何かを振り切つたようにドガツ、と座る玲嬢。

よっしゃ。これから毎晩楽しめそうだ。

などと思いつつ、Teellrium を発進させる。

さて、この出会いにより、俺のしばらくの目的が確定した。
世界を回つて、俺たちと同じ境遇の転生者を探す。
それが、しばらくの俺の目的。

とか格好いいこと言ってみたけど。結局は美少女あつめるだけです。ひやは。

「さてさてえ。野宿ですよお」

「なんだ、その若本風の言い方は……」

分かってくれた。嬉しい。

ちなみに今日のキャンプ場所は森の中！　まあ、下手に村とか寄って騒がれても厄介だし、そこ等の妖怪程度にはやられない私だからこそその選択。

……くへっ、しかしまあ、ホイホイついてきやがって、こん中じや誰も助けにこないだろうよ……。

今日は意識飛ぶまでやり続けてやりましょうかぬ。

ちなみに、ここまで来る途中。ちゃんと説明はしといたし、詳しい説明も受けた。

何やら玲嬢も性転換の犠牲者らしい。いや、オレっ娘の時点で予想はできてたがね。

んで、次に『神』や『神の使い』との接触がなかったそうだと海で溺れて、次に気付いたらあの状況になっていたとか。

ちなみにコチラにきて三年程度。

それと、東方については玲嬢も全く知らなかった。というのも……以前はワリと道を外れてたらしい。

はてさて、恐らく『死んで、コチラに来る』という点は共通しているが。

俺は仲介人として神がいたし、チートなステータスも割り振られた。

だが、玲嬢は仲介人無しの、若干強い程度。なんなんだかねえ。

まあ、この様子だと……、何人か死んだ奴もいるだろうなあ。全員が全員チート能力を割り振られてるみたいじゃあないし。……まあいいか、取り合えず神の使いに連絡を取ってみよう。

「……お、それ。携帯か？」

「ん、一応にはそうですね」

「……使ってる奴いないだろ……」

「神の使いが一応使ってるからな」

「……………神とは何だったんだかなア」

それは俺も思った。

などと言いつつ、神の使いへと連絡する。

『やあ、久しぶりだね…………』

「こんばんわ変態」

『君から私へ連絡…………。さては、彼女と出会ったのかな』

「…………彼女、玲嬢のことか。玲嬢はいつたい何だ？ 結構俺と違って粗末な扱いだったみたいだが…………」

『彼女は私が用意した、君の「友達」だよ。気に入ってくれたか？ 海に流れていてこれは使えると思ってね、そちらに移動させたんだよ』

「うん、とつてもオオオオオ！！ だがな。お前は人をなんだと思ってるんだ…………」

『ハッハハハ、それはよかった、それじゃ。何かあったらまた連絡してくれ。それと、どっちにしる無くなっていた命だ。それなら利用したほうがいいだろう？』

少しか神の使いを見直した。

しかし、その人間の命をまともに見ないその考え…………！！ 人格が悪魔に支配されている！

「…………何か言ってたか？」

不安を隠すためか、お茶をすする玲嬢。

なんか、こういう人みるとお茶吹かせたくなる。

「よろセックスって言ってた」

「っこぶっ！！ げほ、こほっ！ は、ハあ！？ マジで神の使い

って変態なのか!？」

「まあ、そうだなあ。俺が飛行中なのに指入れて搔き混ぜてきたりしたなあ」

「っふえ!？」……確か、オマエ。神の使いと関わりあってたころは幼女だったんだよな？」

「そうそう。キツい中に指を二本も突っ込んできたんだ、アイツ。しかもこの体になってからは寝てる間に胸と口を」

「わーわー!! やめろお!! 聞きたくない!!」

……ハハハ。

今夜お前にやるんだけどな。

とか俺が邪悪なる思考に頭を支配されていると

「むッ!!」

「ん? どうした?」

「北北南西から幼女の助けを求める声がッ!!」

「北と南どっちだよ!？」

「北と南で打ち消しあつて、北西が残る」

「……そういう見方は無いと思うぜ……」

「うつせえ、孕ませるぞ」

「……え? あれつて、孕むの?」

「まあ、ただの神力の集まりだから孕みはしないけど、感触や味、その他諸々は全て似せといた。……で、どうだったよ、中に出された感触は……」

「黙れッ! 熱いだけだ!」

「気持ち良かった?」

「気持ち悪かった!」

「ああ、そうですね。……俺は気持ち良かった」

「オレはサ・イ・ア・クだったね!」

かーわーいーいー。

このアミキリかーわーいーいー。

「ま、とりあえず行つて来る。……いない間に慰めたりとかしない
でくださいね？」

「するかッー！」

チツ。

「言ってくれば私が舐めてあげますから」

「さっさと行け！ 変態ー！」

「んじゃ、したくなくても帰ってくるまで我慢してなかったらお仕
置きですからね」

「いいから行けよー！」

なんだイ、こっちがやってやろうと思ってるのに。

まあ、そう思いつつも俺はTeelriumにまたがり、悲鳴が
聞こえたような気がする場所へと向かうのだった。

ちなみに蛇足だが、玲嬢のお茶には媚薬混ぜといた。冗談だ。媚
薬なんてもんはこの世に存在しねえ。

ツたく、あんだよ、アイツは。

村を襲いに行ったら急に現れて、腹に傷を負いながらも、私の足
の間に顔を埋め……その……うう。

……他にも、夜襲わないうって約束で同じテントに寝かせてやった
のに、急に抱き上げてきて、急にうなじを責めて来るわ、む、むね
に、吸い付いてくるわ……。初めてなのにディープだったし……。
他にも、舌、入れてきたし……。

さ、最後なんて。抜いた後、舐めつ…………~~~~つ!!
か、考えてたら。なんか体が熱く…………。

…………。
だ、大丈夫、だよ、な…………。
あいつ、まだ帰ってこない…………。よな？

Tellriumに乗り込んで僅か数分。
見つけちゃったのだ。

見つけちゃったよ、ウエヒヒヒヒヒ。

……時折思うが、俺の笑い声って気持ち悪いよなあ…………。まあ、
変える気はないんだがね。

「や、は、離せっ！ 触るなっ！」

「おやおや、威勢のいいことだなア」

俺が目の当たりにした光景。

それは幼女。いや、妖女とも呼べるだろう。…………つまるところ妖
怪の少女が盗賊に捕まってる光景だった。

ロリコンって怖い。

しかしっ！ あの幼女、かなりレベルが高いッ！！

黒猫のように跳ねたクセの強いショート黒髪。血の様に赤い瞳、
そして幼いものの、何処か自信のある顔。

それが今ッ！！

服を破かれ、涙目で羞恥に顔を赤く染めていらくあwせdrfr
gyふじこ1p。

俺は即座に『声を広範囲に伝えるための知恵』…………つまり拡声機
を手元に呼び出す。

これを使おう。さあ、使おう。

そのロリコオオオオン！！ それ以上するってならア！！
コイツをくらいなア！！

下種な笑いを浮かべながら俺の獲物に手を伸ばすロリコン共をT
ellriumで轢き飛ばす。

チヨロイね！

拡声器を使った意味は特に無い。気分。

「大丈夫ですか？ 少女YO」
「触るなあっ！」

何やら、力を隠蔽しているお陰で私を人間と勘違いしているらしく、伸ばした手をはね退けられた。……人間不信に陥っているようだ。

仕方が無いので手元に『身を隠すための知恵』という想像で大きな毛布を呼び出し、頭から被せてやる。

「……え？」

「私はあなたの味方ですよ。うん、そうそう、私あなたの味方。飴玉とかいろいろあげるから一緒に来よう？ ね？」

「ヤダ」

「何故ッ!？」

「だって、アンタ。変態クサイ」

幼女に変態と言われた。

……こつ、心に刺さる物があるなあ。

諏訪子嬢みたいな幼女に言われても傷一つつかない俺のハートだが、この幼女の声には軽く打ち砕かれた。
何故だろうか……。

「そんなことないですよ。私は至って純粋な人間です！」

「人間じゃないじゃん」

「あ、分かります？ やっぱ漏れてるんですかね、覇気とかが……」
「いや、服装おかしいから」

……カッコイイって言ってもいいんだヨ？

ちなみに今の所この服装は一度も褒められたことがない。

むうん、格好いいのにナア。

特に下半身のスカート部の正面に入ったX字の装飾とかカッコイイ。

「……ハア、まあ。とりあえずココに居たらまたさつき見たいな輩に絡まれるかもしれませんよ、取り合えずは一緒に来なさいな」

「……………うん」

かなり。

かーなーリイヤそうに頷く幼女。

そんなにイヤか！？

しかしまあ、恐らくは俺の得体が知れないのが怖いんだろう。

きつと妖怪つばさ丸出しの玲嬢見れば少しは安心するかもしれない。
い。

ちなみに玲嬢はああ見えて子供好き。

俺のような好きじゃなくて、純粋な好き。

Tellriumを押しながらキャンプ地に戻ってきて俺はあまりにもテンプレすぎる展開に驚いた。

「…………いや、むしろこれは狙ってるのか？ 狙ってるんだな？
誘いか。……ビッチ化が始まっている。……修正が必要だ」
「…………？」

Tellriumから頭を出して広がる光景を見ようとする少女
の頭を押さえつける。

「あなたにはまだ早いです」
「…………むう」

地味にふくれっ面の少女。可愛い。

…………なんだ、この気持ちは。
恋か？ いや違う…………。

可愛いの種類も他の可愛いとは違う。限りなく純粹に近い可愛い
…………。

これは、まさか…………。

「これが、母性…………ッ!？」
「……………うわ」

少女がかなり不審な目でコチラを見てきた。やめろ、そんな目で
俺を見るな！

普段だったら喜ぶが、コレに限っては違う！ 心をアイスピック
で抉られたように痛むっ。

「…………とりあえず、ココで待っててください。逃げるなよ？ いい
か、逃げるなよ？」

「フリなの？」

「逃げないで下さいお願いします」

「最初っからそう言えばいいのに」

ぐう、なんたる自信家。

ああ、そんなにも無い胸を張って……。可愛いなア、萌えるとかじゃなくて可愛いな、俺はこの幼女にそういう汚らわしい感情は抱かん！

……さて、修正の時間だ。

目の前のあられもない姿の玲嬢を正すため、俺は右手に『切断するための知恵』を呼び出す。

これは、良かれと思ってやることだ、ああ、そうだ。

「ヘロウ、玲嬢」

「っキセノンツ！？ あ、いや。これ、違……」

「いやいやいやあ、言葉を飾ることに意味は無い。……ところで、玲嬢。俺は不死だ。死ねん。一度死んだが、本当の死後の世界は見れなかった。というわけで、俺の代わりに死後の世界を見てきてくれ」

「え？ まさか……お前ツ！！」

「^{ああ}嗚呼そうだとも、昔の出来事を思いだして自慰に至ってしまうような、淫乱な子には ^{レッドシグナル}最終行動、暴力行為を行う」

「なアツ！？ ま、待ってくれ。ちょ、何だそのナイフは！？ やめ、うわああああ！！」

翌朝は服に付いた汚れを落とすので大変そうだ……。

などと考えていた俺はこの時、全く気付かなかった。

この日、俺は大きな呪いを背負い込んだことに。

気付かなかった（後書き）

恐らく主人公が（女性に）暴力を振るうのはコレが最初で最後かも知れません……。

花畑（前書き）

今回はタイトルどおりの人が出ます。最後の方にちよろつと

花畑

俺は昔、それこそ霞むような幼い頃の記憶だが。

『夢は呪い』という話を特撮ものか何かで見たような気がする。

その内容とは『夢ってのは呪と同じ。その呪を解くには夢を叶えなければならぬ、しかし、夢を叶える道を断たれた人間は、ずっと呪われたまま』というものだった。

幼い頃の俺は理解は出来ずとも、何かしらの恐怖を覚え、夢を持つ事を恐れた。

だから、俺は生きている世界に夢を見出さず、死後の世界に夢を抱いた。

そして、今。死後の世界……いや、死んだ後の第二の人生で好き勝手やってる。

でも、俺は薄々気付いていた。夢なんかよりもっと中毒性が強くて、陰惨な結末をもたらす呪いの存在に。

裁縫。

地味に俺の得意分野の一つだ。

好きではないが……。

「……ん」

俺が必死に布と格闘していると、隣に寝ていた幼女が目を覚ます。昨日結局、俺が玲嬢への肅清を終えた頃には幼女は既に眠りに付いており、仕方が無かったので俺は幼女を隣に寝かせ、起きるまでに服を直しといてやろうと思ったのだが……。間に合わなかった。

「へロウ、少女」

「……………変態」

何故変態と呼ばれた！？

……。

あ、服を脱がせた事を言ってるのか……。

服を脱がせたのか俺は！

服を直してやろうと思う気持ちでいっぱいだったから全く気付かなかった。

……………おかしい、確実に俺はおかしくなっている。

……………実は俺は幼女は食えないのか……………？ いやいや、そんなことはない……………。

くそう、この幼女に關すると俺がおかしくなる。怖え。

「まあ、そう言わずに……………。破れた服着続ける訳にも行かないでしょう？　ところで、少女。What's your name？」
「わっちゅゆあねーむ？」

む、転生者ではない……………か？　いやいや、隠しているだけかもしれない。

聞き方を変えるか。

「あなたのお名前は？　という意味ですよ」

「……………何処の言葉？」

「近未来語」

「はあ？」

何か物凄く頭の弱い人を見る目で見られた。

この幼女。その歳で何故ソコまで冷たい目ができるんだ！

いや、妖怪だから見た目に反して歳はいつてるかも知れない。

……そういえば、何故この少女が妖女と分かったか。

一つ目の理由は妖気が発せられてるから、二つ目は背中から何か生えているからだ。

何故何かと曖昧な表現をするかと言えば、なんとも説明し難いのだ、右側には赤い蟹の足のようなものが生えていて。左側には矢印のような青い何かが生えている。

妖怪らしいといえば、妖怪らしい容姿だろう。『何か分らない』という点においては。

ちなみにこの妖女。いや、少女、結構な妖力を放っている。将来有望だろう……。いや、歳いつてたら大したことはないのだが。

ここで追加で説明しておく、基本的に妖怪は歳をとる度に妖力が増して行く。……まあ、最初から強い妖力を持った妖怪もいるが、と、一応に説明し終わったところで、未だに不機嫌そうな表情でコチラを見てくる少女を何とかしなければ。

「で、お名前は？」

「……ぬえ」

「又・エ？」

「ぬえ」

変わった名前だなあ、言っでは悪いがグロンギのような名前だ。

ゴ・ヌエン・グ。

ん？ 鵺ぬえ？ 鵺鳥ぬえどりと言えばトラツグミ。

トラツグミ、知ってるだろうか。夜間や、天気の良い曇りの日や雨の日の中、『ヒィー、ヒィー』『ヒョー、ヒョー』という、とても生物の鳴き声とは思えない金属的な声で鳴く鳥だ。

ということは、この少女。鳥の妖怪さんか？ 翼ないけど。

……てまで、フルネームでぬえな訳があるか！

「フルネームは？」

「ふるねーむ？」

もう一度誘ってみたが、どうやら完璧に転生者ではない様子。安心したというか、若干がっかりというか。

「名前と名字を合わせたものことですよ」
「封獣ぬえ」

封獣？ いやいや、変わった名字。というかカツケエ。しかし……、全く持って何の妖怪かわからん……。聞いてみるか。

「なんていう妖怪ですか？」

「鵺」

「いや、名前じゃなくて」

「私の名前もぬえだけど、種族の名前も鵺なの。バカ」

無駄にバカと言われた気がする。

んん？ 鵺？ トラツグミじゃないのか？

わかんねえ、妖怪ってわかんねえ。

だから怖いんだと思うけど。

「まあ、いいとして」

「よくない」

「いいんだよ！　なんで昨晚はあんな所に？」

本来妖怪は自分の縄張りからあまり動かない。

動いてるのは歳をとった大妖怪とかそんくらいだ。

だからこそ、力は強いとはいえ、大妖怪には達しないこの少女……。ぬえ嬢……。いや、ぬえが居たのが俺は不思議で不思議でた

まらない。

「ちなみに嬢を付けないのは……。なんだろうか、なんというか……。あれだ。あれ。うん。あれ。」

「……何だっていいじゃん」

最終手段『何だっていいじゃん』を出されてしまった。
しかも顔背けたし。

ぐう、見た目は妖女なのに中身は反抗期の少女……。

「まあ、いいですけど。帰るところ、あるんですか？」
「……………」

話すどころかこつちを見てもくれない。

何故!?

まるで、交番に保護された家出少女のようなその対応に俺の心は着実に削られていく。

まあ、帰るところはないのだろう。答えないということは。

「無いのなら、どうです？ 一緒に旅でも」

「……………ヤダ」

「本当にイヤですか？ いやいや、一人で居ると昨日みたいな輩に何回も絡まれますよ？」

「アンタよりはマシな気がする」

まあ、普段はそうなんだけど。

今回ばかりは100%善意だいつ！

「いやいや、私が連れてかなかったことで性奴隷にでもなられたら私は寝起きが悪いのですよ。どうか、来てください」

「ゼツタイ、ヤダ」

「ソコを何とか！」

「ヤダ」

「……………」

「ヤダ」

「何も言つてねえよ！」

「うるさい。死ね」

「死ね！？ 手も出して無いのに死ねと言われたのは初めてなんだが！？」

「だから、うるさい死ね。耳障り。それと目障り」

俺のガラスのハートが撃ち碎けそうだ。

「…… 願います。どうか一緒に来ては頂けないでしょうか？」

私めはあなた様と離れたくなくて離れたくなくて仕方がないのです。どうか、どうか、この下劣かつ下等種族である私を助けると思っ、どうか、どうかっ……………！！」

「最初からそう言えばいいのに」

「ぐあーっ！！ こっちが黙ってればいい気になりやがっ」

「やっぱヤダ」

「大変、申し訳ありませんでしたア！」

「仕方ないナア」

ぐ、くそ。

今すぐにも押し倒して上下関係ってモンを教えたくなるほどハラが立つが、衝動的な行為が何故かできん……………！！

これは…………… 理性か！？ まさか、理性が俺に芽生えたつてのか！？

「あと、寒いんだけど。直し終わつたなら服、返してよ」

「あ、どうぞ」

取り合えず直し終わった服を渡す。

この服というのも、奇妙な感じで、襟元と胸元に少しフリルが付いているだけで、あとはスカート部に奇妙な模様を入れただけ、という簡素というか、なんというか……とにかく奇妙な服なんだ。

しかも材質も材質で、肌に吸い付くような奇妙な物が使われている。正体が分からん。

「……」

「……ん？」

「あっち向いててよ変態」

「いやいや、同性じゃないですか」

「アンタはなんか違う」

仕方が無いので、何が違うってんだ……。と呟きながら後ろを向く。

ちなみに、妖怪というのは便利なもので、服のサイズをあわせなくても体の成長にあわせて拡大縮小させられるらしい。すげえ。

「途中でこっち見たら殺すから」

「はいはい……」

いつも思うんだが、これ、殺すってどうやって殺す気なのだろうか。金取るから。とか言われた方が俺は怖い。

……とかいう俺の考えは甘かった。

そんな俺の首にぬえの蟹の足のような羽？ が伸びてきた。振り向いた瞬間首を切り落とす、と……。

怖い。不死だけど怖い。

「もういいよ」

その言葉と共に振り向く。と、同時に鎌のような羽が俺の首を狙ってきた。

「危なっ!？」

俺は顔を下げて回避したが……。
こ、こいつ……。

「冗談冗談」

けらけらと笑いながらそんな事を言ってくるぬえ。
俺は素晴らしき拳の一撃でもプレゼントしてやろうと思ったが、
そんな考えはその笑顔に消される。

ああ、コイツ。笑うとこんなにも可愛いんだな。

「……何？」

「いや、別に。大きさとか大丈夫ですか？」

俺の問いに対し、んー。と少し考え込んだ後、スカート部の端を
若干下に引っ張りながら一言。

「ちよつと短い……」

恥ずかしそうに言うその一言。

先ほどまで破滅の言葉しか言っていなかったぬえの口から聞こえた
ものだと思うと破壊力がヤバイ。

「……ワザと？」

「違うわ！ なんだったら直してもいいんですよ？」

「脱ぐのイヤだし、いいや」

いいのか。それで。

……ちなみに、全ての服装を着終えた鶴の服装と言えば、先ほど言った奇妙な服に赤いリボンを襟元につけ、それに加えて黒ニーソ、そして昭和チックな大きな赤いリボンの添えられた赤い靴。そして左腕には黒いリストバンド。

……奇妙な服装だなあ。俺に引けを取らないぐらい。

「んだよ……朝から騒がしい……」

そう言ってテントから出てきたのは昨晚肅清され、元々の性格へと戻った玲嬢だ。

俺の修正力は五十三万です。

「……第一、朝ぐらい静かに………お？」
「……？」

頭を掻きながら出てくる玲嬢。うん、大分元に戻ったな……。

と、そこで玲嬢とぬえが顔を会わせる。

何気に初対面だ。

「……まさか、キセノン。テメエ………オレに黙って子を……ッ」

「夢は夜に見ろ。……この幼女」

「幼女じゃない」

「この少女」

「少女じゃない」

「……」

「妖怪」

「……」

「大妖怪」

「ここに在らせますわアツ！ 大妖怪ツ！ 封獣ぬえ様であられるぞ！ 汝、それを知つてのご無礼か！？」

「うん」

うん、じゃねえよ、ぬえ。

どれだけ俺に持ち上げさせるんだよ。

……雰囲気で大体分かってきたが、ぬえは恐らくまだ若い妖怪だろう。……ということは将来有望か。

「……ぬえ？」

「そう」

でーん。と無い胸を張って言うぬえ。

ああ、憎つたらしいほど可愛いなあ、畜生畜生。もうお前のこと責めねえよ。ああああああ（以下略

「……おい、キセノン。ちょっと」

「……ン」

そんな俺の様子に気付いた……ワケじゃなさそうだが、取り合えず玲嬢が俺の裾を掴んでぬえから少し離れる。

ああ、コイツは俺よりは妖怪に詳しいからな……。知ってるのか？

「……オレもハッキリ覚えてるわけじゃねえが。鵜、つつと、正体不明で有名な妖怪だ」

「そうなんですか」

「まあ、ここまでは別に構わねえんだが……。あいつ、その内退治されるぞ」

「……はい？」

「……アイツが本当に鵠だつてなら、平安時代のどつかで……撃ち落とされた後、三度刺されて退治される……はずだ。まあ、ココらへんは確かじゃねえが、その内分かれる運命だつてのを留意しとけよ」

「まあ、一応覚えては置きます」

有名な妖怪だったらしい。

まあ、退治されそうになったら守ってやればいい、か。

そう軽く捉えた俺は今だ不安そうな表情を浮かべる玲嬢を連れてぬえの下へと帰る。

「何の話？」

「今日の行き先、ですよ」

「ふうん」

大変興味無さそうだ。

「ってか、バイク。二人乗りだよな？ オレどうすればいい？」

「……走れ！」

「死ねよお前」

何か今日は死ね死ね言われる……。

しかしまあ、ココでちゃんと用意しておくのが俺つてもんで……。

「まあ、冗談」冗談。……なんと、そんな玲嬢のためにッ！ もう一台あるのです！ ててーん」

実はスピアで作っただけなんだけど。

形状はそのままに若干青を強くしたカラーリングのTeellriumを呼び出す。

「まあ、名前は何でも好きに付けて下さい。個人的にブルースペードとかいいんじゃないかなあ？ 青色一号でもいいかと」
「バカにしてんのか」

ちなみに前者は特撮モノのバイクの名前。後者は着色料。
さてさて、玲嬢のネーミングセンスを拝見……。

「まあ、下手な名前考えるのもイヤだし、青色一号でいいか」
「いいの!？」
「い・い・の!」

その発想は無かった。

今回の目的地。

それは何処だろうか。

決まっている、都だッ！

何やらしい時代に当たつたらしい。いま、都ではこの世のモノとは思えないほどの美人。かぐや姫がいるのだとか。

かぐや姫。大半の人はご存知だろう。

光ってる竹切つたらいきなり中から無茶苦茶小せえ幼女が出てきて（酸素を供給する方法に付いては考えない）、それ爺さんが拾って、育てたらむっちゃ綺麗で、それで男共が言い寄って来て、それで無理難題出して、全員振って、結局かぐや姫は月からきたエイリアンでした。というオチの話だ。

そのかぐや姫の顔を拝めるとなれば、行くしかあるまいな。

……と、意気込んだのはよかったんだがなあ……。

「何と、死の香り漂う。花畑であろうか」

「オレさあ、ここ通りたくないんだけど……」

「左に同意」

左側で顔を青くする玲嬢と腕の中にすっぽり納まっているぬえが
一斉に俺の顔を見ながら言う。

……。

この道は何故か知らないけど人がいなくて、何故か知らないけど
都の門に見張りもいなくて、何故か知らないけど無茶苦茶俺たちに
都合がいい道。

そして、そんな道の上に存在する死の香り漂う花畑。

いや、別に本当に腐臭がするとかではなくて、何となく雰囲気
……。恐ろしい。

ン・ダグバ・ゼバとか平気な顔して出てきそう。

「だがしかし。ココを通らなければ都には辿り着けん……」

「もう行かなくていいんじゃないかなあ」

「左に同意」

クツ、こいつ等。怖気付いてやがるっ！！

しかも都には陰陽師とか居るから元より乗り気じゃない。

……。

「先に私が行って様子を見えます。帰ってこないことはないと思
いますので、少々お待ちを」

「……仕方ねえな。無茶すんなよ」

「死んで」

玲嬢の見送りの言葉は理解できるが、ぬえは何を言ってるんだ？
何故、死の香り漂う花畑に行こうとしている人間に死んでという

言葉を掛けられるんだ？

どういうことなの？

それとも俺が間違ってるの？

この時代的には見送る人間は死んでと言うのが風流なの？

「……………やべえ、ここ。本気でヤバイ……………」

踏み入れた花園。

一面生き生きとした花が広がる美しい光景　　だが。

どうにも、花が生き生きとしすぎている気がする。

しかも、ココには花が広がるばかりで、他の生物が何も存在しない。

犬も、鳥も、蝶も、飛蝗も、蟻すら存在しない。

完全な、花と地面、空、そしてそれを包む、優しくモノを押し潰すような死の香り。

それだけが広がっている。

これは俺が神だから分かることとか、そんなものじゃない。

恐らくは素人の人間が入っても吐き気を催すだろう。

それどころかショック死する人間だって居るかもしれない。

「迷い込んだ地は人を惑わせる花の楽園か。それとも、人の血肉を喰らう喰人花の巣窟か」

「ッ！！」

俺は即座に声がした方向へと振り向く。

いつからソコに立っていたのか。いや、いつからこの花園に居たのか。

振り向いた方向には日傘を差す青葉のような若い緑色の長髪を揺

らす女が立っていた。

その服装は妖怪の例に漏れず、チェック柄というこの時代背景を思いつき無視した服装。

強いて言えば、スカートでは無くもんぺな辺りが少しこの時代っぽい。

だがしかし、この女、ただ者じゃあない。

何たって、今俺は多少の周りの変動ですら過剰に反応するベヒモスの探知能力を使ってたんだぞ？

つまり、この女。

完全に妖力を隠蔽できるほどの力を持った妖怪だ。

それか、はたまた神かもしれない。

何にしろ、警戒状態の俺が気付かないってことはかなりのやり手だ。

雰囲気もそう語っているし、俺が気付かなかったという事実もある。

自惚れに聞こえるかもしれない。

俺が警戒状態になったときに気付かなかった存在なんて一つもない。

神の使いですら易々と発見できたんだ、……アイツの場合自分から見つかったような気もしなくはないが。

「あなたの目には、どちらが映ってるかしら？」

優しい。残酷な程優しい笑顔で女は俺へと問いかけてくる。

待て、待て待て待て。

コイツ、コイツはダメだ。

関わってはいけない部類だ。

力の差とかじゃあない。

関わったらお終いだ。

目線を会わせるな、ベヒモスなどよりも、ジズなどよりも、リヴ

イアタンなどよりも、コイツは 圧倒的に強い……！

何故ココまでの強さを？ 何故ここまで強い？

ああ、そうか、分かった。

恐らく、推測のかぎりを出ないし、これ以上に強力かもしれないが、コイツ。

元よりの力がかなり強いのに、それにコイツを恐怖する存在の恐怖の大きさが乗算されているのか。

神が信仰されることで強まるように、妖怪は恐れられることで強まり、あまつさえには神になるヤツだっている。

コイツは、それに近い。

俺と、いや、俺以上の存在だ。

「……私の目に映るのはただ一人の美しい女性。それだけですよ」

「あら、まだそんな事言えるのね。そんなに怖がっても揺るがない女性への渴望。尊敬するわ」

怖がっている。

自分は不死だと知っていても、こいつは恐ろしい。

足が、震えているのがわかる。焦点が揺らいでるのもわかる。

何だ、コイツは？

本当にこの世に存在するモノなのか？

「ま、別にいいわ。ところで、自己紹介がまだだったわね。なんていうお名前かしら？」

「Promethium・Xenonですよ。覚えなくて結構」

「そう、じゃあ忘れるわ。私は風見幽香^{かざみ ゆうか}よ。一応覚えて欲しいわ、私、人との関わりは大事にしてるの」

嘔吐け、と心の中で思う。

こんなヤツが人と関われるはずが無い。いや、人間程度がコイツ

と関われるはずが無い。

「さて、私の花園^{セカイ}へようこそ。何か御用かしら？」

目の前の女、風見幽香はそんな事を笑顔を浮かべながら言った。

花畑（後書き）

次回は戦闘回……なのだろうか……

月光美人とやら（前書き）

色々と残念です……な回

月光美人とやら

「さて、私の花園へようこそ。何か御用かしら？」

につこりと微笑みながら言う、ゆうかりん、幽香、幽香嬢。風見幽香。風見幽香さん。風見幽香様。

その笑みは絶対零度の笑みとか、狂気を潜めた笑みとか、目が笑ってない、とかではなく、紳士的な笑み。

だけでも、その笑みですら恐怖を覚えさせるほど、目の前のコイツは規格外だ。

素直に怖い。

「いえいえ、ただ単にこの道を通って都に行きたいナァーと、思っただけですよ」

「へえ。この道を？ よっぱど急いでるか、何か、重い理由でもあるのかしら？」

「まあ。そんな所ですよ」

「ふうん」

幽香嬢はべったりとこびり付くように俺の姿を観察し、また微笑む。

「嘘はよくないわよ。妖怪好きの神サマ」

「……妖怪好きじゃないッ！ 美少女好きだッ！！」

つくづくコイツは規格外だ、俺は今。確実に全ての力を隠蔽し、完全にただの人になっているハズだ。

それなのにコイツは俺の容姿を見ただけで俺が人間ではないことを見抜いた……。バケモノめ。

「しかし……、噂に聞いた通りの奇妙な服装ね。一目で分かったわ」
服装で見抜いたらしい。

……そこまで変かなあ、この服装……。
というか、有名なのだろうか。

「……もしかして、私って有名になってますか？」
「ええ、妖怪たちの中じゃ大人気よ。アレが探し回るぐらいにね」

「……あれ？ 何ですか、それ。美少女なら会いたいんですけど」
「あなた、早死にするタイプね。シラーなんかどうかしら」
「……ネラー？」
「シラー。あなたに似合いそうな花よ」

ぐう、上手い感じにアレに関してはぐらかされた……。
まあ、しかし。先ほどから見るかぎり紳士的な対応しかしてこないし、もしかしたらちよつと変わってるだけのイイ妖怪かもしれない。

第一、花が好きな人間に悪い奴はいない。

「むう、……ところで、通してくれるんですか？」

「うん。イヤよ」

「ありがとうござ。ええ……なんでですか先輩……」

「なんで、って。イヤなものはイヤなんだから仕方がないわ」

「それイジメですよ。イジメ」

「ごめんなさいね、それ、私の日課よ」

満面の意味で申し訳なさそうにそう言ってくる幽香嬢。
ぐぎゃあ。紳士かと思っただけのドSだった！

「……どうしても、通していただけないのですかね？ 私は……出来れば女性には手を出したくないのですが」

「ふふふ、私、嫌がることをするのが好きなのよ」

ダメだ。どうにも通して貰えないらしい。

ぐう、あまり気は進まないが。

実力行使、だ。

「分かり合えないのは残念です……」

俺が心底残念そうに言うと、その言葉をどういう風に解釈したのか知らないが、幽香嬢は広げていた日傘を折り畳んで、その先を此方へと向けてくる。

……傘は武器じゃない、刺す物でなく、差すものだ。

しかし、完全にやる気の彼女を無視することも出来なさそうなので、俺は覚悟を決め、黒コートを脱ぎ捨てる。

そして現れるのは俺の下着姿……ということは特に無く、黒のスボーツブラに黒の網と殆ど布一枚のぱんてゐを着た俺の姿だ。

THE露出。

「あら、随分と涼しそうな格好じゃない。普段からそれで生活すればいいのに」

「この格好だと、虫どころか草木すら寄り付かないんでね。そして、この姿で生活するのはただの変態だ！」

「あなた、変態じゃない」

……まあそうだけど。

それはそうと、あの黒コートを脱ぎ捨てる。それには結構大きな意味がある。

何故かと言えば、あの黒コートは俺の力を隠蔽するためのものだ。隠蔽すればもちろん隠蔽するだけの力は落ちるわけで。

つまり、あの黒コートを脱ぎ捨てる。ということは俺が本気を出す。という事に直結する。

今までは黒コートを着た状態で十分にやっていけたんだけどな……。今回ばかりは無理クサイ。

そして、脱ぎ捨てた自分自身。自分の成長具合に目を白黒させられた。

理由も何個か思い浮かぶ。

まずは毎晩月明かりを体内に溜め込んでいたこと、その次には妖獣や、男の妖怪やらを喰ったこと。

まあ、他にも色々あるんだろうが、思い当たるのはそれくらいだ。

「へえ……。噂以上じゃないの、久々に楽しめそうだわ」

そんな俺を見て楽しそうに微笑む幽香嬢。根っからの戦闘狂らしい。

「なあ、今からでも遅くないぞ。やめにしないか？　俺は女性を傷つけるのがイヤなんだ」

「さっきから特に此方の意見を言わなければ巫山戯たことばかり、イヤだとも言えば虐められないとでも高を括っているのかしら？　この世理不尽さを教え込んでやる！」

何故か怒られた。

うう、妖怪怖いよう。

「……ならば仕方あるまい、最早俺はお前が謝ろうと何しようと思っただけに許さんぞ。いいか、教えてやる。世の中にはなアッ！　美少女がグシャグシャに潰されて血みどろになり、恐怖と苦痛に歪んだ顔

に顔射したくて堪らねえヤツだっているってエことをツツ！」

ちなみに俺もその堪らないヤツの一人だったりなかったり。

まあ、ソコまでは行かなくとも、自信たっぷりなドSのお嬢様をDMに変えることに至高の喜びは覚える。

「ふふつ。その人達とは話が合いそうね、私」

マジかよ。

ならば、俺も幽香嬢を殺す気で戦うしかあるまい……。

「先手必勝。先手からの必殺。開幕必殺。出落ち。どれも俺は大好きだッ！」

そう俺は叫びながら地面へと手を当て、灰色のブロックが重力を無視して均等に並び、灰色と黒の二色に支配されており、空には多くの流星が輝き、月がなくとも十分な程異常な明るさを放つ星光に支配された世界を作り上げる。

一言で終わらずと俺の精神世界だ。

そして、そこへ幽香嬢を引きずり込む。

「……あら、随分と面白いことするのね」

これは分かる人には分かるだろうが、シャダイの堕天使達がやってきたネザー空間と似たモノだ。分からない人のために説明すると、肉体と魂を引き離して孤立させる空間、とでも言うかな。

実際のダメージは負わないものの、大きなダメージは精神的疲労に繋がる。

ようは、肉体的損傷を起こさずに戦闘する。

んで、勝った後には疲れ切って、動くことすらままならない幽香

嬢をクヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤ。

勝つ、絶対に勝つ。完膚なきまでに勝つ。

勝たねばならんだ!!

「これならお前も花への被害を考えずに戦えるだろう? 決戦のバトルフィールドへようこそ!」

「せっかくあげたハンデが無駄になっちゃったわ」

ふふふ、いつまでその強がりが続くか……。

俺は戦闘後のことに胸を膨らませ、地面を蹴り飛ばして接近する。右手には『相手を近距離で打ちぬくための知恵』即ちショットガン。左手には『相手を確実に削りきる知恵』即ちチェインソー。

……確かに、世界で最も強い力は愛だ、……ショットガンを除けばの話だがなアツ!!

そして、左手のチェインソーはマキタ・エンジンチェインソーっぽいヤツ。

このネタ分かる人いるのだろうか。

「ぶっぽるぎやるびるぎゃっぽっぽあーっ!」

雄叫びと共に俺は幽香嬢を千切りにするためにマキタ・エンジンチェインソーを振り下ろす。

それを傘で難なく流し、そのまま蹴りを入れてこようとする幽香嬢。

掛かった!!

この時代に『銃』という概念は無い!

即ち、それが何を示すか。

一度なら不意打ちで食らわせられるって事だよ!!

「この地ではどうだか知らんがなあああああ! 川越ではこうや

って寝かしつけるんだよおお！」

俺の首を狩ろうと向かってくる足に向かって、ショットガンを勢いよく放つ。

このショットガン、並の威力じゃあない。普通の人間が食らえば塵になる威力だ。

こんだけバケモノ染みた威力だ、この幽香嬢とはいえ……。ダメージはあるだろう。

「っ！」

俺の予想通り避け切れずに足を撃ち抜かれ、反動を殺すように飛びながら、着地する幽香嬢。

相手に与えた損傷は本当に小さい物で、ショットガンの弾で吹き飛んだ服以外は無傷。

……。

バケモノめ、バケモノめ、バケモノめ！

「随分と面白い能力持ってるじゃない。なあに？ それ」

「『知恵を支配する程度の能力』だ。服も、傘も、建物も、全ては知恵の結晶。そして俺はそれを支配する」

そう俺が馬鹿正直に告げると、幽香嬢は楽しそうに微笑むと、右手の傘を此方へと向けてくる。

「そう、じゃあ、この傘は何かしら？」

「『太陽光線から身を守るための知恵』だな」

「残念。『目の前を焼き払うための知恵』よ」

「は？ 何言って」

直後、日傘の先端から眩い光が放たれる。

オイオイ。超日傘砲^{アンブレラガン}じゃねえか、完成度高いなオイ。

なんて馬鹿なこと考えている暇は無く、横に飛んでそれを回避する。

「は！？ はあ！？ だからなんで、こういつも神やら妖怪やらは時代背景思いつきり無視するんだよー！」

「あなたもじゃない」

あ、そうか。

……まあいい。

ならば、見せてやろう。神の炎を。

とか内心で決めた俺は右手にジズの巨砲を呼び出す。

直後に腕に感じる重量感。

重さだけならベヒモスの角や背甲よりもある。

「あら？ それはなあに？ 大体予想はつくけど」

「ならば、その予想通りだ！ その綺麗な顔を吹き飛ばしてやるぜ
エエエエエエー！」

刹那、ジズの巨砲にエネルギーが充填されはじめる。

周りの空間に歪みが生じ、時間が凍り付いたように光が一点へと集中していく。

そして、その光が十分に集まったと判断した俺はその引き金を引く。

「滅びのバーストストリイイイイムツツッ！！」

発せられる巨大な薄紫の光。

あまりにも眩い光に俺は思わず目を瞑る。

「!!」

目を瞑っているため何が起きているか分からないが、確実にこれで勝つ。

「そんなの撃つたら、危ないじゃないの」
「!？」

右側から幽香嬢の声。

まさか、あの攻撃を食らって生きていた!? いや、避けた!?
馬鹿な!

あの攻撃をこの距離で避けるなんて、まさにバケモノ……。
等と考えていた俺の体は右から襲ってきた大きな力によって吹き飛ばされる。

「いつ……ぎゅ……!？」

地面を二度三度跳ね、俺の体はようやく動きを止める。

眼は未だ先ほどの閃光の所為でよく見えないが、次の攻撃に備えるために幽香嬢の姿を捉える。

その姿は既にボロボロだった、左腕は吹き飛び、顔も半分焼けている。

……精神世界の戦闘にしておいてよかった……。

「ふふつ、まだ落ちないわよ。まだ、まだまだ」

笑いながら迫ってくる幽香嬢。怖いよママン。

「タ、ターミネーター……」

燃え盛る地面を背景にゆっくりと歩いてくるその姿はまさにターミネーター……。

……。

しかし。

これは勝った。

俺はジズの巨砲の特性を知り尽くしている。

光で自分の目がつぶれるのはもちろん、幽香嬢が回避した場合に殴りに来るのも想定済みだ。

だから。

だから俺は。

「いいや、ここで幽香嬢の負けさ、足元をってみろ」

「足元？」

『罨』を仕掛けた。

足元を幽香嬢が見た直後、地面が爆ぜ、中から何十もの槍が飛び出す。

それは問答無用で幽香嬢を串刺しにする。

勝った！ 第三部・完ッ！！

そう思った俺は精神世界を終わらせ、先ほどの死の香り漂う花畑へと戻る。

……。

目を覚ます。

隣には可愛い寝顔で寝ている幽香嬢。

恐らくは今だ精神ショックから立ち直っていないのだろう。

……今のうちだ！

今うちに。

逃げる。

襲う？ 馬鹿な事を言うんじゃない。俺ほどに純粋な人間がそん

な事をするはずがないだろう。

えっちいのはダメだと思います。

というわけで、横に寝ている幽香嬢を起こさぬように花畑から抜ける。

触らぬ神に祟りなし。

ちなみに、USC、究極虐待趣味怪物（アルティメットサディスティッククリーチャー）なんて名前を引っさげた幽香嬢と再開する……なんてのは大分あとの話だ。

死の香り漂う花畑から脱出した俺たち一向。

ちなみに無事生還した俺への言葉は玲嬢が『おかえり』で、ぬえが『……誰？』だった。

畜生……。ぬえ。もう少し俺への態度柔らかくなってくれないかなあ。

そして今現在いる場所は都だ。

「……なんで黒コート」

「このコート、イカ臭い」

ちなみに今は都合上ぬえと玲嬢も黒コートを着用している。理由はお察しの通り、妖気の隠蔽と、ぬえは背中の物体の隠蔽だ。

っていうか、待て。なんだよぬえ『このコート、イカ臭い』で、イカ臭くねえよ。そのコートでどうやって俺はマスクくんだよ、バカ。

つつか誰だ、イカ臭いの表現教えたヤツ。俺がバラバラに引き裂いてやるのか？

「ていうか、このコート、ぬるぬるしてる」

「してねえよ！」

「やだ……べたべたしてる……」

「だあらしてねえっつの……！」

何なんだぬえは！？　どれだけ黒コートが気に入らないんだよ！

！　畜生ッ！！

「……ところでキセノン。不意打ちで悪イんだけどな、さっきオマエが帰ってくんの待ってるとき、ぬえがな……」

そんな感じに嘆いている俺へと玲嬢が声を掛けて来る、半笑いで。男だったら気持ち悪い。

「ふえあつ！？　やめッ！　やめろおっ！！　言っくな！　言っくな、言っくな！！　約束は守れバカが死ねッ！！」

それに反応してかどうかは知らないが、ぬえが顔を真っ赤にして玲嬢へと向かっていく。

「ふん、当たらくあああ……」

何かを言おうとした玲嬢がぬえの取り出した三又の槍によって撃沈させられる。仲良いなあ。羨ましいぜ……。

というか、何だ今のぬえの反応は。俺がいない間に何があった……。

「ああ、そうそう。こんなの作ってみたんだけど、どうですか？」

俺はふと思いだし、懷から二台の四角の物体を取り出してぬえと撃沈している玲嬢へと渡す。

「これは……携帯か……。うぐ、う……」
「……？ ……？」

玲嬢は苦しそうな顔で確認し、ぬえは不思議そうに見回している。そう、これは携帯。本来は俺の分のスぺアなんだが、どうせ使わないのでプレゼント。

「ついでに、これもどうぞ」

俺は更に懷から一枚の紙を取り出し、ぬえと玲された撃沈嬢……じゃなくて、撃沈された玲嬢に渡す。

これは『理解させるための知恵』で、この紙の中央に書いてある印を見ることが一瞬で携帯の使い方を覚えることができる優れものだ。

うわぁー凄ぁーい。

「オマエの能力って便利だよなあ、本当に」

「まあ、あなたの『硬度を無視する程度 of 能力』なんていう物騒な能力よりは役に立ちますよ」

「だよなあ……」

どうやら復活したらしい玲嬢は土埃を払いながらそう呟き、立ち上がる。

それに対しぬえは理解して興味が出たのか、忙しく携帯を操作している。中毒にならないといいんだが……。まあ、大丈夫か。

こつちの意思で無理矢理終了させられるし。

ということがありまして、辿り着いたのは豪邸。

「凄く……大きいです……」

豪邸と言いますのも、何処に來たかと言えば。

噂のかぐや姫を見に來たんだ。

いや、見に來たという表現はおかしい……。

食しに來ました。

何たつて絶世の美女と呼ばれるんだ。きっと礼儀正しくて、純粹無垢で、敬語キヤラ。

そんな真つ白で綺麗な子を我が手で汚すと思うともう堪らん！

「というわけで、かぐや姫を陵辱し……エフンエフン。かぐや姫を拝んできますね」

「本音が出たな」

「変態」

「ええい、うるさい。お前等も食つてやろうか!？」

「こつち來んな」

「ろりこん死ね」

誰だオイ、ぬえにロリコンっていう言葉教えた奴、玲嬢か？ 玲嬢なのか!？

ちなみに玲嬢とぬえは見ないとのこと、勿体無いなア。

まあ、玲嬢はああ見えてワリと常識人だし……人じゃないけど、

ぬえは考へてることが分からないから仕方ないか……。

そう思いつつ豪邸内に正面から侵入。視線の会ったヤツ全てに幻術をかけて、俺の姿を認識させずに最も深部に存在する部屋へと辿り着く。

さすれば、縁側で月を見上げる黒髪の長髪美人の後ろ姿が眼に入る。

そついや、かぐや姫はむーん・ざ・えいりあんだつたな……。まあいい。

「ヘロウ、かぐや姫」

「っ!？」

ふと声かけて見れば勢いよく振り向くかぐや姫。その顔は。
なんていうか。

予想より凄く若い。
っていうか。

少女じゃねえか。

……あれ？ やっぱあれなの？ この時代ってロリコン多いの？
ぬえとか襲って見たりさあ、諏訪子嬢が子持ちだったりさあ。

何？ ロリコン時代なワケ？

「……！ 真っ黒な服に鴉のような真っ黒な髪、そして歪に輝く緑色の眼……。妖怪好きの神、妖神ね」

何か有名人らしい。

妖怪だけじゃなく人にも名前が広まっているとは。

そんな目立ったことしたかなあ、俺。

服装か、服装なのかよ。っていうか妖神で、そこまで怪しいこと
やったか俺。

「おっと、ご存知でしたか」

「本人なのね!？ なら話は早いわ!」

話？ 何か話があるのか？

……まさか、告白!？

「私を助けて！」

この願いを受け入れること、それが後々にどう響くかの時の俺はそれを考慮してなかった。

、こ

月光美人とやら（後書き）

次回イ、みんな大好きなア。あのこが登場しますウ。

次回！「古代エジプト展の怪奇！」

見ないとミイラ化しちゃうZO

次回とは関係ないです。

下着姿で暴れ回ったあの夜（前書き）

タイトル通りの回です。超展開の連続！
わぁ凄い！

下着姿で暴れ回ったあの夜

悩める美少女、かぐや姫

改め、蓬萊山輝夜嬢ほうらいざん かぐやの願いはどう

やら月に帰りたくないとのこと。

「で、私には迎えに来た月の使者を撃退して欲しいと」

「そう、……しかし、全然噂と違うわね」

「噂？」

「ええ、黒コートの妖神といえば、女性に見境無く手を出すつていう噂よ」

何と正確な噂なんだろうか。マジで当たってるよ輝夜。

しかし、噂とイメージが違うのは当たり前だろうな、自分で言うのもなんだが、黙ってれば冷静沈着で生真面目な冷徹美人だし。

「誰ですか、そんな噂を流したのは……。ところで、今まで私に対してどのようなイメージがありました？」

「グヨグヨで醜いボロボロの肌をした気色悪い老婆」

酷え。

「若くて悪うござんした、イメージが違うと言えば、あなたも私の中のイメージとは大分違うんですけど」

「へえ、どんなイメージがあったのよ」

ちなみに補足。何らかのご都合主義によってムーン星人は英語使えるらしい、すげえ。ご都合主義すげえー。

それにしても輝夜嬢の元々のイメージねえ。

清楚、純粹無垢。大和撫子。敬語、おとなしい。こんなところだ

よなあ……。

実際には清楚で純粹無垢かは知らんが、大和撫子でもなければ敬語でもなかった。

「清楚で純粹無垢でおしとやかで敬語」

「全部合ってるじゃない」

「ナメてるんですか？」

何ふざけた事を言ってるんしょ、コイツは。男共に売り渡してやろうか。

「……で、月の使者はいつ来るんです？」

「明日」

「明日!？」

急すぎるでしょう!？

「頼んだからね! 絶対守ってよね!」

頼まれた。

ぐう、何たる我が俤か……。

「分かりましたが……何か相手の特徴と」
)

急に携帯が成り出した。どういふことなの。
着信ナンバー『スペア1』ぬえか。
ちなみにメール。

「……すみませんね」

「何よそれ」

「携帯です」

「ケータイ？」

「月には携帯無いんですか？ 遠距離でも会話できる機械です」

「ああ、あるわね。ケータイなんていう名前じゃないけど」

「そうですか、ああ、そうだ、これを一個あげます、連絡するときにでも使ってください」

そう言つて輝夜嬢へとスぺア3と説明書を渡す。……後で量産し
とかなきゃなあ。

そしてついでにメールの内容を確認。

さてさて、初メール。

『助けて』

その三文字で初メールは終了。

ううん、何があつたんだ、外で……。

まあいい、助けてと言われて助けない人種は存在するだろうか？
いや、無い。

ということと輝夜嬢とのファーストコンタクトを終えた俺は外の
玲嬢達と合流することにした。

外で見た光景。

それはそれは、なんとも言えないものだった。

「キセノン……」

「遅い死ね」

「死ね死ね言うのやめろ！」

心配そうな表情で此方を見てくる玲嬢と死ね死ね言ってくる死ね
じゃなくてぬえ。

何があったのかと思えば、中流陰陽師に囲まれていた。

陰陽師は実在したのか！

だがしかし、陰陽師は見たところ全員男。なら何も問題は無い…

…。

が、とりあえずは平和的交渉を試みる。

「Hey、レッツゴー陰陽師さんよ」

「む？ き、貴様はあつ！ 神の身にて妖怪の同胞はらからとなりし妖神ツ
！」

何かカツコイイ名前付いてる。ハラカラですって、ハラカラ。

ハイカラみたいだなあ。

「まあ、そう構えるんじゃない。俺等はどうちにしろ明後日の明け方にはこの都から去る予定だ、その間にも民間人に危害を加えるつもりは無い」

「貴様等の言うことなぞ信じられんわ！」

「オイオイ、忘れてもらっちゃア困る、俺は神だ。カミウソツカナ
イ、コレホント」

俺の言葉に中流陰陽師達は顔をあわせて何やら相談し始める。

信じろつてのにー。

「…………ぐ、むう。………… まあいい、明後日だ。明後日の明け方以降に見かけた場合は即退治するからな！」

「ハイハイ。…………というか、なんでそこまで突っ掛かって来るんですかい。私等なんもやってないっしょーに」

「……確かに貴様等は何も悪事は働いていない……。だが！ この妖怪だけは違う！」

そう言つて中流陰陽師はぬえの事を指さす。
え？ マジで？

「姿形は変われど、この珍妙不可思議な翼は間違いなく大妖怪、鶴
！！ 退治されても懲りずにまた現れたか！」
「なん……だと……？」

そう言いながら中流陰陽師はぬえの黒コートを取り上げる。
陰陽師の言葉に対し、俺が心底意外そうに言つとぬえがこちらに
ぺろつと舌を出してくる。

「バレちゃあ、仕方ない！ さてさて、ご覧あれ！ ココに居りま
するわ幾度も都を恐怖へと陥れた大妖怪、封獣ぬえサマだ！ 名声
が欲しい貪欲な人間共は私を捕まえるといい！」

今までの家出少女のような態度は何処に行ったのやら、演劇染み
た手振り身振りで一軒屋の屋根へと上つていく。

何？ なんだ？ どういうことだ……！？

「おい、待てぬえ！ これはいつたい……」
「ハッハハハ！ 悪いねえ、妖神サン。でも、楽しかったよ。機会
があればまた会つたろうよ！」

そう言つてぬえはポイと何かを此方に投げ、飛び立つ。そして、
陰陽師達はそれを必死の形相で追つて行く。

俺は慌てて投げ捨てられた物を受け取る。と、それは俺がぬえへ
とあげた携帯。

……なんだと……？

こんな自己中心的な終わり方があっていいと思っているのか……！？

待てよ。待て。

俺の気持ちはどうなるんだ？

俺の今までの思い。

ぬえに罵られるたびに快感ではなく心に傷を負い、ぬえが俺の作った料理を不味そうに食べるたびにもっと上手くなろうと思い、ぬえの笑顔を見るたびに『この顔を見るために生きている』と実感した俺の思いは？

……そもそも、この思いはなんだ？

恋か。恋かよ。嘘だろ。

最悪だ。

俺は永遠を生き続ける。それは、どんな恋でも叶わないことを示している。

それなのに、俺はあの妖怪、ぬえに恋したってのか？

一目惚れか？ そんなバカな。

ありえない……。

まさか、そんな……。

「俺も」

「どうした、キセノン？ 中流陰陽師がぬえに夢中になってる間に逃げるようぜ、……しかしまあ、大分聞いていたのとは違うな……、やはり、歴史は肥大化され続けるのか……？」

「俺もッ……！！」

「だからどうしたキセノン！？」

「俺もロリコンだったのかよッッ！！」

「いや、そうだろ」

「……え？」

「いや、だって。ぬえへのあの態度、確実にオマエロリコンだよ」

「マジ？」

「ああ、マジだよ。確実にロリコンだ、しかも重度の」

「……マジかよ」

「そして、オマエが今抱いてるのは恋心なんかじゃあない、勘違いするな」

「マジで？」

「そうだ、オマエはどうか知らないが……オレが聞いた話じゃあな、どんな女に手を出すヤツでも本気で綺麗だと思った女には手を出せないらしいぜ」

「……」

「つまるところ、オマエは自分の好みストレートなぬえを見つけ、手を出せず、それを恋心か何かと勘違いしているんだ」

「……………ええー」

なんでそんなこと言うんだよ、八話の冒頭で……おっと、メタな発言はやめておこう。

ううん、納得できたような、できないような、こう、なんだ……確かに合ってるっちゃ合ってるんだけど、合っていないような……。心に靄が掛かったような……。スツキリしない。

「ま、いいか。で、かぐや姫はどうだったんだ？」

「クソ生意気なガキだった」

「そこは嘘でも美人とか言っておこうぜ……」

「や、だつてさ……。月の使者を撃退してくれとか言われたんだよ……。わけがわからないよ」

先ほどまでの精神状態だったらいいが……。今は何もやる気が起きないし、無駄にハラが立つ。

こう、なんというか。掴めそうで掴めないもどかしさというか、苛立ちというか。

そんな物が心の内側を攪って苦しい。

……こんな時は神の使いに連絡しよう。何かいい案を出してくれるかもしれない。

「……」

『やあ、今度はどうしたんだ？ ……いや、そうか。フッフ、彼女と別れたんだな？ それで心の靄が晴れないんだろう？』

なんで知ってるんだよ。ストーカーさんか？

『安心しろ！ 既に手配はしているさ。 ……準備をしている間に月人を救え！』

月人。恐らくは輝夜嬢のことだろう。 ……うつ、何もかもが納得行かないが、取り合えずこの仕事が終わったらこの気持ちもすっきりするらしいし、本気でやるか……。

というワケで、ぬえとの衝撃的かつ早すぎる別れから一日経って、輝夜嬢救出作戦実行日です。

「キセノン。そんな装備で大丈夫か？」

「一番いいのを頼む」

目の前にいるのは久しぶりと言わざるを得ない神の使い。

「よしわかった。まずは広げてみるか……」
「死ねやオラ」

コートの胸部分に手を掛けてきた神の使いの顔面をわりと本気で殴る。

「……そんな、神の使いつてマジモンの変態かよ……」

そして絶望した様子の玲嬢の声。そうだよ、神の使いは変態だ。

「ん？ ああ、君か。ふむ……。美しい」

「は？」

「頑張れ玲嬢！ 俺は輝夜嬢を助けに行ってくるよ！ 楽しんでいてね！」

ワケが分からないという様子の玲嬢を置いて、俺は事前に見つけておいた輝夜嬢の豪邸を見渡せることが出来る丘へと向かう。

「え？ ちょっと、なんでこっち来る……！！ うわ、やめる何すんだこっち来るうわあああああああ！！！」

背後から玲嬢の悲痛な叫び声。許せ！ 玲嬢！

「いい眺めだ……」

その丘からは星が見え、星の下では何か、凄い近未来チックな船が飛び回っている。

オイコラ、空を飛ぶ馬車とかじゃないのかよ。マジで戦艦じゃねえか。

とかなんとか突っ込んでいても仕方が無いので輝夜嬢邸へと向かう。

ああ、それにしても苛立つ、マジで苛立つわー。

なんてこと思っていると、巨大な戦艦が輝夜嬢邸へと降り立つ。

少し急ぐか。

背中に『高速で移動するための知恵』即ち久しぶりのジズの大翼を呼び出す。

そして、瞬間的に加速。

目標に肉薄するまえに右手にリヴィアタンの頬角、即ちレーザーブレードを呼び出す。

「レエツツパアリイイイイイイイイイイイ！……！」

叫びと共に飛び上がり始めた戦艦へとレーザーブレードを突き立てる。

本来ならこの戦艦から『空を飛ぶ知恵』を奪えば終わる話なのだが、今日は苛立つてるのでブレイクダウンさせる。

「これはッ！ 俺の分！」

一撃、戦艦へと入れる。それだけで戦艦は大きく揺らぐ。

「これもッ！ 俺の分！」

また一撃、戦艦へと入れる。中からけたたましい声が聞こえ、戦艦は落ち始める。

「そして、これがアッ！！ 俺の分だアアア！！ チクシヨオオオオオ！！ どうせ逃げられんだったらキスの一つや二つ無理矢理にでもしとけばよかったわアアアアア！！」

最後の一撃、戦艦を勢いよく地面へと突き落とす。

俺は戦艦から降りるなどせず、何度も何度もリヴィアタンの頬角を振り下ろす。

「どいつもこいつもッ！！ 身勝手すぎんだよッ！！ いきなり戦闘仕掛けてきたり！ いきなり本性現して逃げ出したりッ！！ イヤだと言ったのに東方の世界に飛ばしたりイツ！！ まあ最後のは若干感謝してるけどフウオオオオオオオーンッ！！！」

ついに地面へと戦艦は落ち、煙を上げる、だが、その中俺は一人で某雛見沢のヤンデレ鉋っ子の如く、笑いながら何度も千間にエネルギーブレードを叩きつける。

「っっていうか！！ 結局吉田の野郎ゲーム借りたまま返さねえし！！ 里中也借りた金返さねえし！！ 甥っ子は生意気だし！ 嫁はすぐ死ぬし！ うわあもう畜生クソがクソがクソがクソがッ！！ 死ぬ、取り合えず死ぬよ！ 死んでくれよ！ もう懲り懲りだア！！ いくら好き勝手やっても俺の受けてきた勝手に比べると断然少なええんだよオオオ！！！！ ああ！！ もう幽香嬢をメス犬にしてえ！！ あの自信満々な顔を快楽に歪ませてもう俺無しじゃ生きられない体にしてやる！！ クソオオオ！！ アア、ああ、あああああああ、輝夜嬢だ、もういい！ 輝夜嬢も奴隷化させる！！ あのクッソ生意気なガキがよオ！ 図に乗りやがってからに！！ 守れ？ なんでだよクソが！！ 世の中ギブアンドテイクだろうがお嬢ちゃんよオオオオオ！！ そんな事もわかんねえのかよ！？ アア！！？ 守って欲しいなら性処理の一つでもしてみろつつうの！！ ああ、これだからイヤなんだよクソガキアアアア！！ ハアッ、ハアッ、ハア、ふ、ざけ、フザケやがッてエエエエ！！ よくよく考えてみたら俺は過去に一回月人にメチャクチャにされてんじやねええええかよおおおお！！ なんて俺助けてるんだよオオオオオ！！ バカにしやがッて！！ ふざっけンじやねエぞ！

！ ナメやがつてエええええええええええええええええッ！！」

俺は思わずフードを脱ぎ捨て、落ちた戦艦へと腕を突き刺す。
そしてそのまま腕に全力を注ぐ。

「がつ、アアあああああああああああああああああああああああああッ！！」

戦艦を振り回し。砲丸投げの要領で遙か上空へと投げつける。それは見事に直線を描き、遙か上空の戦艦にぶち当たる。

ああ、そうだ。いい事を思い付いた。

散々好き勝手やられた身だ、少しぐらい好き勝手やってもいいだろう。

「オ」

潰そう、空の戦艦全て。前回の俺の時間での仕返しだ。

「オオオおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！」

足が潰れるんじゃないか、上半身と下半身が千切れるんじゃないか、と思つぐらいの跳躍で一気に戦艦群へと近づく。

「く、」

まずは全てのコントロールを失わせる。

どうすればいいか。

……奪えばいい。

奪う、身勝手に身を任せて奪う！ 奴等の知恵全てを奪い去る！

全てを無意味な鉄塊へと戻してやる！！

「くか、」

そう決めた俺は身勝手ながらも手を大きく横に広げ、能力の範囲を無理矢理にでも広げる。包みこむ、流し込む。

「くかき、」

全ての飛び立とうとする戦艦の動きが止まった、いや、止めた、止めてやった、身勝手ながらも。

「くかきけこかきくけききこかきくこくけけけきくかくけけこかくけきかこけききくくききかきくこくけくかきくこけくけききこきかか　　ッ！！」

魔力の全てを使い果たす勢いで自分を極限まで加速させ続ける。

幸いにも今日は満月だ。

馬鹿な奴等だ、満月の夜に来るなんて、知らないのか？　こいつ等は？

満月の夜は全ての人ならざる身の者が全てを支配する時間だって事を。

まあいい、身勝手だが、潰させて貰おう。

肉が引き千切れるかと思う速度で戦艦から戦艦へと移り、一ヶ所に落としていく。

死体の山に血の海を作って某・13組の皆様を笑顔にさせちゃうぞー

「あは」

思わず笑みが零れた、これだけ周りを気にせず好き勝手できたのは初めてだ。

いつも何処かに少女がいるんじゃないか、怪我をさせてしまうんじゃないか、とかそんなバカみたいな事を考えて自分の動きを縛ってきたが。今回ばかりは知らない。

いたとしたら動き回っていたソイツが悪い。船に少女が乗っていたら、乗っていた奴が悪い。

「ぐ、くそ。なんだ、なんだあ……」

戦艦から一人の男が這いずり出てきてそして、それを先頭に何人もの男が這いずり出てくる。

「あら、ああああああ。乗っていたのは男。男！ はっはは、無駄な心配するだけ無駄だったかにゃーん？」

「なんだ、貴様はッ……？ 地上の、地上の穢れた存在が我等に牙を剥こうと言うのか……！？」

「ああ、穢れてるよオ。俺は真っ黒だあー。ついこの間まで真っ白だったんだけどねえ。何処で道を間違えたか……。いや？ 間違えてないのか？ あはっ。そうだよ、道に間違っても何も無いんだ。俺が歩んだ道こそが俺の正義だ、身勝手な解釈だが……それがいい」

俺がのんびりと独り言を言っていると、男たちは武器を取り出し、此方に一斉発射を始める。

俺はコートを脱ぎ捨てている、つまり黒のスーツブラと黒の極小下着を着ているだけだ。

弾丸なんて当たれば肉が飛ぶ。

でも、俺は避けられなかった。頭の考えるという機能が麻痺して、動こうとすら思えなかった。

そして、全身を激痛が襲った。

だが、肉は吹き飛んだ部分から回復していく。
しかし、痛い。

「痛い……」

呟いてみるが、男たちは未だに恐怖に顔を歪めて銃を乱射する。
恐らくは撃つても撃つても死なない俺が怖くて怖くて仕方ないの
だろう。

ああ、こんなとき思う。俺は死ねたらどんなに楽だろうか。と。
俺に死があるならどれだけ楽だろうと。

ぬえを得れないということへの悔しさとそれが出来ない理不尽への
怒りで狂うことなんてなかったらうに。

「痛いってば」

お返しとばかりに魔力を用いて光熱刃を作り上げ、一人の体を斜
めに切り落とした。

「な、何故だ！ 何故死なん！？ クソ、死ね！ 死ねエ！！」

残りの男たちが焦った表情で更に俺を撃ち続ける。

なんでこいつ等は分からないんだ？ 俺は痛いと言っているのに
何故撃つのをやめない？

一瞬で一人殺せると教えてやったのに何故逃げない？

ああ。そうか。

こいつ等も俺と同じ願いの元に生きてるのか。

そうか。こいつ等も死にたいのか。

死に場所を求めて、俺という死ぬのに最適な存在を見つけ出した
のか。

そうか、それなら。

殺してやるのが義理つてもんだ。
だから。

だから俺は、男たちにつこりと微笑む。

「 ブチ、殺す」

両手に『叩き潰すための知恵』を呼び出す。それは先が折れ曲がった盾のような物で、この平らな面で殴れと言っているらしい。

俺は即座に自分に加速系魔術を掛け、身体を高速化させると、一瞬で男に肉薄する。

そして、そのまま眼を円くする男の顔を右腕で殴る。

殴る、といっても加速化されてる上にこの硬さの物体で殴られたら、殴られるじゃあすまない。

詳しく言つと。空中を飛ぶ車に頭のみを跳ねられる感じだろう。

「あははぎゃあはははひひひぎゃあはあはアハあはははッ！！」

どこぞの一方さんのような我ながら狂気染みてると思う笑い声が自然と口からでた。

あれ。

俺はコイツを知らない？

いやいや、コイツは俺のはずだろう。

俺はコイツで、コイツは、俺だ。

知ってるのに、知らない。

腕が、止まらない。

もう疲れ切ってるのに、まだこいつ等を殴るためならいくらでも腕が動く。

ああ、ダメだダメだ。呑まれるな。

コイツに呑まれたら俺は本当にただの異界ジェノサイダーになっちまう。

「ンンーう？ 楽しい。あはは。やべエよオイ最高にトンじまったぞクソ野郎オ！！」

ダメだダメだP m・X e、P r o m e t h i u m プロメチウム X e n o n キセノンは
こんなヤツじゃない。

少女をこよなく過剰に愛し、愛でる生き物だ。

勢いに身を任せ、当たり前構わず暴力を振るうような人間じゃあない。

ダメだ、抑えろ。こんな理不尽は永遠に生き続けるなら何度も味わうものだ。

やめろ。ダメだ。永遠に生き続けられる俺にはまだチャンスが死ぬほどある。

ぬえだつて何度も退治されて生きてるような奴だ、そう簡単には死なない。

落ち着け、落ち着けよ俺。

ダメだ。

「ハハハハハッ！！……………あ」

周りを見てみた、誰も生きていなかった。

全員、綺麗に一人残さず全員死んでいる。

ああ、俺が殺したのか。

なんでこんな……。

「ああ、あ。あああ……。ぬえ。ぬえ？ ぬえは、ぬえは、何処だ？ ぬえは何処にいる？ さが、探さ、ねえと、俺は、アイツしか、アイツが、アイツを。俺と、アイツ。えあ、き。くひ、ぬえ、ぬえ、ぬえ、ぬえ……。何処だ？ 俺の、最愛のぬえは何処に？ ああ、愛しなくちゃ、愛されなくては、ぬえに。ぬえに好かれない。

ぬえを好きたい。ぬえ？ 何処に……」

頭の中が上手くまとまらない。でも、一つだけ確実に分かったことがある。

俺は、壊れかけてる。

ダメだ、ぬえに完全に嫌われるか。好かれるか、しないと。何もかも焼き尽くしてしまいたいほどに心が焼かれる。

「う、うう。ううううう……。ぬえ、ぬええ……。何故だ、何故俺の前から消えてしまったんだあ？ ああ。嘘だ、ぬえ。ああ、ああ、あああああああ……」

会いたい、今すぐに会いたい、あの自己中心かつ自信家なぬえに会いたい。抱き寄せたい。嫌われようと何をされようと構わない、今すぐにアイツの温もりが欲しい。身勝手だってのは知ってる、でも。ぬえの温もりをこの手に欲しいんだ……。

本当に短い間の付き合いだったが、俺はアイツに心底惚れている。アイツ意外の物を破滅させてもアイツを手にしたいくらいに。

「どうしたキセノン？ 泣いてるのか？」

「……神の、使い……」

背後から意外そうな声を掛けてきたのは神の使い。

「……随分と派手にやってくれたなあ。……ま。以前の時間軸のこともある。別に許容範囲だろう」

「玲嬢、は……？」

「ん？ ああ、彼女ならもう寝たよ。いや、寝てもらった、のが正しいかな……」

「……そう、ですか……」

「さて、お前は随分とあの小娘に惚れ込んでしまったみたいだな……、それ故に、恋が許されない事実には歯痒さを覚えてるんだろう？」

「……」

「まあ、大丈夫さ。明日の昼頃にはその悩みを晴らせる人物を準備するよ。それまでの辛抱だ」

神の使いのその言葉に俺は黙って頷く。……どちらにしろ、頷く意外できないが。

「……あ」

太陽は明るい。

様々な有毒光線を放ちつつあれ程綺麗に光っている。
朝起きるたびに何時もそう思うんだ。

「……」

俺は自分の寝ていた場所を見回す。

それはそれは酷い有様だった。

グシャグシャに潰れた戦艦の山、そして、元の形が分からないほどにバラバラになった死体達。

この光景を俺が一晩で作ったのだと思うと、吐き気がする。
……でも、そんな場に、一人。生きてる人間の気配がした。

「……誰？ 出てきてください」

そこにいる誰かへと話しかける。

すると、大きなつぼを抱えた黒髪ロングに黒眼の少女が姿を現す。
……俺のかぐや姫のイメージこれだわ。

「あ、の……」

「ああ、これですか？ これなら私がやったんですよ……。でも安心してください。あなたに危害を与えるつもりはありませんから……。どうぞ、こちらへ」

「ありがと、う。ございます……」

実に可愛らしい敬語と仕草で縮こまりながら俺の横へと座った少女。

なんとも可愛い。

見ていると、俺の心も少しだけ回復する。

ああ、そうだ。この感触が欲しくて生きてるんじゃないか……。

「……しかし、こんな森で一体何を？」

「奪って……きたんです。これを……」

そう言っただけで彼女が差し出すのは大きなつぼ。

「中身は……何なのですか？」

「分からない……でも、持ってた人達が『不老不死になる薬』だって」

そんな薬を作れるのは……。恐らく月人だろう。
という、こいつは輝夜嬢関連か。

「なんでそんな物奪ってきたんですか？」

「……アイツは、私が受けなかったお父様からの優しさを全て受けたのに……、それを見下した笑みで拒絶したんです。それが、私

は許せない……！　なんであんなヤツがお父様に愛されて、私は愛されない……？　そして、思う。アイツを殺してやろうと、絶対に殺してやる。私の受けるべき愛を全て奪っていくどころか消し去ったアイツを……！」

恐らくはアイツとは輝夜嬢のことだろう。

なら、この子の父親は輝夜嬢に貢いで貢いで捨てられた、のか。

……こういうパターンと、この時代が重ね合わさると……、大体こういう位置づけの人は父親に凌辱されてるんだが、実際はどうなのだろうか

「……父親から何か酷い目に遭わされたりしました？」
「……………」

少女は答えない。

……されたのだろう。

こんなにも一途で優しい子を汚す……。
最後だ。

今だ昨日の余韻が残ってる内に……。

「その薬、飲むんですか？」

「アイツを、殺せるなら……………」

「……………まあ、頑張ってくださいね。応援はしておきます」

俺はそれだけ残して、その場を去る。
最後の大仕事。

心のケアを受ける前に、もう少しだけ汚れよう。

「やあ、随分と良く寝てたね。もう準備は整ったけど……。行くか？」

「
いいや、最後に一仕事だけ、あっちにいる子の親を
消す。」
」

下着姿で暴れ回ったあの夜（後書き）

もう少しで昔話編は終了かもって、ミサカはミサカは報告してみたり！

バトンタッチ（前書き）

今回は話の視点がキセノン大先生じゃあないですう。

バトンタッチ

『灼熱地獄』この単語を聞いてあなたはどのようなイメージを浮かべるだろうか？

醜い岩山が連なり、地面には溶岩が煮え返り、空は真っ暗で人々が労働され続けられる。

大方そんなイメージだろう、だが、それは少しかハズレだ。

確かに醜い岩山が連なり、地面には溶岩が煮え返り、空は真っ暗だ。でも、人々は労働され続けられていない。

というか、この灼熱地獄は巨大なサウナだ。

火車が罪人の死体を運んできて、それを燃やし、この地獄の灼熱を保たせる。

……というのも、既にここは灼熱地獄ではなくなっている、正確には灼熱地獄跡地だ。

あまり物事を深く考えないタイプな僕は知らないが、なんやかんやあって、この、今まで『地獄』と呼ばれていた場所は地獄じやなくなるしい。

じゃあ何になるんだい、と思ってみれば『旧地獄』になるんだと単純でいいねえ。

で、僕は何故そんな事を知ってるか。

今現在、僕はそこ、つまり灼熱地獄に住んでいるからだ。

「暑う……」

別に暑くはないが、元々が人間だった僕は思わず呟いてしまう。

……元々が人間だった。これが何を意味するか。

別段、昔は罪人だった。とかではなく、ただ単純に色々と面倒なことがあった。

なんだったかな、……そうだ。

僕はスカイダイビングをしていた、そしたら、コントロールを失った軍用ジェットに跳ねられて即死した。

急な死に方だなあ、いつもならもつとゆっくり死ぬのに、何か急用だろうか？ などと考えていたら、神に『灼熱地獄に行け』と言われて……。で、この状況というわけ、さ……。

……いやまて、今の説明は普通じゃないなあ、ダメだ。二千一回も死ぬとそろそろ色々なものが麻痺してしまつて……。

細かく再び説明しよう。

僕は死んでは死ぬたびに転生を繰り返している。

神に指示された世界で指示された容姿で指示されたように生きる。それが、在るかどうかも分からない『僕』という存在の人生……。で、今回はその一環で『灼熱地獄』に『地獄鴉』の『薄青いボブショートに青紫の眼をした少女』として生きている。というわけさ。うん？ 男なんじゃないかって？ ああ、うん、一番最初は男だったかな？ ……女だったかも。分からない、だから僕は『僕』という曖昧な表現で自分を呼ぶ。別に『私』でもいいんだけど、かたつくるしくてイヤだ。

しかしまあ、ココまで来るともう、男か女かなんてどうでもよくなつてくるワケで、最近じゃ食欲も睡眠欲も性欲すらも衰えてしまった、食べ物を見ても美味しそうだなあ、とは思うけど食べようとは思わないし、眠いなあ、とは思うけど寝ようとは思わないし、異性の体を見ても勇ましいなあ、綺麗だなあ、可愛いなあ、とは思うけど、交わりたくないなあ、とは思わない。

この性格の所為で何回か嫌われたこともあるけど、まあ、そんなことあったか、なかったかハッキリしたもんじゃあない。もしかしたら僕の妄想かもしれない。

第一に、僕的な考え方だと、もう、記憶という存在自体が曖昧だ。自分では絶対そうだと思っていた記憶でも、それはもしかしたら自分の願望から来た妄想だったかもしれないし、必ずしも記憶は美化される。

結局何がいたいかと言うと。

別に何も言うことはない。期待していた人はゴメンよ。

「じゃじゃーん」

「わ、驚いた」

僕がいつも通り誰かも分からない存在に心の中で話しかけていると、後ろから三つ編みの赤い髪に、赤い眼、ゴスロリチックの服装に身を包んだ少女が抱き付いてくる。

彼女の名前は……知らない、というか、ない。
必要がない。

何せ彼女は最近人の姿になる事ができるようになったばかりの猫だ。

その内名前でもあげようかなあ。

ちなみに元々が猫なので耳と尻尾がある。

ついでに彼女が猫の姿になるとお腹が真っ赤で、ヤドクガエルみたいな可愛い配色になる。

「えへへ、本当に驚いたかい？」

「驚いたよ、心臓に悪いナア」

「ごめんごめん、で、さ。コイツを見てくれよ、お姉さん」

そう言いながら彼女は一人の女の死体を手に持つ荷車から落とす。

「どうよ、この死体。あたいが今まで見た中じゃ一番綺麗だと思うんだけど」

「死体が綺麗、ねえ」

彼女の芸術センスは今だ理解できないが、見てあげないと後で怖いので一応見てみる。

その死体はほんのりピンクに染まった外傷のない死体。恐らくは二酸化炭素中毒死体だろう。

確かに綺麗だ、二、三日前に持って来た口から臓物が垂れているような死体と比べれば遥かに。

でも、二酸化炭素中毒死体、最初は確かに綺麗だが、しばらくすればそれはそれは醜い死体へと変貌する。

彼女は恐らくその事を理解できるほどの知能を持ち合わせていない、よって嘆き悲しむだろう。

いやいや、もしかしたら僕にプレゼントなどと言って押し付けてくるかもしれない、それはそれで面倒だ。

ということでは分させよう。

「ううん、確かに綺麗だけどネエ。まあ、綺麗なうちに焼いちゃったほうがいいよ。いつまでも綺麗な物なんて何処にもないんだから」

「ええ、勿体無いう。何処かに飾りたいなあー」

「ダメダメ、金で出来た象も時が経てば錆びるし、新婚の頃の写真は離婚後には悲しい思い出となる。思い出は物に残しちゃあいけないんだよ。全部、自分の頭の中だけに留めて、永遠に美化させ続ける。それが一番の保存方法さ」

「……………うん？」

「ありゃ、わかんないか。まあ、もう少ししたら分かるよ。まあ、取り合えずその死体は焼き払いなよ。二日ぐらいすると多分汚くなるから」

「ううん、今はこんなに綺麗なのになあ」

「綺麗な人だって年を取ると醜くなるだろう？ 物には必ず綺麗な時期があるけど、その後はずっと醜い時期が続くの」

「まあ、お姉さんが言うことは難しいけど、いつも当たってるし。勿体無いけど、焼いてくるよ」

納得したのかしてないのか微妙な表情で彼女は荷車に再び死体を

詰め込み、すたーと焼却場所に向かって走っていく。

死体を運ぶ美猫少女。ううん、マニアック。

さてさて、彼女が行ってからで申し訳ないが、彼女の説明をしよう。

彼女は名無しの火車。でも、人化できる火車は彼女だけだから見分けは付く。

火車、知っているだろうか？ 罪人の死体を奪い、それを焼く妖怪だ。

まあ、それだけのだけど。

あんな感じに人懐っこいし、可愛いしで、性欲が残ってたら恋人なんていう甘い関係になってたかもしれない。

まあ……、僕の実力の関係上それは絶対ありえないんだけどね。

「とうあつ！」

「うわ、驚いた」

本日二度目である。

今度は白を主体に緑の装飾が入った服を着込んだ黒いショートカツトの髪に黒い眼の少女が抱き付いてくる。

彼女も名前は無い。そして例の如く必要ない。

彼女は何者か、猫か。いや違う。^{レイヴン}鴉だ。

いや……ワタリガラスではないからレイヴンじゃあないか。じゃあクロウ？ でも、クロウっていうと、爪のイメージあるしなあ。

まあ。そんな事はどうでもいいとして、抱き付いてきた地味に胸の大きい彼女。彼女は地獄鴉、僕と同じ種族だ。

彼女も最近人の姿になれるようになったばかりだが、基本的に元の猫の姿でいたがるあの子とは違い、僕と同じようにずっと人の姿をしている。

まあ、僕は元々人間だから此方の姿のままなのは普通だと思うんだけど、彼女は何故人の姿のままなんだろうか？ 鴉の姿のが飛び

やすいし、疲れないだろうに。

しかし、そこらには何か深い事情があるのかもしれない、いや、彼女はお世辞にも頭が良いとは言えないから、多分人の姿になれたのが単純に嬉しくてずっと人の姿でいるだけだろう。所詮その程度。深く考えないのが彼女のいい所でもあり、欠点だ。……僕もだけど。

「あは、驚かせちゃった」

「実は二回目だったりして」

「え、ウソ」

心底意外そうな表情をする彼女。うん、昨日も同じやり取りした。ああ、そうそう。彼女と僕は一応には元が地獄鴉なので背中に真っ黒な翼があったりする。

僕は邪魔だから畳んでるんだけど、彼女は思いっきり広げてる。疲れないのかな？

「そして、このやり取りはココ一週間ずっと続いてたりして」

「ウソ!？」

いやいや、ウソじゃないから。本当だから。

先ほどお世辞にも頭が良いと言えない、そう言ったと思うが、訂正させて貰おう。

彼女は鳥頭だ。

鴉なんだから当たり前じゃね？　と思ってるそのキミ、僕をもう一度見てからそういうことは考えたまえ、全てを忘れられたらどれだけ楽か。

「しかも出てくる時間も方法も全部同じだったりして」

「ええ？　ウソくさいなあ。第一、それだったら驚かないじゃん」

「いやいや、驚くよ。それだけ同じことを繰り返していても覚えて

ない君の頭に」

「……バカにしたりする？」

「いやいや。褒めてるんだよ、全てを忘れられるのはいいことさ」

「そうかなあ、私はあなたの名前とか忘れたくないけど」

「……というか覚えてるの？」

「覚えてるよ！ えっと、二千路凌にせんじゅうのへ、でしょ」

なんと、覚えていた。

三歩どころか三秒で物事を忘れそうな彼女が僕の名前を覚えていた。

なんか感動。

「おお、凄い凄い。ご褒美に頭を撫でてあげよう」

「わあい」

言った直後、頭を突き出して羽をバツバツサ忙しく動かしてはじめる彼女。そんなに嬉しいか。というより羽毛が、羽毛がドサドサ抜けて大変なことに。……ああ、そろそろ生え変わりの時期か……。鳥に生え変わりとかあったっけ……？

というか、この灼熱地獄は一年中夏なんだけど。

しかしまあ、超ニコニコ顔で頭を撫でるのを心待ちにしている彼女を放っておくことは人道に反するので、撫でてやる。

髪熱っ。

しかしまあ、そんな不満も、気持ち良さそうに眼を細める彼女の顔を見てると薄れてくるわけで。

「さて、今日は何しに来たのかな？」

「えっと、傭兵鴉のお話を」

「その話は昨日聞かせてあげたでしょう。物凄く嬉しそうに聞いた拳句にもう一度って強請ったじゃないのさ」

「うにゅ？ ……覚えてない」

「まあ、忘れられるのはいいことさ。次に聞いたときも楽しめる…
…。でも、話す方の僕はつまらないので今日はダメね」

実は即席で作ってる話だったりして。

僕が軽やかに彼女の要求をお断りすると、彼女は深く一考してから満面の笑みになり、提案をしてきた。

「じゃあ名前！ 私も名前が欲しいよ」

一考してそれが。

「自分で考えればいいでしょうに」

「うー……。だって、私。凌みたいに頭良くないし」

「僕も頭はいい方じゃないと思うけどなあ、考えるの面倒ですぐ放り投げちゃうし」

「そんなことないよ！ 私じゃ、二千路凌なんていうカッコイイ名前絶対思いつかないもん」

「カッコイイかねえ」

「カッコイイよぉー……。なんで私の言う事全部否定するのぉ？」

若干涙目になり始めた彼女。

この顔を見ているとつい苛めなくなるが、そんな外道ではないので我慢。

……。しかし、こうして見て見るととても彼女は魅力的だ、元気で明るい性格。適度に大きい胸。綺麗な整った顔。まあ、頭の方は少し残念だけでも……。

もしも僕に性欲が残ってれば恋人とか甘い関係になっていたかもしれない。幸い、彼女は頭が残念なお陰で僕的能力も効果が薄いし。まあ、性欲とか枯れ果てただけ……。

できないわけじゃあない。でも、やろうとは思わないし、やりた
いなんて思わない。

そついや、ここ最近ずっと自慰行為も行っていない。というか、自
慰ってどうなんだっけ。

それに、最近の人生ずっと童貞か処女で一生終えてるなあ……。
久々に恋愛してみたい。とか思えたら素敵だったり。

「で、名前名前！」

「ううん、仕方ないなあ。名前ねえ」

名前かあ。

「できれば二千路みたいなカッコイイ名前がいいなあ！」

カッコイイかなあ。その名前……。

というか、二千路は名前じゃなくて名字なんだが、彼女はどうせ
理解できないので言わない。

カッコイイ名前なあ。取り合えず最後には路付けとけば多分、カ
ッコイイだろうから……。

名字はナント力路。……ううん、鳥。そついや、不思議な鳥を霊^れ
鳥^{いう}とか呼ぶんだっけ。

なら名字は霊鳥路。次に名前。

少々酷いかもしれないけど、頭の中が空っぽということと、ノー
パンということで、空^{うつほ}と名付けよう。

愛称は『おくう』か、うんうん。ライトノベル作家として生きた
人生がこんなところで役に立とうとは。

「よし、できた」

「ホント!？」

「今日から君の名前は空。霊鳥路空だ^{れいじう かつほ}」

「おお！？」

「ちなみにこう書きまーす」

地面に指で丁寧な靈鳥路空、と書いてやる。

ちなみに彼女。読み書きできない。後で教えてあげようかな。

「おおおお？」

「覚えられる？」

「が、がんばる」

頑張れ、その意思が明日まで頭の中にあるかどうか怪しいけれども。

とか意地悪な事をする気はないので……、ううん、名札とか作ってあげようかな。

取り合えずそこ等の岩を切り取って、適度な大きさに削り、そこに『靈鳥路空』と書き込んでやる。

「はい。名札。忘れたらこれ見て確認するといいよ」

「おお、カッコイイなあ……」

ウツトリとした表情で石製の名札を眺める彼女、もといおくう。

……あ、おくうつてのも教えとかなきゃ伝わらないか……。

「そして、今日から君はおくうでもある」

「え？ 億劫？」

なんでそんな言葉を知ってるんだろ。名字を知らないのに。いや、知ってるのかな？

……いやいや、多分億劫は僕が教えたんだろ。ダルい時に。

「おくうだつて」

「うにゅ？ 霊鳥路空なのにおくうなの？」

「まあ、そうだね」

「ううん、分からね」

「じゃあ、こう考えなよ。あんまり仲良く無い人は君の事を『空』あるいは『霊鳥路』と呼ぶ。そして、君と仲良くなりたいと思ってる人は『おくう』と呼ぶ」

「うん？ 分かったような、分からないような……」

「分かったことにしておきなさいな」

「うん」

そこで頷く少女は恐らく君意外いないだろう。なんて心なき言葉は口に出さない。

「さてさて、おくうよ。名前を上げといてなんだけど。覚えられるの？」

「覚えるよ！ あと、おくうつて、ちょっとカッコ悪くない？」

君のカッコイイカッコワルイの基準が分からない。

「そうかな、でも可愛いよ」

「か、かわっ！？」

「うん？ どうしたのかね、そんなに真っ赤になつて」

「や、だつて……。凌に可愛いと言われたことないんだもん……」

「マジで？」

「まじで？」

リピートすな。

と言いたところだけど。恐らくはマジで？ の意味が分からないだけだろう。なので放っておく。

いやあ、しかし、可愛いと一度も言ったことが無かったとは……
一度ぐらいあると思うけどなあ。

「ね、ね！ もう一回言って！ もう一回！」

「あーやー、いーやーですー」

「ねえ、お願い！ あと一回だけ！ ね！？」

そう言いながら後ろから抱き付いてくるおくう。

暑い。暑くないけど暑い。

しかも、また羽暴れさせてるし……。

ああ、また羽毛が散って……。

しかしまあ、なんといいますか。

こんな時間も幸せだなーと思うわけで。

「……何、してるの？」

「あ」

「う？」

前言鉄塊粉碎。幸せな時間は終わりを遂げました。

バトンタッチ（後書き）

今回、割とテンプレじゃないんじゃないだろうか。どうだろうか。
そして次回更新は溜め分が切れたので未定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1353u/>

よだれがでるほどこのせかいをあいしてる。

2011年6月28日21時55分発行